

明日香村 文化財調査研究紀要

— 第 14 号 —

目 次

八角墳の再検討	辰巳 俊輔 (1)
古代檜隈の渡来文化 (上)	長谷川 透 (21)
王陵の地域史研究 ～飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅸ～	西光慎治編 (37)
岩屋山古墳の三次元計測から －作業の概要と課題－	金田 明大 (57) 高橋 幸治

平成27年 3月

明日香村教育委員会

八角墳の再検討

辰巳 俊輔

I. はじめに

2010（平成22）年、奈良県明日香村に所在する牽牛子塚古墳の発掘調査が実施され、二上山凝灰岩を墳丘全面に施した八角墳であることが判明した。同年には、隣接して新たに発見された越塚御門古墳の存在により、牽牛子塚古墳は『日本書紀』天智四年条との関連が指摘され、大きな話題を呼んだことは記憶に新しいところである。その後、野口王墓古墳における過去の調査成果が公表され、従来から指摘されてきた通り、墳丘全面に牽牛子塚古墳と同様の二上山凝灰岩を施した八角墳であることが再確認されることとなった。

牽牛子塚古墳や野口王墓古墳などの八角墳については、立地や埋葬施設、出土遺物、文献史料などからすでに大王墓との関連が指摘されている。このことから八角墳が大王墓と直接的な関連性が認められるのは当然であり、飛鳥時代の一様相を解明する上でも極めて重要な位置にあることは周知のとおりである。また、近年における発掘調査の増加に伴い、全国的に八角墳の事例が確認されている。これらの成果を踏まえ、各種方面で八角墳に関する研究が行われているが、未だなお課題が山積みとなっているのが現状である。特に全国各地で八角墳の事例が増加するに伴い、その意義についても論及する研究が行われている。そこで本稿ではこれまでの先学諸氏による調査研究を整理したうえで、八角形の思想や被葬者像、さらには年代といったさらなる研究の導入とすべく、八角墳の定義等について再検討を試みる。

II. 調査研究史

江戸時代末期の山陵史家である蒲生君平は『山陵志』において「前方後円墳」という用語を初めて用いたとして広く知られている。この時代に前方後円墳という墳形が認識されていたということは円墳や方墳なども当然知られていたと想像できる。一方、今回取り上げる八角墳については、古墳の墳形に関する記述が現れる江戸時代にはすでに築造当時の姿から大きく変化し、その存在すら長い年月のうちに忘却されていた。以下で述べるように、それから八角墳に関する記述が現れるのは明治時代になってからである。

八角墳の研究は八角形という形状の意義を捉えようとする研究に端を発し、発掘調査の事例増加からその検討対象が畿内だけでなく全国各地に広まっている。さらにはそこから派生して八角墳の被葬者が大王である蓋然性が高いとする研究も発表され、大王墓としての八角墳の位置づけや大王墓としての八角墳とそれ以外の八角墳の差異に関する研究も行われ、様々な視点から考察が試みられている。以下、現在の八角墳研究の現状及び今後の課題について簡略に整理する。

【大王墓の調査】

1880（明治12）年、京都市の高山寺から1235（文暦2）年に明日香村所在の野口王墓古墳が盗掘を受けた際の取調べ調書として作成された『阿不幾乃山陵記』が発見された（田中1906）。この発見を機に、それまで橿原市の五条野丸山古墳が天武・持統天皇⁽¹⁾の檜隈大内陵とされていたのを、野口王墓古墳に治定変えするとともに、中世における野口王墓古墳の実態

が明らかとなった。そこには「件陵形八角、石壇一匝、一町許坎、五重也」と記されており、墳丘が八角を呈し、石壇が一町ほどめぐり、五重つまり五段に築かれていたことが窺える。『阿不幾乃山陵記』が発見されるまでは、様々な文献に絵図とともに記載されていたが、いずれも盗掘による改変が著しいため、八角墳と認めることはできなかった。しかしこの発見により、できる限り築造当初に近い野口王墓古墳の墳丘の様相が明らかになるのに加え、初めて八角墳の存在が確実となった。

発掘調査により八角墳の存在が最初に知られたのは明日香村の中尾山古墳である。この調査では、墳丘全面に川原石が施され、八角形を呈する三段築成の墳丘とそれをめぐる二重の外部施設が検出された（明日香村教委1975）。中尾山古墳は江戸時代よりその立地や埋葬施設の構造などから文武天皇の檜隈安古岡上陵であると指摘されており、この調査によって当該期における大王墓の墳丘として八角墳を採用している蓋然性が高まった。

その後、宮内庁によって天智天皇の山科陵と治定される京都市の御廟野古墳（笠野1987）や舒明天皇の押坂陵と治定されている奈良県桜井市の段ノ塚古墳（笠野1995）の調査が実施され、墳丘表面にそれぞれ花崗岩、榛原石といった石材が施した八角墳であることが判明した。さらに奈良県高取町に所在する東明神古墳の発掘調査では、八角墳の可能性が示唆され、7世紀中頃から8世紀初めにかけての大王墓及びそれに準ずる人々の陵は八角墳として築かれることが指摘されている（河上編1999）。

2010年には牽牛子塚古墳の調査が実施され、墳丘全面に二上山の凝灰岩を施した八角墳であることが判明した（明日香村教委2010）。さらには1959（昭和34）年に野口王墓古墳の発掘調査が実施され、牽牛子塚古墳と同様に凝灰岩を施した八角墳であることを報告した調査資料が情報公開制度により公表され、後に多くの報道機関によりその内容が報告された（柳沢2013）。

2013（平成25）年には牽牛子塚古墳の発掘調査報告書が刊行され、牽牛子塚古墳及び隣接する越塚御門古墳の詳細な情報及び図面や写真、さらには野口王墓古墳の1959（昭和34）年・1961（昭和36）年調査時の写真や図面が掲載された論文、中尾山古墳の再検討も行われ、八角墳に関する研究の材料は以前に増して充実したものとなっている（明日香村教委2013）。また同年には末永雅雄氏らにより1975（昭和50）年に段ノ塚古墳、御廟野古墳、野口王墓古墳の踏査が実施され、その際に作成された墳丘表面の石材の見取り図や墳丘の復元等の考察が掲載された調査概報が公開された（末永他2013）。

これらを受け、2014（平成26）年には陵墓関係の15学協会による野口王墓古墳の立ち入り観察が実施され、墳丘の規格についてなど、具体的な検討が行われた（岸本2014）。

【思想に関する研究】

八角墳の築造背景にある思想の研究は仏教的思想との関連として認識され始めたのが契機である。これは後述するように野口王墓古墳が八角墳であるとする『阿不幾乃山陵記』の記述が研究の基軸となったためである。最近では仏教以外にもいくつかの見解が提示されており、研究はより一層深化している。

藤沢一夫氏は野口王墓古墳を「封土を塔婆的に観念し造営した更なる好例」として取り上げた。それは『阿不幾乃山陵記』に記されている八角五重の姿を前提に、「その形態から塔婆の意味における造営を考えることができる」とし、「塔婆は本来、仏舎利を納蔵した半球状の封土であるが、それが木材、石材、埴材等をもって構成せられるようになると、その材料から四

角の平面形が一般的なものとなり、より町重なものが六角、八角等の平面形態を有すようになる」とした。そして野口王墓古墳の墳丘について「しかるとき八角形のごときを塔婆の本来の平面形態と考えるような錯覚に陥る」と関連づけた。また八角墳について、奈良県生駒市の竹林寺にある行基墓に存在したと想定される卒塔婆について言及し、同時代である飛鳥時代の墳墓も仏教の影響があったと想定した（藤沢1959）。

安井良三氏は前述した『阿不幾山陵記』の記述から、「墳形が仏寺の八角堂を基準」とし、「遺物のなかには光背様の杏葉、台付銅製盒子鉢等の仏教関係遺物にみられるものが多数含まれているので、この古墳（野口王墓古墳）の主は仏葬によったものである」とした（安井1964）。

菅谷文則氏は野口王墓古墳と八角円堂について検討し、「仏教と古墳が直接的関係をもつようになるのは、安井良三氏が指摘されたように、やはり天武天皇大内陵の建立の時点前後に求めるべきであろう」とした。野口王墓古墳については「天皇の遺骸そのものを、仏舎利的に理解していた痕跡がある」とし、そこに「供養堂としての意義を不可・定着された」のが八角堂であると解釈した（菅谷1969）。

井上薫氏は野口王墓古墳の墳丘実測図において、直線箇所が見受けられるとされ、それらを結ぶと八角形か七角形に復元できることから、「封土は円形に近いもので、インドのストーパ……の形を模したものである。」とした（井上1975）。

網干善教氏は中尾山古墳の調査を受けて、これまでの仏教による卒塔婆を起源とする研究に疑問を投げかけ、別の視点から八角墳について考察した（網干1975）。それに検討を加え、さらに詳細にまとめた論文を4年後に発表した。それによると八角形という形状の意識は『旧唐書』や『大唐郊祀録』の記述から、「八角は「円」の意識とするよりも、その根底にあるものは「方」である」とし、「天を祭る円壇をもって為し、地を祀るに方壇をもって行うということが「天円地方」の思想である。したがって「地は方なり」ということであり、地は国土、国家を意味する」と述べた。つまり、八角とは方であり、方は地であることから、それが国土、国家を示す具象として示した。そしてそれは「中国の古来からの政治的思想や制度が、わが国の政治思想や制度特に大化改新を契機として導入した、政治理念が根底をなすもの」とし、八角墳を「中央集権的律令体制の一つの具象」として認識した（網干1979）。

網干氏の研究に対して、田村圓澄氏は「高御座が八角方墳であることと、天皇陵が八角墳であることは、本質的に異なっており、同一の次元で論ずることはできない」とし、八角墳の初現とされるのが押坂陵である蓋然性が高い段ノ塚古墳であることから、舒明を「仏教帰依に踏み切った最初の天皇」とし、その仏教思想から「死後、仏国土への往生を求めている天皇の信仰と、そして死後の天皇の安穩を願う近親・側近の祈願の結集として、仏国土の象徴である蓮華の八弁になぞらえ、八角墳の陵墓が築造された」と解釈した。また天武・持統天皇の檜隈大内陵とされる野口王墓古墳が八角墳であることについては、前提として飛鳥の都が仏都であり、「仏都のなかに築造されたことも両天皇の仏教信奉の事実を考えたとき、初めて理解できる」とし、仏教の思想が大いに影響しているとした（田村1981）。

直宮憲一氏は「天皇陵と呼ばれて来た古墳以外にもその墳形を有するもの」としつつ、「規模において天皇陵と他の八角墳の間には隔絶した違いはみられる」と示したうえで、「八角墳が即位された天皇陵にのみ、その形態を取ることができないものであるならば、他の八角墳はその絶大な権威を侵すこととなり小規模であったとしてもそのような形態を取ることが不敬にあたり、かつそのような形態を作ることがはたして許されるものであろうかという疑問が残る。」

とし、八角形自体に意味を求めた。それにより、「陰陽道がその底辺にある八卦というト占を持っており、死者の霊を最良の八卦に導こうとする所作が八方位を示す八角墳を生むことになった」とし、陰陽五行説との関係を示唆した（直宮1988）。

【構造に関する研究】

思想に関する研究はいずれも野口王墓古墳と中尾山古墳をはじめとした畿内の大王墓に採用された墳形であることを前提としたものであった。八角墳の意義が前述のいずれであれ、大王墓が他とは異なった墳形を採用したという点では共通した認識であった。しかし発掘調査事例の増加により、これら大王墓以外にも畿内以外において八角墳の存在が指摘されるようになるとともに、現在まで大王墓と畿内以外に分布する八角墳の比較研究も行われている。

大王墓としての八角墳に関する研究

白石太一郎氏は畿内の横穴式石室や出土須恵器の年代を検討し、終末期古墳の変遷を整理する中で八角墳について述べている。そこでは「それまで規模の差こそあれ、他の豪族の首長と同じ墳形を採用していた大王が、大王のみ固有の特殊な型式の陵墓を営むようになるわけで、当然大王の地位の確立と密接に関連するもの」とし、背景に「大王を諸豪族から隔絶した地位におくこととともに、大王を中心する中国風の中央集権国家の樹立」があったと想定した（白石1982）。

河上邦彦氏は大王墓とされる八角墳について、上下段の墳形の差異について着目し、「八角形墳と呼んでよいのは天武陵・東明神古墳・中尾山古墳の三基であって、それより古い舒明陵・岩屋山古墳・天智陵については上八角下方墳と呼ぶべき」とした。これにより、八角墳は「方墳から出現したもの」とし、6世紀末以後の大王墓は前方後円墳、大型方墳、上八角下方墳、八角墳の順に変化するとした（河上1999）。

今尾文昭氏は大王墓とされる八角墳を取り上げ、立地、方形壇、開口位置、規模、墓室、正面構造、墳丘の方位、火葬の有無について分類を行い、その結果からそれぞれに被葬者を推定した。さらに都城との関連性を取り上げ、「七世紀中葉の舒明陵以降、連続して採用されたとみなされる八角墳に込められた理念がここに新益京の都城計画と一体化することで、より高次元の形を表徴させた」とした。なお八角形という形は「大王ないし天皇支配が四方八方の全土に及び、その安寧が保たれんことを可視できるように古墳の墳丘に表示したもの」とした（今尾2005）。

林部均氏は牽牛子塚古墳の調査成果を受け、押坂陵とされる段ノ塚古墳、斉明天皇の越智岡上陵とされる牽牛子塚古墳、山科陵とされる御廟野古墳は後世の改変によって八角墳になったとし、「八角墳の出現は天武陵に求めるのが妥当」との見解を提示した。そして「大王は、古墳時代から飛鳥時代後半まで、一貫して有力豪族や有力首長と同じ形態をした古墳をつくりつづけてきたが、この段階にいたって、はじめて特別なかたちをした、そして、突出した規模をもつ古墳を造営するようになった。大王は、ヤマト政権の連合政権的な性格から脱し、律令国家の「天皇」として、律令官人制の頂点に君臨する特別な存在へと止揚される。」と八角墳の意義を述べた（林部2012）。

全国各地に分布する八角墳に関する研究

一瀬和夫氏は終末期古墳の墳丘を取り上げる中で、広島県福山市の尾市第1号古墳について横口式石槨から墳丘基準線を設定し、それをもとに検出されている列石をあてはめた結果、八角形とするより、「円を描く方がなお一層、石列との合致を見出すことができる」とし、この

古墳を「円墳である可能性が高い」と結論付けた（一瀬1988）。

脇坂光彦氏は大王とされる八角墳について「大王家の中でもきわめて限定された人物のみが採用できたものであり、それを導入した背景には、中国の政治思想が大きく作用していた」とした。地方の八角墳については、「①正確に八角形を呈しているものはない、②墳丘はいずれも小規模である、③埋葬主体は、尾市古墳以外は割石を積んだ小規模の横穴式石室である、④時期を把握しにくいものもあるが、7世紀代の構築と考えられる」とし、さらに「相違点もいくつか認められる」とした。そして大王墓とされる八角墳とそれ以外の八角墳の相関性については、「どのような結びつきがあったかは明らかでない」とし、「多角形墳はそれぞれが多様な内容をもっているため、各古墳の成立背景の研究にはそれぞれの地域性を十分考慮せねばならない」と述べた（脇坂1992）。

猪熊兼勝氏は外護列石に着目して、それぞれの年代を検討し、八角墳を「各地の外護列石墳の到達点」とした。特に7世紀の大王墓は「試行錯誤を繰り返しながら「八角形」になる」とした（猪熊1995）。

寺社下博氏は八角墳だけでなく六角墳の存在を認め、それらを多角形墳と総称し、特に大王墓以外の八角墳においては「大王（天皇）陵とは異なる性格を考えざるをえなくなっている」とした。そこで、大王墓以外の八角墳の多角形墳を分布、立地、規模などといった諸要素から分類し、「共通点と相違点を見出」した。さらに「大王陵の八角墳化に伴ってその影響と規制を受けつつ継続された」とし、その背景としては「方墳形態・円墳形態をともに否定する立場を基本にして武力による地方の拡張製作に携わった人々に地方を意味する八角形という形態が与えられた」と考えた。八角形自体については「陰陽道－八卦思想の存在は十分に考慮しなければならない」という見解を示した（寺社下1997）。

小林利晴氏は、大王墓とそれ以外の八角墳を外護列石と墳丘盛土、築造年代によって比較したうえで、「畿内の八角墳は規模の面でも地方の八角墳を圧倒しており、両者が違った意味合いで築造されたことは明らかである。おそらく直接的な関連性を求めることは難しい。」としつつ、三津屋古墳については「全ての属性が畿内の八角墳と一致する。地方の八角墳の中で三津屋古墳だけは、畿内の八角墳と何らかの関連性がある」と考えた。さらに「地方の多角形墳の分布には一貫性がなく、それぞれの間に関連性を考えることは出来ない」ことを明らかにした（小林1997）。

右島和夫氏は群馬県下の八角墳とされる古墳を検討し、「群集墳を構成するような通有の古墳に広く多角形墳が築造されることが明らかとなってきた」としたが、それらが「必ずしも角部を強調しようとする構造的意図が見出したがい」とし、「意図的な「多角形墳」として位置づけることが妥当か」と問題を提起している。そしてこれらを「円墳の一形態」として捉え、「多角形円墳」を提唱した。さらに各地域における多角形墳を中央と結びつけるのではなく、「各地域における古墳の動向・出現の必然性等の観点から再検討を経た上で論を展開させてもよいのでは」と、各地域での位置づけの重要性を述べた（右島2001）。

小川裕見子氏は地方の八角墳について、大阪府茨木市の桑原西古墳群の土器編年を基軸に編年を行い、畿内の八角墳が築造される前後の時期を通じて築かれることを明らかにした。そして、御廟野古墳の出現とほぼ同時期に畿内周縁部の群集内において八角墳の築造が継承されず、地方にのみ築かれるとした。その背景として、「群集墳など下層の墳墓においては築造できないという墳丘規制」があるとし、地方においてのみ築かれている意義を「規制がこれらの地域

にまでは強く及んでいなかったため、模倣が許された」と理解した（小川2009）。

新納泉氏は大王墓としての八角墳と岡山県北房地域の定東塚・西塚古墳、定北古墳、大谷1号墳をそれぞれ立地、墳丘、年代などで比較した。畿内の中心地域以外の八角墳を「築造時期が確実に七世紀前半にさかのぼる例は現状では確認できない」とした上で、「大王墓を模してつくられたもの」と考えた（新納2012）。

以上が八角墳に関する研究略史である。これらを概略するとまず取り上げなければならないのが『阿不幾乃山陵記』の発見である。これにより八角墳の存在が初めて知られることとなり、同時に野口王墓古墳が檜隈大内陵であることがほぼ確実視されるようになった。そして仏教を基軸として思想的研究が多数行われることとなった。一方、網干氏により現在もなお有力な説となっている中国思想説といった新たな見解も述べられ、それまでの仏教との関わりは否定されつつある。その後の研究では、未だ仏教や陰陽五行説との関連を示唆する研究も行われているが、おおむねこの網干氏の研究が取り上げられ、現在もなお多く支持されている。また、全国各地で八角墳の事例が報告されるなど、資料がより充実したものとなってきている。それぞれ個別に検討が行われたり、各地域における位置づけなども提示されたりし、全国的に活発な研究が行われている。

さらに牽牛子塚古墳のように大王墓とされる八角墳についても再調査が行われ、他の八角墳との比較も行われている。そして近年は野口王墓古墳において過去に行われた踏査や調査の報告も行われ、考古学だけでなく古代史学にも大きな影響を与えている。

以上のように、1980年代までは八角形という思想の意義を中心に議論されてきたが、現在では全国各地における事例増加の影響から、大王墓としての八角墳と各地に分布する八角墳について比較検討が行われるようになった。八角形の思想的背景については網干氏の研究が定説化しつつあるが、全国各地の八角墳の比較検討はいまだ議論の余地が充分にある。また大王墓とされる八角墳の調査も行われ、特に墳丘に関して詳細なデータが得られている。

そこで本論では八角墳研究の基礎とすべく、全国各地に点在する八角墳について、新たに定義を定めて再検討を行う。

Ⅲ. 野口王墓古墳と牽牛子塚古墳の墳丘

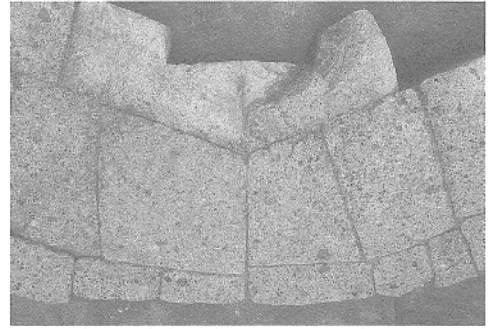
発掘調査により八角墳として報告する場合もあれば、後の研究で新たに八角墳と指摘される場合もある。つまり、各々で八角墳として認識されているものの、その定義は定められておらず、個別に検討を行っているのが現状といえる。現在八角墳とされている古墳は、貼石、裾石、排水溝、盛土・地山成形、等高線などといった諸要素からその根拠を見出し、墳形を判断していたのである。

そこでまずは確実に八角墳と判断できる古墳を指標とし、それを構成する要素をもっていくつかの定義を設定することとする。その指標となる八角墳として、確実かつ類似した構造であることが明らかな野口王墓古墳と牽牛子塚古墳を取り上げ、最新の研究成果をふまえながら、まずはその概要及び墳丘構造について述べる。

【野口王墓古墳】

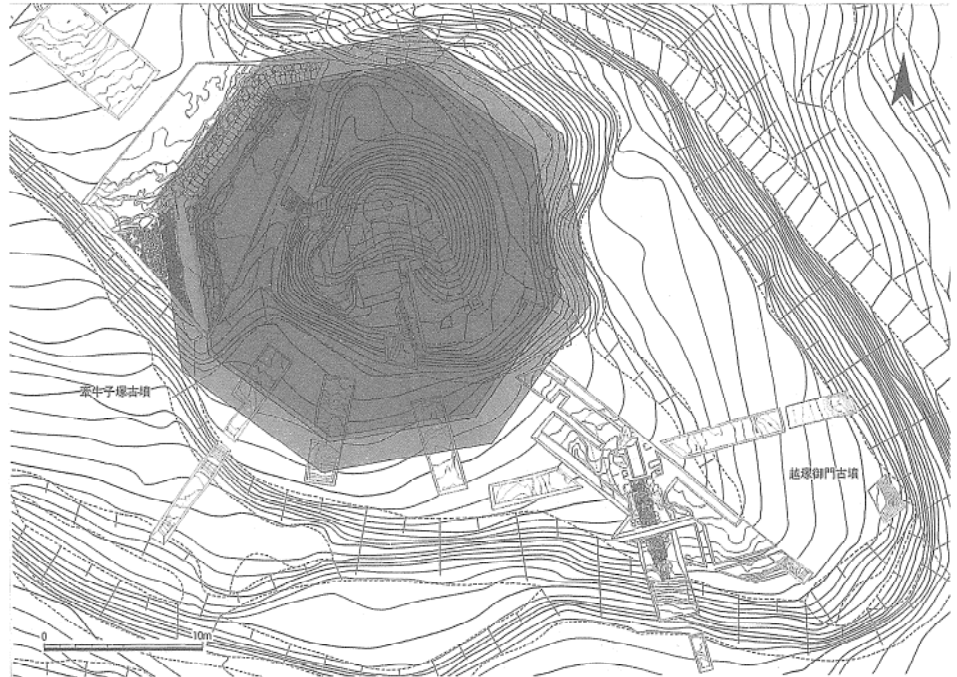
野口王墓古墳は東西にのびる丘陵東端から南に張り出す尾根の頂上に位置している。この丘陵は西から梅山古墳、カナヅカ古墳、鬼ノ俎・雪隠古墳、野口王墓古墳とほぼ等間隔に築かれており、整然とした造墓計画が指摘されている（西光2002）。古くからその存在が知られてお

石を並べ、中央にそれに直行する形で設置し、平面形が「H」状となるよう切石が敷き詰められている。一部で石材の角度が135°となる箇所が存在することから八角墳であることが判明した。また、堆積土内からは、切石の端面が約65°に加工された石材が7点出土している。このような傾斜角を有する石材の出土から、本来は墳丘斜面に施されていたことが想定できる。さらにこの裾石敷の西側には川原石を敷き詰めた二重のバラス敷が取り付けられている。このバラス敷の中央では裾石敷と平行して仕切り石が設けられており、これを境として西側は約0.1m低くなっている。しかし北西部の裾石敷の外側では、花崗岩風化土の地山面となっており、バラス敷は確認されていない。ここでは、約0.6mの花崗岩



第3図 牽牛子塚古墳 角部

抜き取り痕が存在



第4図 牽牛子塚古墳 墳丘復元図 1/500

することから、地山の法面処理として、花崗岩が施されていたと考えることができる。

IV. 八角墳の再検討

ここでは、前述したように野口王墓古墳と牽牛子塚古墳の墳丘を指標として八角墳の再検討を行う。まずは定義とすべく、いくつかの条件を提示する。

そもそも八角墳であることから、角部が存在することは言うまでもない。角部が明確でなければ、円墳とも方墳とも判断できてしまう場合もあるからである。調査の結果、野口王墓古墳では7箇所、牽牛子塚古墳で1箇所確認されている。また八角墳として意図的に築くには、角部に何らかの強調が必要となるため、目地等の存在が必須となる。野口王墓古墳では角部の地覆石上面に135°の切り込みを入れ、斜面となる石材を載せていたと考えられる。牽牛子塚古墳は裾石敷の一部に135°となる角部が明瞭に残存している。いずれも角部を明確に創出していることがわかる。

さらには平面プランが正八角形を意図していることも当然の条件となってくる。正八角形は一つの外角と中心角は45°で、内角は135°となる。牽牛子塚古墳の角部について、斜面ではなく平坦面で確認できたことから、ズレが生じることなく、135°を呈している。しかし斜面等に



第5図 分布図



第6図 分布図(拡大)

- 1.三津屋古墳 2.伊勢塚古墳 3.武井廃寺古墳 4.一本杉古墳 5.籠原裏1号墳 6.稲荷塚古墳 7.経塚古墳
 8.垣内田10号墳 9.御廟野古墳 10.御堂ヶ池20号墳 11.国分45号墳 12.段ノ塚古墳 13.岩屋山古墳
 14.牽牛子塚古墳 15.中尾山古墳 16.野口王墓古墳 17.東明神古墳 18.上城古墳 19.上ノ山古墳 20.石宝殿古墳
 21.桑原C3号墳 22.中山荘園古墳 23.尾市第1号古墳 24.梶山古墳 25.福本70号墳

設置されている場合は、造営からの年月を考慮すると風雨による影響などで 135° にはならず、さらには施工途中等の作業においても少しのズレが生じる場合も想定される。基本的には正八角形を意図して造営していなければ、各角部において 135° に近い数値になる可能性が低いことから、 135° と大きく異なる箇所がある場合は八角墳と定めることはできない。

そして最後に重要な要素となってくるのが、墳丘全面に貼石または葺石が施されているかという点である。墳丘全面に貼石等が施されていない場合は、角部の 135° と同様に風雨の影響を受けて土砂が流出し、盛土によって角部を形成しても恒久的な墳丘を維持することができない。また八角墳という墳形はそれまでの円墳や方墳との差異を明確に示すために新たに創出されたものである可能性が高いことから、視覚的に認識できる形状でなければ、造営者側にとってその本来的な意味をなさなくなってしまうため、貼石等は必須であると考えられる。以上をまとめると以下のとおりである。

①角部について石材の配置等からそれが明確である。② 135° となる内角が存在し、平面プランが正八角形を呈する。③墳丘の全面に貼石等が施されている。

これらを定義とし、これまで全国で八角墳として報告・指摘されている25基の古墳について再検討を試みる。なお角部が確実に存在し、円墳でも方墳でもない場合について、定義の①を満たしていれば、正円や正方でないという観点から「多角円墳」又は「多角方墳」と呼称する⁽²⁾。

【三津屋古墳】群馬県吉岡町

宅地造成に伴う事前の竹林伐採作業中に古墳状隆起が確認され、調査に至った古墳である。

そのため、残存状況が良好でなく、埋葬施設に関しては基底石の一部しか残存していなかった(吉岡町教委1996)。

墳丘についても大きく削平されていたが、北半分は比較的良好に残存していた。調査で判明した墳丘の貼石は人頭大の川原石を用いて、斜面全体に施工されている。八角形の角部の石材は他より大きく、通し目状に積みあげ、それ以外の面は乱雑に積み上げている。コーナー部分は3か所検出され、いずれも135°に近い数字である。以上のことを勘案すると定義のいずれにも当てはまることから、八角墳であるといえる。

【伊勢塚古墳】群馬県藤岡市

伊勢塚古墳は墳丘に幅2mの調査区を中心から四方に伸びるように設定している。これらの調査区からは墳丘裾が見つかり、それらを線でつなぐと隅丸方形を呈することがわかる。暗渠排水溝や石積が直線を呈していることや、墳丘実測図の等高線の変化から八角墳であると指摘されている(志村1997)。

調査区範囲の制約により墳丘構造の全貌は不明であるが、これまでの調査成果を考慮し、直線箇所がいくつか検出されたことを重要視すると、基本的に方形プランでそれぞれの角を隅切にした形状となる可能性が高い。角部が確認できるが、それぞれの内角が135°となり、正八角形として復元することは困難であることから多角方墳であると考えられる。

【武井廃寺古墳】群馬県桐生市

武井廃寺古墳は当初、古墳の名称からもわかるように塔の基壇として理解され、廃寺の一部と認識されてきた(尾崎1958)。しかし発掘調査の結果、側柱を支える礎石や根石などの痕跡が周辺では認められず、近辺において瓦などの建築部材等が出土していないことや伽藍配置の推定も困難なことなどから、廃寺ではなく骨臓器を納める火葬墓の可能性を指摘された(平野1986)。そして斜面上に築かれていることから段築の高さに差があるものの、三段築成で南側のみ四段となる全面葺石に覆われた八角墳であると推定された。角部を強調する明確な石材は見受けられないが、意図的に角部を創出しているとともに、石材の配置状況から明らかに平面プランが正八角形を呈していることから武井廃寺古墳は八角墳と判断できる。

【一本杉古墳】群馬県高崎市

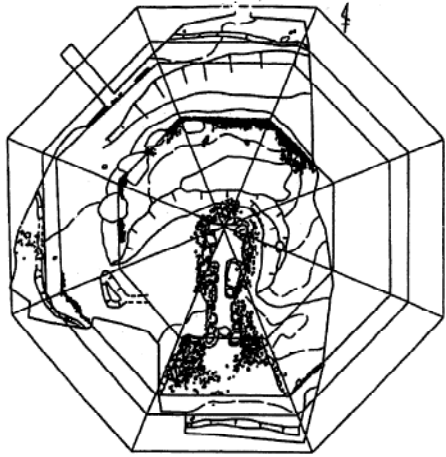
一本杉古墳は、1960(昭和35)年に調査が行われ、墳丘裾の三箇所の葺石の配列が約135°~140°の角度で屈曲し、その角部は稜を有していることから八角墳と推定されるようになった(梅澤1961)。

しかし各辺の距離が異なり、検出した葺石及び測量図を照らし合わせても正八角形にはならず、角部の稜とされる葺石はそれぞれの角部で状態が異なることから、統一的に施工された可能性は低い。近年当時の調査担当者によって墳丘の再検討が行われ、前述の問題点を上下段築成による傾斜の影響により、ブレが生じていると解釈された(梅澤1997)。ただ、調査範囲の狭さなどから現段階ではそれをブレとして認めることはできず、角部を強調する葺石の存在し、全面に貼石が認められないことから、多角円墳として捉えたほうが妥当と考える。

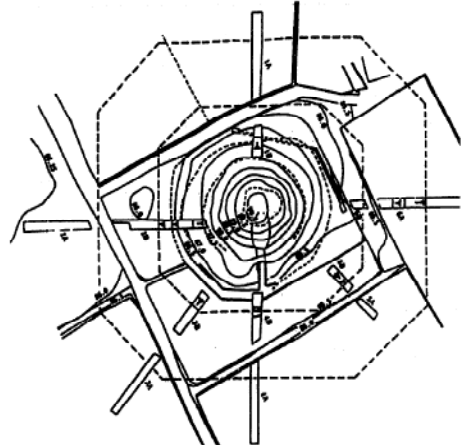
【籠原裏1号墳】埼玉県熊谷市

籠原裏1号墳は、墳丘の上部が削平されているが、残存する墳丘の一部に葺石が施され、その一部が角部状となっており、平面を八角形とすることができることから、八角墳とされている(寺社下1997)。

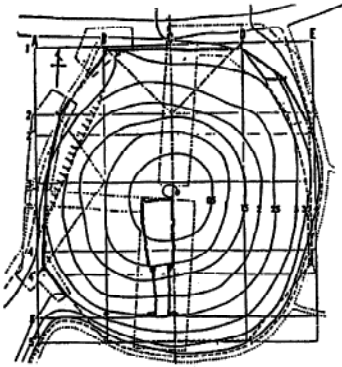
再度検討を行った結果、角部にそれを強調する葺石の配置は見られないのに加え、墳丘全面



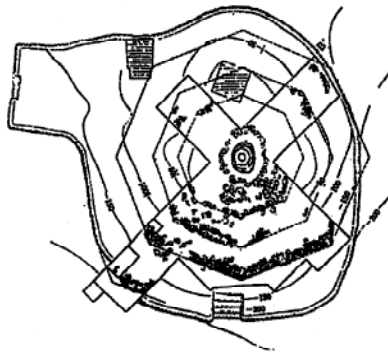
第7図 三津屋古墳 1/500



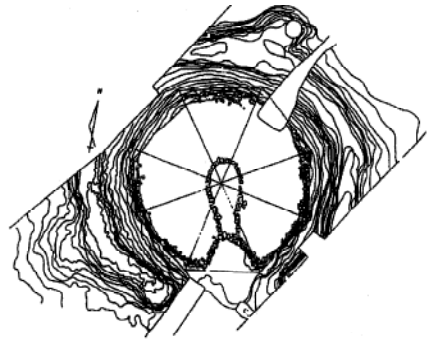
第8図 伊勢塚古墳 1/600



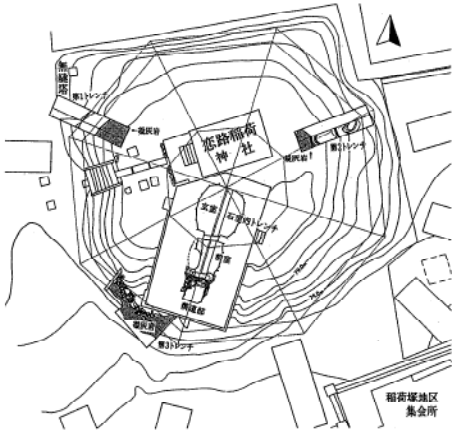
第9図 一本杉古墳 1/500



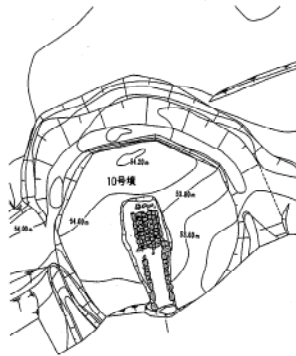
第10図 三津屋古墳 1/500



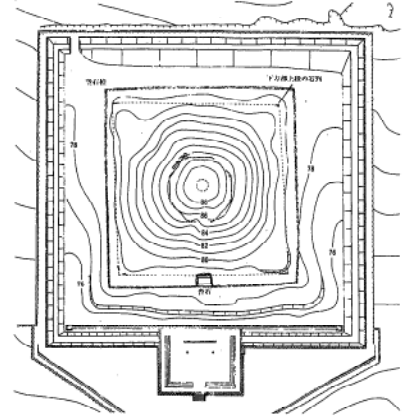
第11図 籠原裏1号墳 1/500



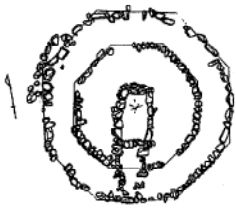
第12図 稻荷塚古墳 1/500



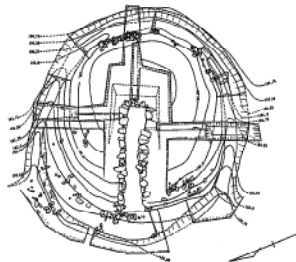
第14図 垣内田10号墳 1/500



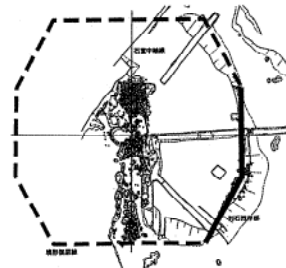
第15図 御廟野古墳 1/2000



第13図 経塚古墳 1/500



第16図 御堂池20号墳 1/400



第17図 国分45号墳 1/500

に葺石が施されていた可能性が低いことから、円墳と考える。

【稲荷塚古墳】 東京都多摩市

稲荷塚古墳は、周溝を八角形に削り、一部に外護列石と呼ばれている貼石状の石材が検出され、周溝の八角形プランと平行となることから、正八角形ではないが、八角墳であると報告されている（多摩市教委1996）。

しかし墳丘全面に貼石が施されていたかは判然とせず、さらに正八角形とならないことから、八角墳と判断することは現状では不可能である。ただし、外護列石が直線であることに加え、周溝も角部が確認できることから、多角円墳と考える。

【経塚古墳】 山梨県笛吹市

経塚古墳は、外護列石が三重にめぐり、それが八角形を呈していることから、八角墳とされている（山梨県教委1985）。

現状では墳丘全面に貼石の存在は確認できず、明確な八角形の角部も不明である。直線の描き方によっては角部とする考えも可能であるが、築造時の単位もしくは地震等による崩落のズレの可能性を考えるほうが妥当と思われる。よって現段階では経塚古墳を円墳と考える。

【垣内田10号墳】 三重県松阪市

垣内田10号墳は墳丘の三箇所 130° ～ 140° のコーナーが認められることから、八角墳と報告されている（三重県教委1990）。

しかし、葺石や列石は確認されておらず、盛土の整形のみによる判断である。さらに南側は大きく削平されており、形状を求められない。垣内田10号墳をはじめとして垣内田古墳群のほとんどが、墳丘上部の削平が著しい。本来は墳丘に葺石や列石が存在したことも想定できるが、現時点ではそれを認めることができない。また、盛土による整形のみであり、定義の③でも示したように八角墳として視覚的に認識できるよう築造したとは考え難いため、八角墳と認めることはできないことから、円墳と考える。

【御廟野古墳】 京都市山科区

御廟野古墳は中世において御陵郷の存在が確認できることから、治定の真偽についても古代までさかのぼることができる（丸山2001）。中尾山古墳の発掘を契機として、八角墳に対する関心が高まり、墳丘内の踏査が行われ、墳頂部に花崗岩による八角形の石列が確認された（末永2013）。その後宮内庁により、落葉と腐植土を取り除く調査が実施された（笠野1988）。その結果、上円部と下方部からなる墳丘のうち、上円部は墳頂外周に花崗岩の切石を用いた石列が八角形にめぐり、さらにその上部もしくは内側にも八角形に石材が並べられていることが判明した。また墳丘斜面には全面に花崗岩による川原石が無数に転がっている。下方部については、二段からなり、花崗岩の石列がめぐる。

以上のことから、御廟野古墳は墳丘斜面においてこそ明確なコーナー部分を確認することはできないが、墳頂では確実に八角形とできる石列がめぐり、角部も存在する。また、全面に川原石が施されていることから、八角墳としても差し支えないと考える。

【御堂ヶ池20号墳】 京都市右京区

御堂ヶ池20号墳は1973年の調査報告によると楕円形の墳丘と報告されていた（六勝寺研究会1973）が、後に八角墳とする研究が発表された（小川2009b）。それによると報告書の写真から外護列石と周溝に明瞭な角が見られ、測量図からも八角墳と判断できるとされている。

しかしあらためて当時の写真と測量図を見てみると、石列及び周溝において角と考えられて

いる箇所は判断が難しく、石列に関しては一部しか存在しない。さらには周溝もすべてにおいて明瞭な角を見出すことはできない。貼石も調査報告の限りでは認められない。以上のことから、御堂ヶ池20号墳は円墳とするのが妥当であると考えられる。

【国分45号墳】 京都府亀岡市

国分45号墳は、墳丘の上部が大きく削平されていたが、墳丘裾に施工されていた外護列石がわずかに残存していた。その状況から八角墳であると報告されている（京都府埋文2008）。

しかし直線状に並んだ外護列石は東側から南側にかけての2箇所で確認されているだけで、他では見受けられない。また角部と想定されている箇所においては全く135°にならず、正八角形とすることは不可能で、平面プランは極めて方形に近いものとなっている。つまり八角墳とするより方墳をベースとして角部を切り取った多角方墳と考える。

【段ノ塚古墳】 奈良県桜井市

段ノ塚古墳は前面の三段のテラス状張り出しが古くから認識されている。その上部に位置する墳丘については、御廟野古墳と同様に立ち入り調査が行われるとともに、表面の腐植土等を除去する調査の結果、その三段を含む上二段下三段の合計五段築成であることが判明した（笠野1995）。上二段は墳丘全面に榛原石が積まれた八角墳で、下三段は花崗岩による貼石が施されている。

また上二段については隅角が南を向き、そこに短辺が付設されており、正確には九角墳となる。しかし現時点でこれが設計当初の構造なのか、追葬などに伴う改変であるかは不明である。八角墳のコーナー部分では内角が135°となる石材を施工している箇所が数カ所確認でき、平面プランが正八角形を意図しているということは十分に考えることができる。以上のことから、石材によって135°の角部が明瞭であり、正八角形の平面プランであること、さらには墳丘全面に貼石を施していることから、従来通り八角墳であると認めることができる。

【岩屋山古墳】 奈良県明日香村

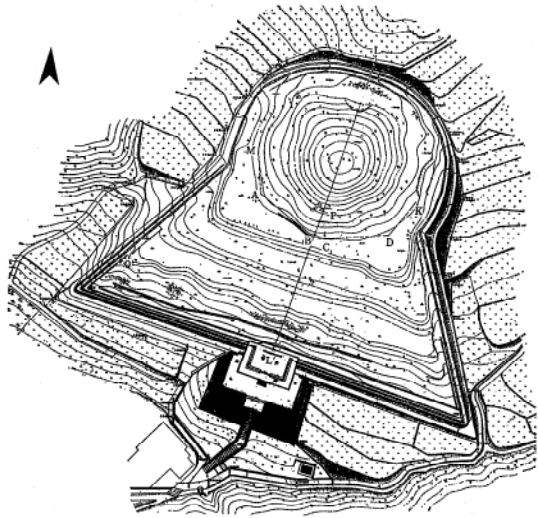
岩屋山古墳は1973（昭和48）年に測量調査が、1978（昭和53）年に発掘調査が実施され、上下二段築成の方墳であることが報告された（明日香村教委1980）。この調査では墳丘部分において礫がいくつか検出され、葺石の存在が示唆されたが、墳形を決定づけるものはなかった。その後、上段に45°近い角度の直線が存在するため、八角墳であるという見解も提示された（白石1982）。

しかし前述した発掘調査の際の調査区では八角墳の痕跡を認めることができず、角部の強調はもちろん、現状から墳丘全面に石材が施されていたと考えるのは困難である。今後、これまで調査が行われていない墳丘の別の箇所に調査区が設定されて発掘調査が実施され、八角墳の根拠となる遺構が検出されない限り、八角墳として認めることはできない。よって現状では方墳と判断する。

【中尾山古墳】 奈良県明日香村

中尾山古墳は1894（明治27）年段階では全面が礫に覆われている三段築成の円墳であると報告されている（野淵1894）。

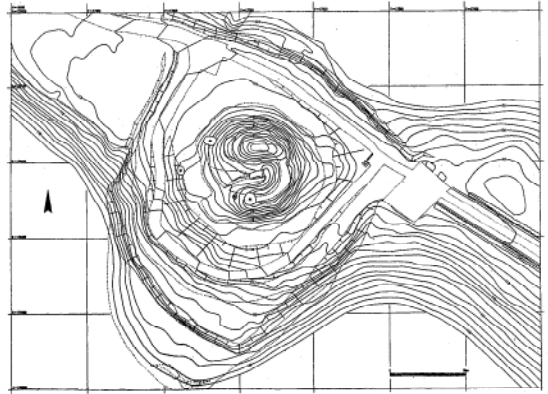
現状では段築は認められないが、発掘調査の結果、墳丘は各段の裾に八角形の一部となる50cm以上の石材を据え、さらにそれより小さな石材を並べて八角形のコーナー及び直線を形成していることが判明した（明日香村教委1975）。また現存する石材の量から本来は墳丘全面に川原石が施工されていたと考えられる。前述した八角形を示す石列とその角部を示す仕切りの



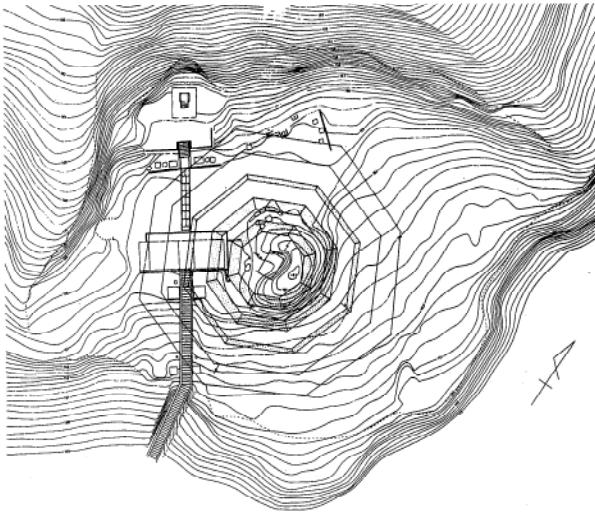
第18図 段ノ塚古墳 1/2000



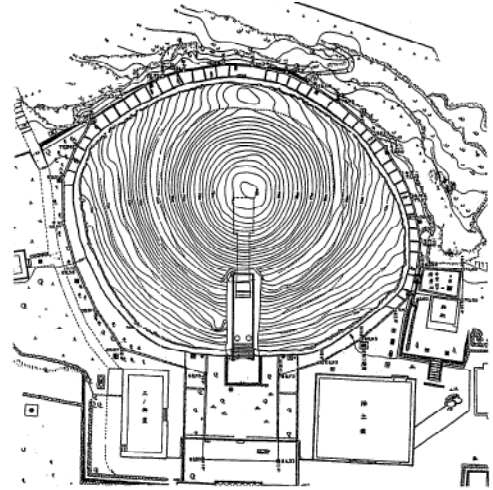
第19図 岩屋山古墳 1/1000



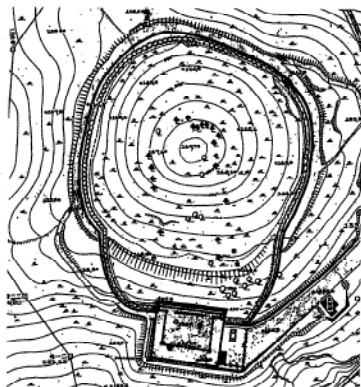
第20図 中尾山古墳 1/1000



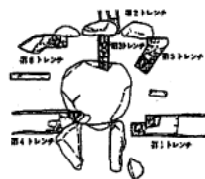
第21図 束明神古墳 1/1000



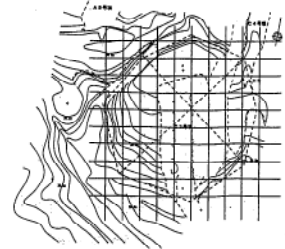
第22図 上城古墳 1/1200



第23図 上ノ山古墳 1/1000



第24図 石宝殿古墳



第25図 桑原C3号墳 1/500

石列も検出されており、平面プランが正八角形を呈することから、当初から八角形を意識して築造されていることは明らかである。さらにその外側には二重のバラス敷が施されており、内側が外側よりやや高くなる構造となり、同じく八角形を呈している。

以上のように中尾山古墳は墳丘全面に貼石を施し、角部を強調するように石材を配列し、正八角形を呈することからまさに八角墳であるといえる。

【東明神古墳】 奈良県高取町

東明神古墳は中世に葺石が新たに施されるなど、改変等が著しく、築造当初の形状を把握することは困難であるが、地山掘り込み事業や残存する墳丘部分の形状から八角墳であるとされた（檀考研1984）。

中尾山古墳の下二段にみられる貼石と類似するものが検出されているが、幅約50cmと狭い範囲であるため、現状では積極的に八角墳に関連する遺構であるとは評価しがたい。八角墳の根拠となるものが、地山掘り込み事業や残存する墳丘の形状だけであり、八角墳の定義に当てはまる要素は見出せない。後世の改変が著しいとしても八角墳として貼石で装飾しているならば、墳丘の一部が残存していることから、わずかでも残存している可能性がある。しかしそれを全く確認できないことから、築造当初から貼石が施されていないと考えるのが妥当であると考えられる。以上のことから東明神古墳は八角墳ではなく、現段階では円墳とする。

【上城古墳】 大阪府太子町

上城古墳は従来50m前後の円墳であるとされてきたが、等高線に直線部分がいくつか見られることから、八角墳である可能性が指摘されている（今尾2005）。

しかし宮内庁による詳細な地形図作成の結果、円墳である可能性が高くなるとともに、貼石などの施設が存在しないことが明らかとなった。つまり、上城古墳は現状を見る限り角部が見受けられず、貼石も存在しないことから八角墳である可能性は低く、円墳と判断する。

【上ノ山古墳】 大阪府太子町

上ノ山古墳は直径約35mの円墳とされている。宮内庁により孝徳天皇の大坂磯長陵に治定されているため、詳細は不明であるが、地元に残された江戸時代の文献から、洞窟、つまり石室の中に石棺があることがわかっている。陵墓地形図は円墳状を呈しているが、発掘調査が行われていないため、八角墳の可能性はあるとされている。これが八角墳である可能性を示唆される根拠としては、被葬者が孝徳天皇であるか否かである点が大い。

孝徳天皇の大坂磯長陵は『日本書紀』に記され、大坂の地名から、上城古墳や太平塚古墳がその候補としてあげられるが（山本2009）、いずれにしても根拠性に乏しい。上ノ山古墳についても発掘調査が行えず、地形図をみる限りは円墳としか捉えることができないため、現段階では円墳として判断する。

【石宝殿古墳】 大阪府寝屋川市

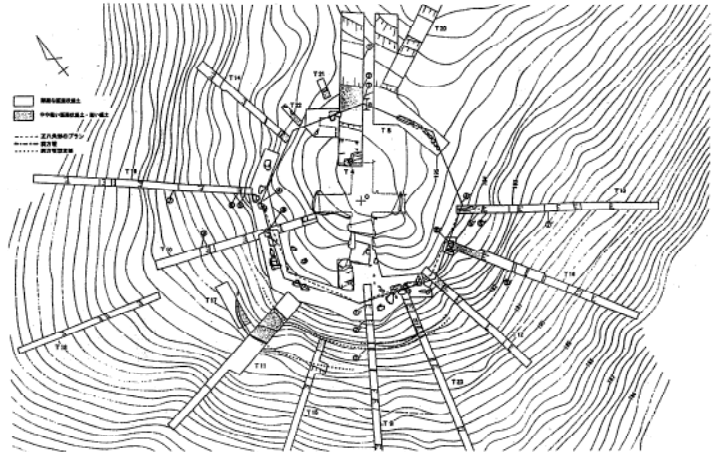
石宝殿古墳は、埋葬施設である横口式石槨の前方の両側に花崗岩の巨石が並び、石槨背後にも同様に巨石が並んでいる（寝屋川市教委1990）。その巨石が135°の稜角をつくることから、八角墳であると指摘されている。

墳丘の盛土については、削平されているため不明であるが、貼石が存在した痕跡は全く見受けられない。また巨石の稜角をつなぎ合わせても正八角形にはならないため、八角墳とすることはできず、現状から円墳と判断する。

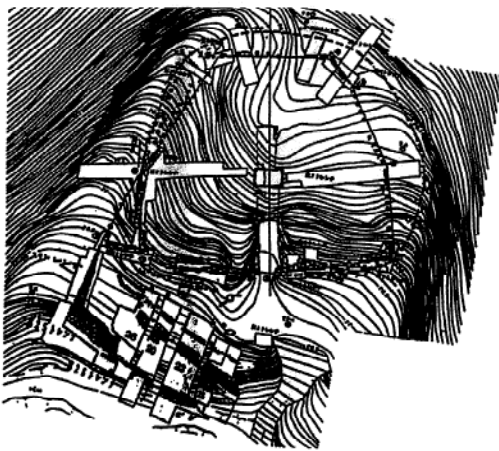
【桑原C3号墳】 大阪府茨木市



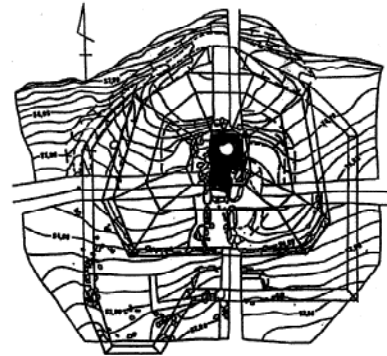
第26図 中山荘園古墳 1/400



第27図 尾市第1号墳 1/400



第28図 横山古墳 1/500



第29図 福本70号墳 1/500

桑原西古墳群の一角に位置する。墳丘は北から西側にかけてめぐる墳丘内排水溝が直線と角部を有し、南側の周溝が石室開口部から両脇にかけてひらきながら稜角を形成する八角墳と報告されている（大阪府教委2007）。

しかし平面プランは正八角形にならず、明確な角部は周溝と墳丘内にしか存在せず、貼石も確認できていない。そのため側面観を意識して造営されているとは考え難いことから、八角墳ではなく多角円墳と考えるのが妥当である。

またこの古墳が同じ群集墳内で埋葬施設、副葬品などが他と比べ、突出して優れていることが指摘されているが、墳丘内排水溝など、他の墳丘にはない要素で差別化を図っているのみである。墳丘が多角円墳であるのが、他との差別化に何らかの影響を与えているとしても、この古墳が八角墳である可能性は低い。

【中山荘園古墳】兵庫県宝塚市

中山荘園古墳は、発掘調査の結果、墳丘裾に設置された六辺分の外護列石と石室開口部に張り出したテラス部分に施された貼石の存在が明らかになった（宝塚市教委1983）。平面上は一部を除いて八角形を呈し、そのコーナー部分も135°にはならないがそれに近い数字となることから、これまで八角墳と指摘されてきた。

しかし八角墳の根拠となる六辺分の外護列石は墳丘裾にのみ施されたものであり、裾以外で

は全く確認されていない。また石室開口部では、テラス状の張り出しとなり、正八角形にはならない。よって正面からでは八角形のコーナーを見ることはできず、墳丘も恒久的に築造当初の形状を維持する工夫が見られないため、八角墳とすることはできない。しかし明らかにコーナー部分が存在するため、多角円墳とするが、今後何らかの意義づけが必要であると考え。

【尾市第1号古墳】 広島県福山市

尾市第1号古墳は標高190m前後の丘陵先端の頂部に築かれており、南側の前面は急斜面を呈した地形となっている。十字形の横口式石槨を埋葬施設とした特異な構造で、以前から注目されていた。

発掘調査により、墳丘裾の列石の存在が確認され、それらが角を呈するため、八角墳と指摘された（福山市教委2008）。しかし列石の配置から八角形とするよりも円形とするほうが適切であると考え。墳丘は正円ではなく、八角墳と認識されるほど角を有しているように見えるのは、丘陵頂上の狭い範囲での築造であったため、制約が生じた可能性や築造後まもなく崩れてしまったことも想定できる。以上のことから、尾市第1号古墳は円墳と考える。

【梶山古墳】 鳥取県鳥取市

梶山古墳は墳丘の南側斜面に築かれた変形八角墳と報告されている。墳丘の背後、つまり斜面側にいくつか角部が見受けられることから八角墳とされた（国府町1995）。

しかし、確認できる形状からこれは斜面に築かれたため、地形に則するように隅切状に整形されたと考えられる。つまり、梶山古墳は八角墳ではなく、多角方墳と考える。

【福本70号墳】 鳥取県八頭町

福本70号墳も前述の梶山古墳と同様に斜面に築かれたいわゆる変形八角墳とされている（郡家町1995）。梶山古墳と同様に斜面上に築かれたという制約から隅切を行うに至ったと考えるのが妥当であるため、多角方墳として位置づける。

梶山古墳や福本70号墳は、いずれも隅切を行った多角方墳であり、他地域において類似した構造が見られないこと、さらに梶山古墳については石室壁面に壁画が描かれていること等を勘案し、独自の築造背景もしくは技術についてさらに検討しなければならない。

V. おわりに

本稿は八角墳について、基礎的研究とすべく研究史及び定義について述べてきた。研究史は飛鳥時代の古墳を語る上では欠かすことのできない『阿不幾乃山陵記』に始まり、現在いたる先学の成果を紹介した。これまでににおける研究水準の高さを改めて実感したとともに今後に向けた課題もいくつか明らかになった。

そして今回、その課題の一つである八角墳の定義について、現在八角墳と報告・指摘されている25基の古墳を、野口王墓古墳と牽牛子塚古墳の調査成果より定めて再検討を行ってきた。その結果、八角墳は三津屋古墳、武井廃寺古墳、御廟野古墳、段ノ塚古墳、野口王墓古墳、牽牛子塚古墳、中尾山古墳の7基のみであることが判明し、これまで八角墳と報告・指摘されてきた古墳は多角円墳、多角方墳、円墳のいずれかであることが明らかとなった。八角墳のうち、御廟野古墳、段ノ塚古墳、野口王墓古墳、牽牛子塚古墳、中尾山古墳については、これまで述べているように大王墓である可能性が指摘されている。一方、三津屋古墳と武井廃寺古墳については、群馬県に所在する点から大王墓と考えることは困難であり、大王墓としての八角墳の模倣あるいは全く別の思想により造営されたものなどが想像される。今後は三津屋古墳や武井

廃寺古墳の各地域における位置づけを明らかにし、周辺の古墳や遺跡との関連性を含め、多方面からの検討が必要となってくる。また、今回の再検討により、これまで八角墳とされてきた古墳を多角円墳や多角方墳、円墳などと判断したが、これらについても周辺の古墳とは異なる要素を備えている場合が多く、単に八角墳ではないという結論で終わらせるのではなく、新たな意義づけも行っていかなければならない。さらには今後の調査研究により、これまで指摘されてこなかった古墳についても新たに八角墳と判断できることも考えられる。

本稿はあくまで基礎的研究として、八角墳について再検討を行ったのみである。今回の検討方法は確実に八角墳を造営する意図が窺える古墳を指標としているため、全国的に一律の定義を用いることに違和感があるかもしれないが、大王墓とそれ以外の八角墳について考えるための一つの視点として試みたものである。今後、それぞれの年代⁽³⁾や築造意義などの検討も行い、古墳文化の最終末期、さらには律令国家形成期という「日本国」誕生に欠かすことのできない激動の時代について、さらなる解明を目指すこととする。

最後に本稿を成すにあたって関西大学文学部教授 米田文孝先生のご指導を得、明日香村教育委員会調整員 西光慎治氏の校閲をいただきました。ご尽力を賜りました両氏に厚く御礼を申し上げます。

〈註〉

- (1) 天皇という呼称が使用されるのは飛鳥時代後半であり、それまでは大王であるが、本稿では便宜上、人物名に限り用いる。なお、天皇が葬られる古墳については、大王墓という名称を使用する。
- (2) 「Ⅱ. 調査研究史」で述べたとおり右島氏がすでに「多角形円墳」の存在を指摘されている。
- (3) 大王墓としての八角墳に関する年代については別稿を用意している。

〈参考文献〉

- 網干善教 1975 「中尾山古墳の外形についての私見」『史跡中尾山古墳環境整備事業報告書』明日香村教育委員会
網干善教 1979 「八角方墳とその意義」『橿原考古学研究所論集』五 吉川弘文館
一瀬和夫 1988 「終末期古墳の墳丘」『網干善教先生華甲記念考古学論集』網干善教先生華甲記念会
猪熊兼勝 1995 「飛鳥時代の天皇陵の成立序説」『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集文化財論叢Ⅱ』
同朋舎
井上 薫 1975 「高松塚三題」『時野谷勝教授退官記念 日本史論集』同刊行会
今尾文昭 2005 「八角墳の出現と展開」『古代を考える 終末期古墳と古代国家』吉川弘文館
岸本直文 2014 「野口王墓古墳への立入り観察」『ヒストリア』第243号 大阪歴史学会
小川裕見子 2009a 「終末期群集墳内における八角墳と大型八角墳の関係」『古代学研究』184 古代学研究会
小川裕見子 2009b 「茨木市桑原西古墳群と亀岡市国分古墳群の八角墳」『京都府の群集墳』
第16回京都府埋蔵文化財研究集会
小林利晴 1997 「畿内の八角墳と地方の八角墳の比較」『東京考古』15 東京考古談話会
西光慎治 2011 「牽牛子塚古墳・越塚御門古墳の調査成果－律令国家形成期の大王墓の実像－」『日本考古学』
第32号 日本考古学協会
西光慎治 2013 「牽牛子塚古墳の築造規格」『牽牛子塚古墳発掘調査報告書』
－飛鳥の刳り貫き式横口式石槨墳の調査－』明日香村教育委員会 第10集
寺社下博 1997 「地方の多角形墳」『倉田芳郎先生古希記念 生産の考古学』同刊行会
白石太一郎 1982 「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一集 国立歴史民俗博物館

- 末永雅雄 1975 『古墳の航空大観』 学生社
- 菅谷文則 1969 「八角堂の建立を通じてみた古墳終末時の一様相」『史泉』第40号 関西大学史学会
- 辰巳俊輔 2013 「飛鳥の八角墳～中尾山古墳～」『牽牛子塚古墳発掘調査報告書
- 飛鳥の削り貫き式横口式石槨墳の調査 -』明日香村教育委員会 第10集
- 田中教忠 1906 「阿不幾乃山陵記考証」『考古界』五-六
- 田村圓澄 1981 「八角墳と舒明天皇一家の仏教信仰」『仏教史学研究』第23巻第1号 仏教史学会
- 直宮憲一 1988 「八角墳再考」『網干善教先生華甲記念考古學論集』網干善教先生華甲記念会
- 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1981 『飛鳥時代の古墳』
- 新納 泉 2012 「古墳の終末」『講座日本の考古学 8 古墳時代(下)』青木書店
- 林部 均 2012 「終末期古墳の様相」『古墳出現と展開の地域相』古墳時代の考古学 2 同成社
- 福尾正彦 2013 「八角墳の墳丘構造-押坂内陵・山科陵・檜隈大内陵」『牽牛子塚古墳発掘調査報告書
- 飛鳥の削り貫き式横口式石槨墳の調査 -』明日香村教育委員会 第10集
- 藤沢一夫 1959 「行基菩薩の墓塔-奈良時代墳墓の封土に対する一解釈-」『古代文化』第三巻第十號
古代学協会
- 丸山竜平 2001 「検証天智天皇陵」『歴史検証天皇陵』別冊歴史読売 新人物往来社
- 右島和夫 2001 「6世紀後半における多角形円墳の出現とその背景-群馬県地域における八角形墳の再検討-」
『群馬県立歴史博物館紀要』第22号 群馬県立博物館
- 安井良三 1964 「天武天皇の葬礼考-『日本書紀』記載の仏教関係記事」『日本書紀研究』第一冊 塙書房
- 柳沢伊佐男 2013 「天武・持統陵の発掘資料」『季刊考古学』第124号 特集天皇陵古墳のいま 雄山閣
- 山本 彰 1993 「聖徳太子磯長墓考」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』同刊行会
- 脇坂光彦 1992 「八角形墳」『季刊考古学』第40号 雄山閣

＜遺跡文献＞

【群馬県】

- 梅澤重昭 1961 「多野郡吉井町神保一本杉古墳調査概報」『群馬県立博物館報』第4号
- 梅澤重昭 1997 「吉井町一本杉古墳の八角形墳丘」『月刊考古学ジャーナル』3月号 No.414
- 尾崎喜左雄 1958 「(1) 史跡武井廃寺跡」『勢多郡誌』勢多郡誌編纂委員会
- 志村 哲 1997 「伊勢塚古墳の八角形墳丘プラン」『考古学ジャーナル 特集・東日本の八角形墳』No.414
ニュー・サイエンス社
- 平野進一 1986 「29 武井廃寺古墳」『群馬県史 資料編 2 原始古代 2』群馬県史編さん委員会
- 吉岡町教育委員会 1996 『三津屋古墳-八角形墳の調査-』吉岡町文化財調査報告書第7集

【埼玉県】

- 寺社下博 1987 「熊谷市籠原裏遺跡の調査」『第20回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会

【東京都】

- 多摩市教育委員会 1996 『東京都指定史跡 稲荷塚古墳-墳丘部確認にともなう調査-』
多摩市埋蔵文化財調査報告 39

【山梨県】

- 山梨県教育委員会 1985 『経塚古墳』

【三重県】

- 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990
『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告-第二分冊 二-』

【京都府】

- 笠野 毅 1987 「天智天皇山科陵の墳丘遺構」『書陵部紀要』第39号 宮内庁書陵部

京都府埋蔵文化財調査研究センター2008『京都府遺跡調査報告書』第129冊

六勝寺研究会1973『御堂ヶ池20号墳 発掘調査報告』

【大阪府】

大阪府教委委員会2007『桑原遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2007-4

寝屋川市教育委員会1990『石宝殿古墳』『寝屋川市文化財資料』I

陵墓調査室2009『聖徳太子 磯長墓の墳丘・結界石および御霊屋内調査報告』『書陵部紀要』第60号

宮内庁書陵部

【奈良県】

明日香村教育委員会1975『史跡中尾山古墳環境整備事業報告書』

明日香村教育委員会1980『奈良県高市郡明日香村越岩屋山古墳-史跡環境整備事業にともなう事前調査概要-』

明日香村教育委員会2013『牽牛子塚古墳発掘調査報告書-飛鳥の刻り貫き式横口式石槨墳の調査-』

明日香村文化財調査報告書 第10集

笠野 毅1995『舒明天皇押坂陵の墳丘遺構』『書陵部紀要』第46号 宮内庁書陵部

河上邦彦編1999『東明神古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所

西光慎治・辰巳俊輔2009『王陵の地域史研究-飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅲ-』

『明日香村文化財調査研究紀要』第8号 明日香村教育委員会

西光慎治・辰巳俊輔2010『王陵の地域史研究-飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅳ-』

『明日香村文化財調査研究紀要』第9号 明日香村教育委員会

西光慎治・辰巳俊輔2011『王陵の地域史研究-飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅴ-』

『明日香村文化財調査研究紀要』第10号 明日香村教育委員会

末永雅雄・秋山日出男・網干善教・菅谷文則・藤井利章2013

『舒明天皇陵・天智天皇陵・天武持統天皇陵外形調査概報』『橿原考古学研究所論集』第十六 八木書店

奈良県教育委員会1982『飛鳥・磐余地域の後・終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財調査報告第39集

【兵庫県】

宝塚市教育委員会1985『中山荘園古墳発掘調査報告書』宝塚市文化財調査報告第19集

【広島県】

福山市教育委員会2008『尾市第1号古墳発掘調査報告書』

【鳥取県】

郡家町教育委員会1995『よみがえる古代のこおげ』

国府町教育委員会1995『史跡梶山古墳試掘調査概要』

《挿図出典》

第1図：福尾2013

第11図：寺社下1987

第21図：河上編1999

第2図：福尾2013

第12図：多摩市教委1996

第22図：陵墓調査室2009

第3図：明日香村教委2013

第13図：山梨県教委1985

第23図：末永1975

第4図：明日香村教委2013

第14図：三重県教委1990

第24図：寝屋川市教委1990

第5図：筆者作成

第15図：笠野1987

第25図：小川2009a

第6図：筆者作成

第16図：六勝寺研究会1973

第26図：宝塚市教委1985

第7図：吉岡町教委1996

第17図：小川2009a

第27図：福山市教委2008

第8図：志村1997

第18図：笠野1995

第28図：国府町教委1995

第9図：平野1986

第19図：西光他2011

第29図：郡家町教委1995

第10図：梅澤1997

第20図：西光他2010

古代檜隈の渡来文化（上）

長谷川 透

第1章 はじめに

檜隈地域は明日香村の西南部に位置し、欽明天皇陵や天武・持統天皇陵をはじめ高松塚古墳・キトラ古墳などの壁画古墳が分布し、いわゆる飛鳥時代の奥津城や藤原京西南部の陵園や葬地として理解されている。飛鳥西南部は古代から檜隈郷とよばれ、渡来系氏族東漢氏の本拠地と考えられてきた。『続日本紀』によれば、檜隈地域には渡来人やその子孫たちで満ち溢れ、他姓のものは2、3姓のみであるという。檜隈地域に所在する高松塚古墳やキトラ古墳、檜隈寺など大陸文化の影響を色濃く見せながらも、それ以外では顕著に渡来系要素を示す遺構・遺物は少なかった。一方、檜隈周辺部や飛鳥藤原地域では渡来系文物が認められ、応神、雄略朝に渡来した今来才伎や倭漢氏との関連が指摘されている。

近年、キトラ古墳から檜隈寺一帯を飛鳥歴史公園の建設が予定され、これにより檜隈地域の中心部の発掘調査が進められた。調査の結果、檜隈寺周辺でL字形カマドや大壁遺構などの渡来系の遺構・遺物が確認され、檜隈中心部にも渡来文化が確実に受容されていることが明らかとなってきた。本稿では、檜隈地域の新資料に加え、これまで知られている飛鳥藤原地域の渡来系資料を検討し、檜隈地域の渡来文化の特質を論じてみたい。

第2章 檜隈地域の調査・研究史

檜隈地域は文献史料や古記録、陵墓の分布をもとにこの地域一帯が渡来人のふるさととして、また飛鳥時代の奥津城として知られていた。かつては於美阿志神社境内にある檜隈寺跡は欽明天皇の菩提寺だという口碑伝説があったと紹介されていたが（天沼1916）、いまでも境内には『古事記』や『日本書紀』に記された宣化天皇廬入宮跡伝承地と揮毫された石碑が立っている。そのほか、出土した瓦などの年代観により檜隈寺を渡来系氏族檜前氏の氏寺と考えられていた（福山1948）。

重要文化財である於美阿志神社の十三重石塔の劣化・倒壊の恐れから石塔の解体修理及び保存処理がおこなわれ、石塔の下から地下心礎と舍利容器が出土し、これが檜隈寺の塔心礎であることが明らかとなった（奈良県1970）。1972年の高松塚古墳の発見は、考古学・古代史ブームが巻き起こり檜隈地域が世間に知られる大きなきっかけとなった。高松塚古墳発見以後、第二の壁画古墳の存在が期待され、檜隈地域でもその探索がなされた。その間に、国道169号線沿いに住宅団地の建設が進み、檜隈寺の西側にある尾根筋から藤原京期の掘立柱建物群が検出され、紀路をのぞむことができる藤原京に関わる官衙施設であると推定された（榎考研1985）。

1979年には於美阿志神社境内にある檜隈寺について村の依頼により奈良国立文化財研究所が発掘調査を実施した。檜隈寺は西面する特異な伽藍配置で、伽藍の主軸が北で23～24度西に振れることが明らかとなり、講堂基壇が瓦積基壇であることや周辺で舶来とみられる金銅製飛天像も出土した（奈文研1980～1983・1987）。こうして、文献史料や発掘成果により檜隈寺が渡来系氏族東漢氏の氏寺であることが確実視された（飛鳥資料館1983）。同時期には1983年に

キトラ古墳で壁画が発見され、古代檜隈郷の範囲を考える上で重要な発見となった。

その後、檜前盆地を貫く村道平田阿部山線や道沿いの住宅開発に伴う発掘調査により、御園アリエ・チシヤイ遺跡、檜前門田遺跡、栗原橋本遺跡、阿部山宮ノ向遺跡が確認され、古代に遡る掘立柱建物や掘立柱塀が検出された（明日香村1991・1994・1997・西藤1984）。近年は、檜隈地域での開発事業は少なく小規模な発掘調査が継続されていたが、国土交通省による檜隈寺とキトラ古墳一帯を飛鳥歴史国営公園化する計画があがり、2009年から造営予定地一帯の発掘調査が行われた。この調査によって、檜隈寺跡周辺で石組L字形カマドを備えた竪穴建物や小金銅仏片、檜前大田遺跡では大壁建物や4・5世紀の韓式系土器が確認された（奈文研2010、檀考研2010・2011、明日香村2012・2013）。このように檜隈地域の中心部である檜隈寺周辺でも渡来系の遺構遺物が確認できたことは檜隈の渡来文化を考える上で重要な成果となった。

飛鳥地域での渡来人研究は文献史料・考古資料を用いて多くの研究がなされてきた。文献などの古代史では檜隈を本拠地とした東漢氏の研究が盛んである。渡来人研究の嚆矢として彼らは「帰化人」と呼ばれ、『日本書紀』などの記述から応神朝にわたってきた帰化人やその子孫は飛鳥檜隈に居住していたということが多くの概説で紹介されてきた。その中で帰化人という呼び方から受ける印象は政治的、国際的な観点からみても彼らの実態を反映していないことから、「渡来人」という呼び方が提言され、現在はほぼ定着されている。飛鳥の渡来人も今来才伎や阿智使主を祖とする東漢氏の居住地として論じられ、於美阿志神社や檜前集落のたたずまい、古代から大きく改変を加えられていない入り組んだ地形が渡来人のふるさととして多くの一般書では紹介されてきた。

考古学では古墳や渡来系要素示す遺構、韓式系土器などの渡来系文物から検討が試みられている。奈良県では発掘調査の進展により渡来系遺物・遺構の事例が増え、県内での事例集成や研究が多く進められている。こうした大和の渡来人研究をまとめたものに青柳氏の論考がある〔青柳2005〕。渡来系遺物・遺構について個別具体的な研究については今回触れないが、そのなかでも檜隈地域について言及したものについて取りあげることにしたい。

韓式系土器と古墳出土資料をもとに分析を行った関川尚功は5世紀代は飛鳥、磐余地域に渡来系の居住地がみとめられ、彼らが古墳の被葬者としてはまだ少数だが、6世紀になると増加すると指摘された。そして、高取町に分布する与楽古墳群の副葬品分析でミニチュア炊飯具、釵子の出土、武器の少なさから古墳群被葬者を文官と推定した（関川1988）。須恵器生産や生産関連遺物（鍛冶工具・ガラス玉鑄型）や古墳副葬品（釵子・垂飾耳飾・ミニチュア炊飯具）、韓式系土器出土の集落遺跡に触れ、大和と河内の生産工房の構造的相違を見出し、東漢氏と西文氏などの渡来人集団による今来才伎の集団の様相の相違と受容体制の相違を指摘し、渡来人は大和盆地の諸河川の下流ではなく中流域から南部に集中し、布留を除いた、忍阪、飛鳥、忍海、郡山などの未開発地域に居住したことを論じた（堀田1993）。

また、飛鳥藤原地域や島庄地域で出土した韓式系土器とその遺跡を検討した西口壽生は、その分布が三つの地点にまとまる様相から、『日本書紀』雄略朝にみえる「手末才伎」らが移り住んだ「真神原」（飛鳥寺下層・石神遺跡・山田道）、「下桃原」（飛鳥京岡）、「上桃原」（島庄遺跡）と整合すると述べ、在来のムラと渡来系のムラの共存関係を指摘した（西口2002）。

一方、鉄器・鉄滓副葬古墳と集落など渡来系遺構・遺物を網羅的に研究した花田勝弘は、藤井イノク古墳や清水谷高貝遺跡を挙げ、鉄滓や鍛冶工具副葬古墳と集落の関係から鍛冶工人集落と墓域について高取群として総合的に理解し、渡来人集住の可能性を指摘した（花田

2002・2005)。

近年では、南郷遺跡群をはじめ奈良県内の遺跡構造を検討した坂靖は、大和の渡来系鍛冶集団と有力豪族と王権との関わりを述べる中で、この地域の渡来系集団は王権によって居住地や生産が直接管理・掌握され、飛鳥地域の開発、先進技術の移植と開発に指導的な役割を果たしていたと論じた(坂2010)。

このように飛鳥・檜隈地域は古墳時代から飛鳥時代にわたって生産・技術・土木など手工業、政治思想・学問などの知識、生産技術を背景とした軍事力を兼ね備えたマルチな渡来人がすみ、それを束ねた東漢氏、その渡来系集団を統率し政治的に利用し、政治手腕を高めた蘇我氏が飛鳥時代を突き動かしていた。飛鳥・檜隈にはそのようなイメージが強く働いている。

第3章 檜隈地域の渡来系文物

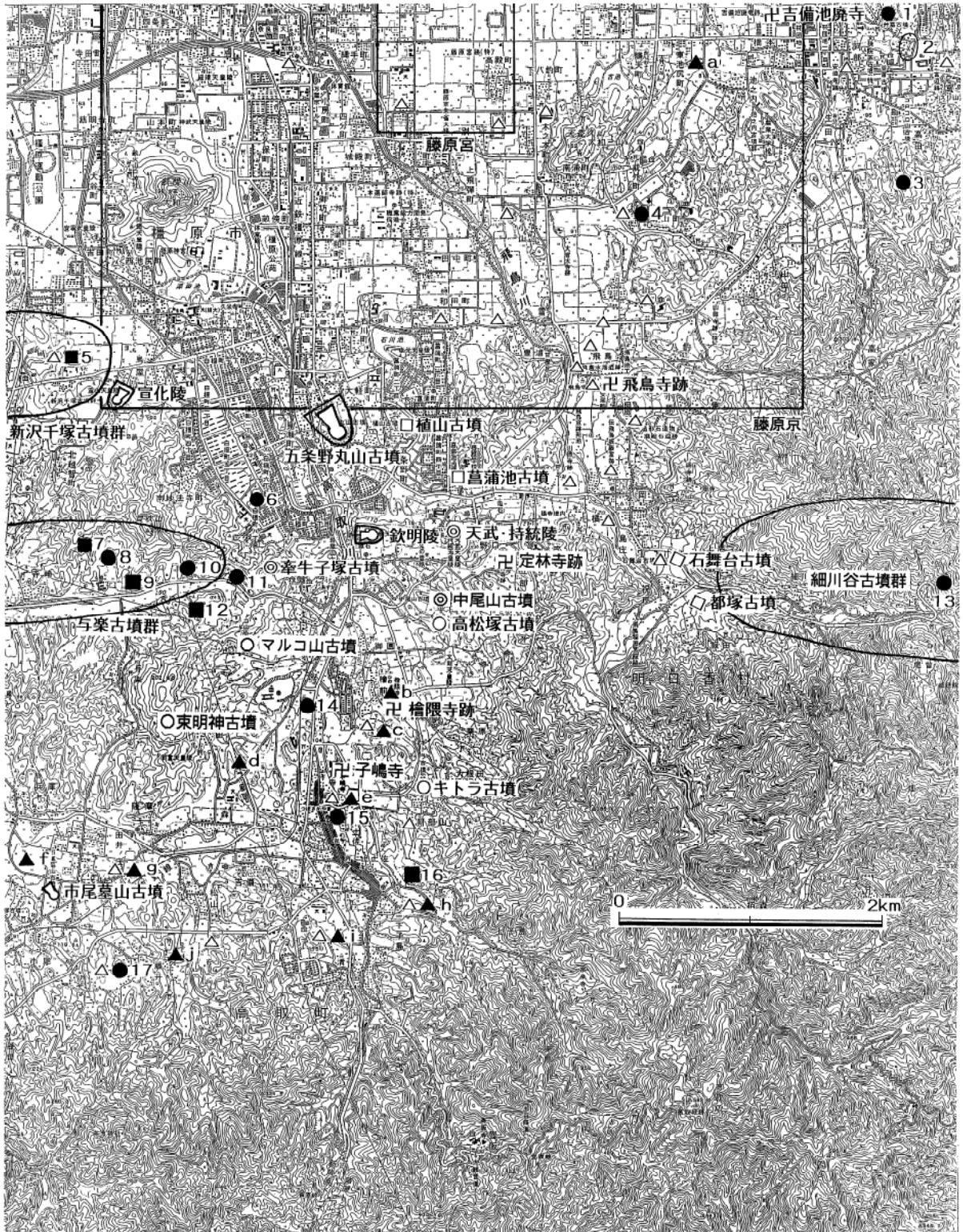
ここでは檜隈地域で新たに渡来系資料が確認された遺跡や寺院、古墳を取り上げることとする。檜隈の範囲については、これまでの研究(相原1998・加藤2002a)をふまえて、北は欽明天皇陵(梅山古墳)との五条野丸山古墳の間にある東西方向の谷筋、南はキトラ古墳のある阿部山大字付近、西は下ツ道・推定紀路、東は定林寺跡のある大字立部付近として論を進めていきたい。渡来人や渡来系氏族は拡大を続けていたため居住地域を厳密に領域や境界を示すことは難しく、居住者の性格や特徴的な地形が目印となって境界が形成されていたと考えられる。

第1節 寺院

檜隈地域の古代寺院には檜隈寺と呉原寺、定林寺がある(大脇1994)。呉原寺は渡来系氏族呉原氏の氏寺と考えられ、『清水寺縁起』に坂上大直駒子が敏達天皇のために建立したとされる。条里に残る地名から呉原寺推定地の発掘がおこなわれているが、伽藍や建物跡は確認されていない(網干1977)。しかし、檜隈寺特有の火焰文軒丸瓦が出土しており、その関連を窺わせる。定林寺は付近の地名「平田」から東漢氏の一族「平田忌寸」との関連が考えられ、平田氏の氏寺と考えられている(大脇1994)。奈良国立文化財研究所により発掘調査が行われているが、渡来系要素を示す遺構・遺物は確認されていない。また高取町大字観音寺にある子嶋寺は、古くは子嶋山寺として史料にあらわれ、『日本書紀』皇極三年の蘇我蝦夷による「長直を大丹穂山に使わして梓削寺を造らしむ」記事との関連を指摘されている(福山1948)。東漢氏の子孫である坂上田村麻呂が京都清水寺建立の際に子嶋寺の僧延鎮に帰依したことも子嶋寺と坂上氏は無関係であるとは言えない。ただ、子嶋寺においても渡来系要素を示すものは確認されていない。

(i) 檜隈寺とその周辺

東漢氏の祖、阿智使主を祀る於美阿志神社境内にある古代寺院。境内には重要美術品の十三重石塔があるが、檜隈寺塔跡の心礎の上に建つ。伽藍は塔を正面にして西に門を構える伽藍配置で、塔を挟んで北の講堂と南の金堂を回廊でつながっている。伽藍主軸は樹枝状に南から延びる尾根に沿っており、北で西に24度振っている。金堂は下成基壇を持つ二重基壇で飛鳥寺に類する構造を備える。講堂は基壇外装が飛鳥で唯一の瓦積基壇を採用している。出土した瓦の検討から西門と金堂が7世紀後半、塔と講堂が7世紀末の順で造営された。伽藍の外側、講堂の北西部では小金銅仏光背片や小金銅仏片が出土した。光背片は北魏様式を残す金銅製飛天像として舶来の可能性がある。一方で小金銅仏片も仏手のみだが鍍金の純度や発色の良さが大陸で確認されている小金銅仏に近く、指の表現技法が白鳳様式より古い印象を与えるとされて



第1図 飛鳥・檜隈地域の渡来系遺跡分布図 (1:50000)

1. 桜井児童公園2号墳(稲荷西2号墳) 2. 風呂坊4号墳 3. 植松東4号墳 4. 南山古墳 5. 新沢126号墳 6. 沼山古墳
 7. 白壁塚古墳 8. 与楽罐子塚古墳 9. カンジョ古墳 10. 与楽古墳群(ナシタニ支群) 11. 真弓罐子塚古墳 12. スズミ1号墳
 13. 上5号墳 14. 坂ノ山4号墳 15. 稲村山古墳 16. 阿部山遺跡群(カウラ1・2号墳) 17. 藤井イノラク12号墳
 a. 大藤原京左京五条八坊(磐余池推定地)(大壁) b. 檜隈寺(石組L字形カマド) c. 檜前大田遺跡(大壁)
 d. 森カシ谷遺跡(大壁・L字形カマド) e. 観覚寺遺跡(大壁・オンドル) f. 市尾カンデン遺跡(大壁) g. 薩摩遺跡(大壁)
 h. ホラント遺跡(大壁) i. 清水谷遺跡ナルミ地区(大壁・オンドル) j. 羽内遺跡(大壁)
 (●:円墳 ■:方墳 ○:八角墳 ▲:遺跡 △:韓式系土器・陶質土器出土地)

いる（明日香村2013）。

檜隈寺伽藍の北西部は、飛鳥時代の遺構・遺物が多く認められる。南東から延びる尾根に沿って北西方向に派生する小さい谷が入り込むため、谷部に寺院関連遺物を含む遺物包含層が形成されている。ここでは前述した小金銅仏片や「呉」とヘラ書きされた軒丸瓦のほか多量の瓦が出土した。これら多量の瓦は最近の調査によって、檜隈寺瓦窯が発見され（森先2014）、窯跡に起因することが判明した。このほかにもL字形カマドを備えた竪穴建物も検出され、建物の埋土から瓦当裏面に格子タタキが施された軒丸瓦も出土している（奈文研2010）。建物埋土から出土した瓦類からみて建物は檜隈寺が本格的に造営される7世紀後半には埋め立てられており、檜隈寺の前身遺構に伴う瓦の可能性が指摘されている（奈文研2010）。このほか講堂から北西50m付近には北西には掘立柱建物や礎石が確認され、さらに北西90mには寺院造営に伴って銀、銅、鉄鍛冶などがおこなわれた金属工房も確認された（明日香村2013）。

第2節 集落・遺跡

古墳以外では清水谷遺跡ナルミ地区で大壁住居の検出を皮切りに、清水谷高貝遺跡、観覚寺遺跡、薩摩遺跡、市尾遺跡で相次いで大壁住居が検出され、観覚寺遺跡ではオンドル遺構も確認された。明日香村との町境にあるホラント遺跡でも大壁建物が検出され、高取町域には渡来系の古墳や遺跡が展開していることが明らかとなり、古代檜隈郷の範囲が明日香村域を超えて高取町南部の清水谷まで広がると指摘した（加藤2002a・2006）。

(i) 檜前大田遺跡

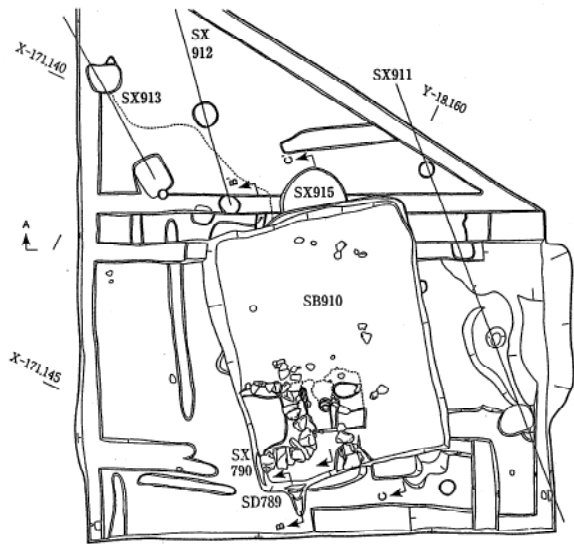
檜隈寺跡から南200mに位置し、寺跡から谷を挟んだ尾根上に立地する遺跡である。檜隈寺造営期に並行する7世紀後半を中心に掘立柱建物群が展開している。尾根筋の形状に沿って掘立柱建物が4群に分かれて展開する。その建物群のある1群から大壁建物とみられるL字状の溝が検出された。7世紀後半の掘立柱建物の柱穴が大壁遺構の溝を掘り込むこと、大壁遺構検出時に7世紀中頃の土器が出土することから大壁遺構は7世紀中頃には廃絶することが明らかとなった（明日香村2013）。また、檜前大田遺跡の西端にある土坑から韓式系土器が出土し（明日香村2012）、この韓式系土器は4世紀後半から5世紀に位置づけられ、応神朝の渡来記事との関連を考える上で重要な資料と位置付けている（高橋2013）。

(ii) ホラント遺跡

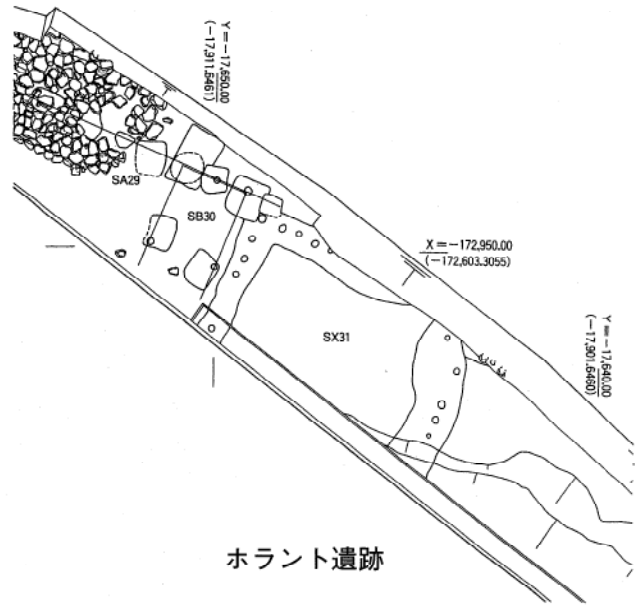
明日香村阿部山と高取町上子島との境界にまたがる遺跡である。大壁建物の布掘遺構を検出した（奈良県2005）。東西幅最大7m、南北3.8m以上で、建物の主軸は北で西に24度振れている。布掘遺構は、幅が0.7～1.3mで深さ1.6mを測る。径20cmの柱を約50cm間隔で並べる。時期は飛鳥Ⅲ期以前に位置づけられる（奈良県2005）。また不明土製品のなかに韓式系土器とみられる遺物も確認されている（坂2012）。

(iii) 観覚寺遺跡

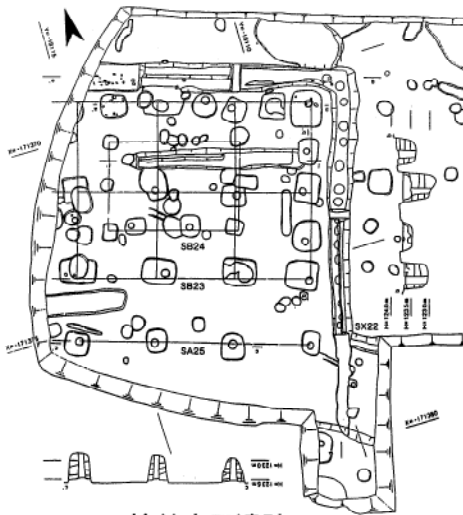
高市郡高取町観覚寺に所在し、檜前大田遺跡から南西に約600mの位置にある。子嶋寺の南で行われた調査で韓式系土器などが出土し、周辺でも渡来系遺構の存在が想定された。その後の調査で6世紀から9世紀までの大壁建物やL字形カマドなどのオンドル遺構が多数確認され、長期にわたる渡来系氏族の拠点的な遺跡と考えられている（高取町2008・木場2008）。なお、現子嶋寺は大字観覚寺にあり、平安時代になり現在の場所に子嶋寺の子院として観覚寺ができ、地名の由来となっている。



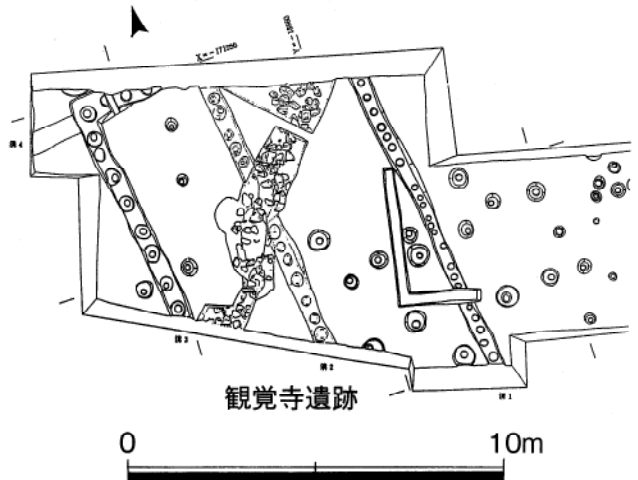
檜隈寺北方



ホラント遺跡



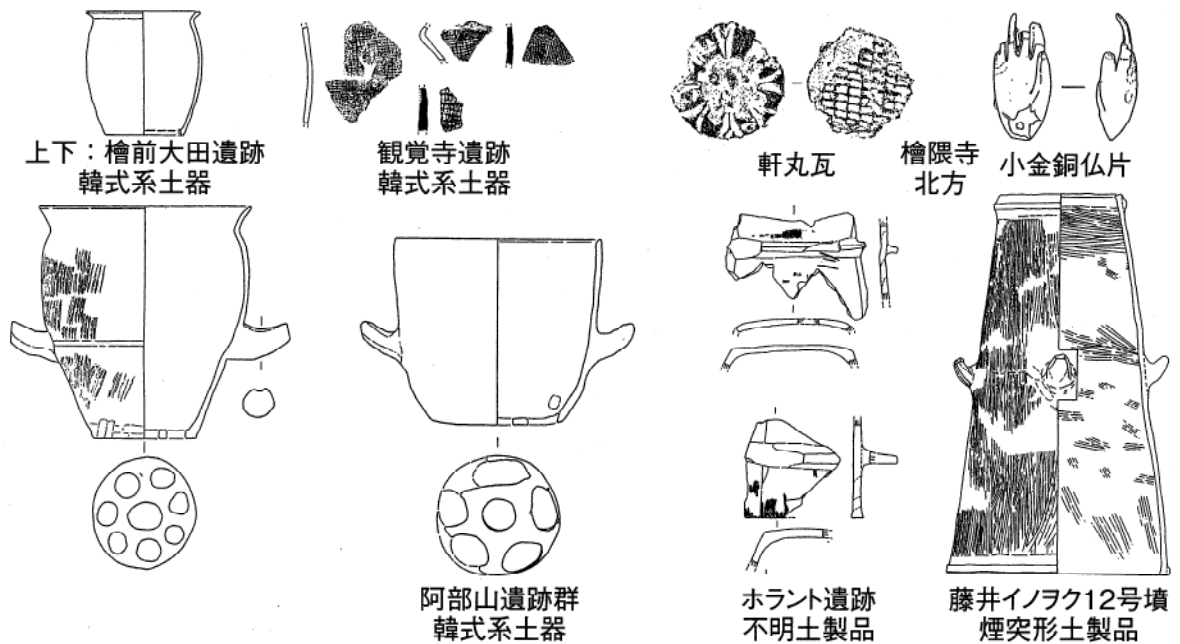
檜前大田遺跡



観覚寺遺跡



第2図 L字形カマド・大壁建物 (1:200) (各報告書から転載)



第3図 檜隈周辺地域出土の渡来系遺物 (各報告書から転載)

(iv)清水谷遺跡ナルミ地区、その他

清水谷は高取町の南端に位置する。5世紀後半の4棟の大壁建物と3か所の大壁遺構、オンドル遺構が検出され、調査区から韓式系土器が出土した（高取町2002・2008）。3回以上の建て替えがあり、掘立柱建物や土塀など7世紀前半頃まで存続するとみられる。その他、高取町内には森カシ谷遺跡、羽内遺跡、薩摩遺跡、市尾カンデン遺跡、松山遺跡、東中谷遺跡などで渡来系遺構・遺物が確認されている。なかでも薩摩遺跡では池跡や堤、木樋が検出され、その池を波多里長檜前村主が作ったと記した木簡が出土するなど重要な発見があった（奈良県2010）。

第3節 古墳

古くは稲村山古墳でカマド型土製品や釵子が報告され、時期が5世紀前半と高取町の渡来系古墳としては古く位置づけられる。このほか藤井イノヲク12号墳では煙突形土製品や鉄滓が確認された（高取町1992）。坂ノ山古墳や与楽古墳群ナシタニ支群もミニチュア炊飯具を副葬し、代表的な事例として挙げられる。その与楽古墳群のなかでも盟主墳として有名な与楽籬子塚古墳、カンジョ古墳、隣接する寺崎白壁塚古墳がそれぞれ発掘され、穹窿状横穴式石室を採用しミニチュア炊飯具を副葬するこれらの古墳を渡来系氏族東漢氏の首長墳と考えている（木場2009）。

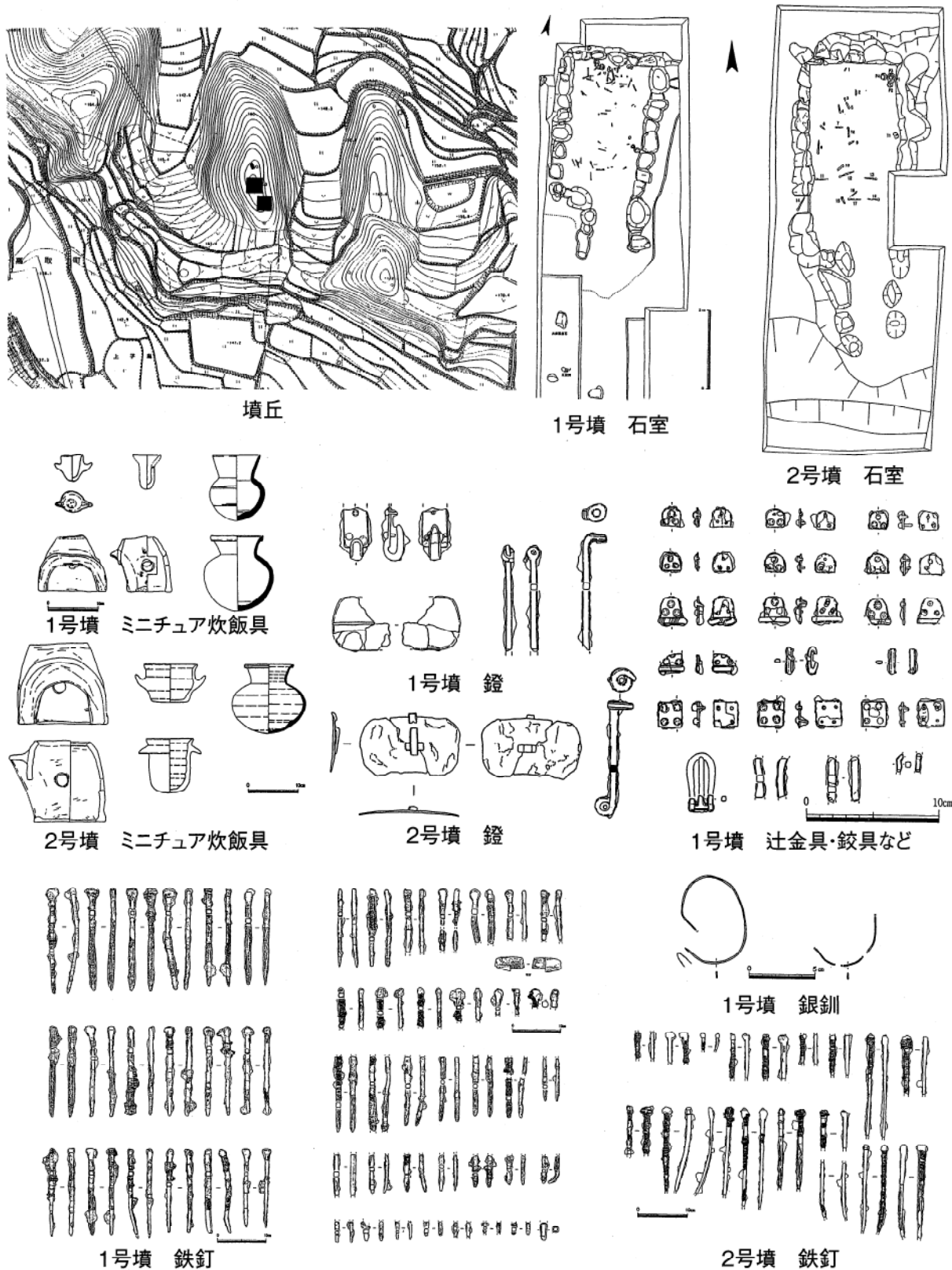
(i)阿部山カイワラ1・2号墳

キトラ古墳の南、明日香村大字阿倍山と高取町が接する尾根上にある。尾根は高取山から北に向いて延びる樹枝状の尾根のひとつに立地する。西側の尾根は古くに土取りで失われているがそこにも古墳があったといわれている。また尾根の南にはホラント遺跡、北側に阿部山遺跡群があり、渡来系の遺構・遺物が顕著である。阿部山地内で圃場整備が実施されるにあたり、明日香村教育委員会が計画予定地一帯を阿部山遺跡群として把握し、古墳が想定される尾根筋については事前に範囲確認調査を実施した。

尾根上には2基の方墳（カイワラ1・2号墳）と木棺墓が確認された。1号墳は一辺約11mで主体部は左片袖の横穴式石室、2号墳は一辺約10mで主体部は左片袖の横穴式石室を設けている。2号墳においては扁平な小形石材が2段分遺存した状況で基底石が確認されたことから、小形石材で積み上げた穹窿状横穴式石室と考えられる（明日香村2011）。石室内から土師器、須恵器のほかミニチュア炊飯具一式、馬具（鉄製楕円形鏡板付轡・辻金具）、鉄釘、銀釧が出土した。木棺墓から6世紀前半の須恵器が出土し、カイワラ1号墳がその木棺墓を壊して築造されていることから1・2号墳を6世紀中頃から後半と位置づけた（明日香村2011）が、馬具の年代観から6世紀前半まで遡る可能性を指摘した（拙稿2012）。

(ii)真弓スズミ1号墳

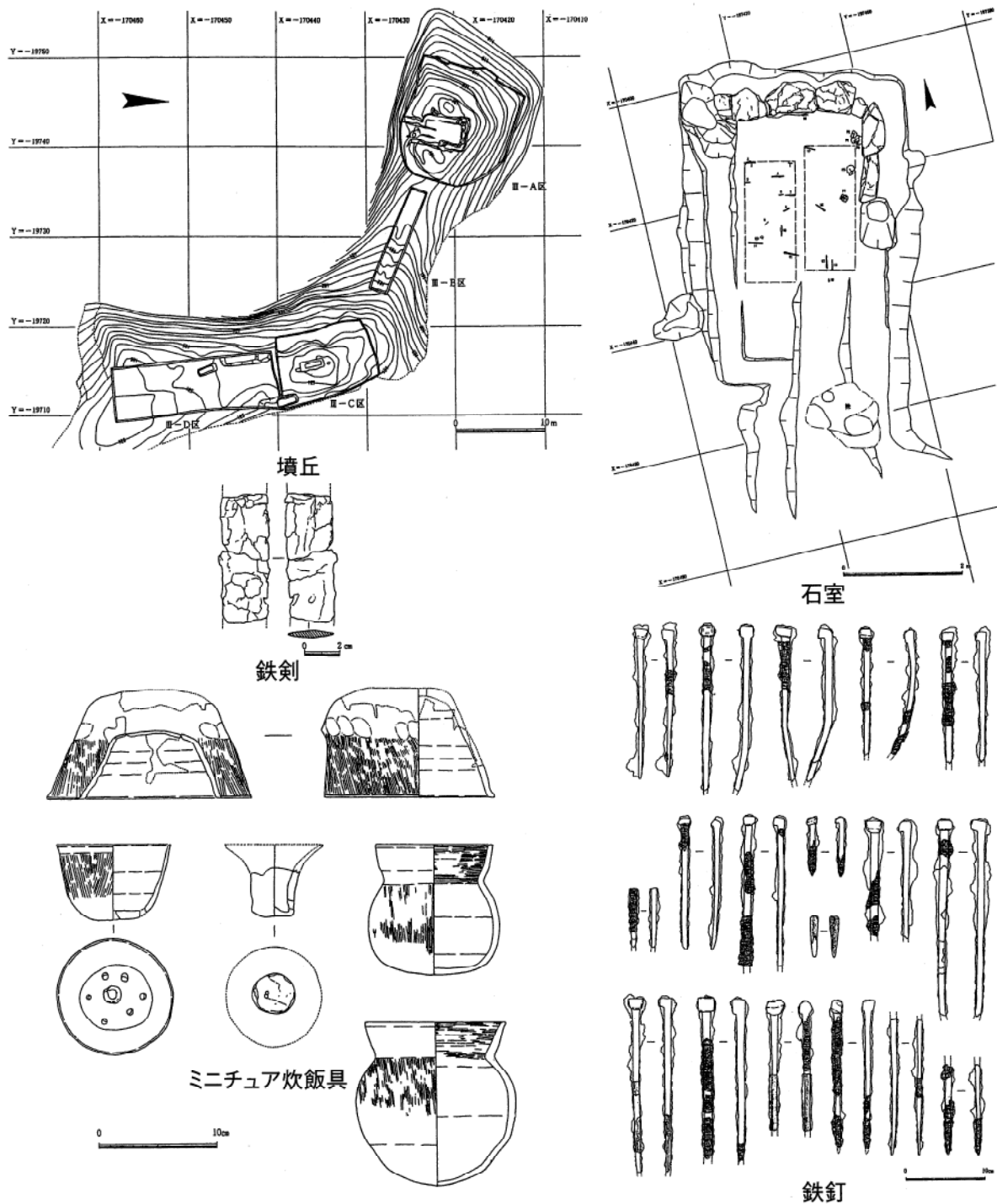
貝吹山の南側に東西に広く伸びる扇状地性低地があり、その南北の丘陵上には多くの後・終末期古墳がある。北側には与楽古墳群をはじめ真弓籬子塚古墳、与楽カンジョ古墳などがある。これらの古墳群に対峙して南側の丘陵上ではスズミ1号墳が確認された（明日香村2008）。スズミ1号墳は一辺約10m、高さ3m以上の方墳で、主体部である石室は右片袖の横穴式石室である。玄室長約4m、幅約2.2m、羨道長2.8m以上、全長6.8m以上を測る。出土遺物はミニチュア炊飯具（甗・甑・釜）、鉄釘18本、鉄剣が出土した。この調査では、スズミ1号墳のほか、木棺直葬の2号墳、土壙墓、木棺墓が検出され、銅芯金貼の耳環が2号墳と木棺墓からそれぞれ出土した。時期を特定できる遺物は出土していない。



第4図 阿部山カイワラ1・2号墳 (明日香村2011)

(iii)与楽鐘子塚古墳

与楽カンジョ古墳の北西に立地する古墳。径28m、高さ9mの円墳で、大型石材を用いた穹窿状石室を備える。石室全長9.6m、玄室長4.2m、玄室幅3m、玄室高4.2mを測る。羨道



第5図 真弓スズミ1号墳 (明日香村2008)

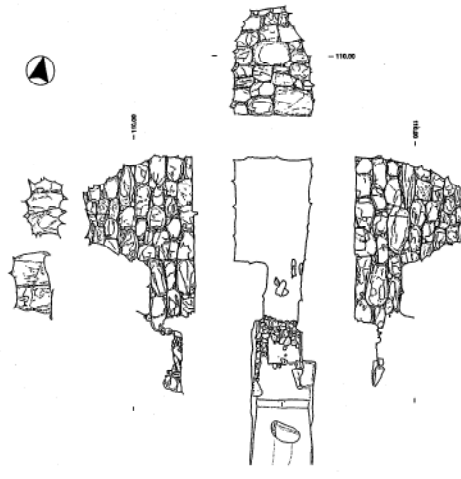
内には閉塞石が残り、20cm大の平坦な石を6～7段積んで衝立状にし、石材の間には粘土を充填している。石室内から土師器、須恵器、ミニチュア炊飯具、耳環、空玉、ガラス玉、銀・金銅製品、馬具（楕円形鏡板付轡、鞍金具、鐙、雲珠、辻金具、三葉文楕円形杏葉、鉸具）、鉄製工具、漁具（鉄製釣針、石錘）、鉄釘、両頭金具が出土した。6世紀後半に築造され、6世紀末までに2回追葬があったと考えられる（高取町2012）。

(iv) 与楽カンジョ古墳

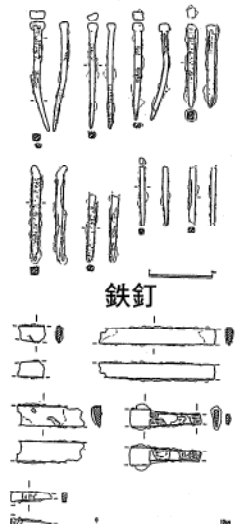
与楽古墳群内にある穹窿状石室を備えた古墳として古くから知られる。墳丘は一辺36m、



墳丘



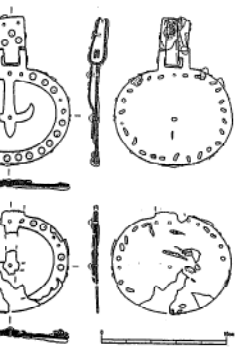
石室



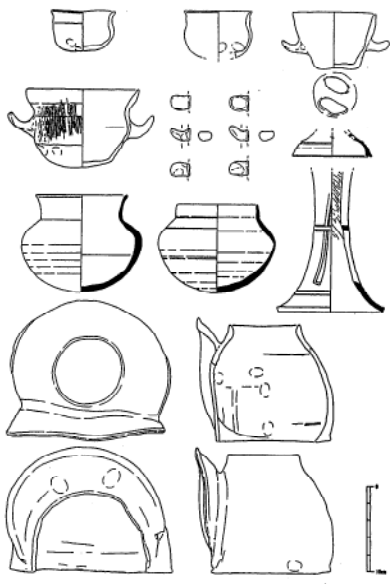
鉄釘



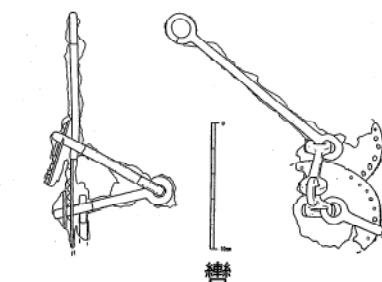
鉄製品



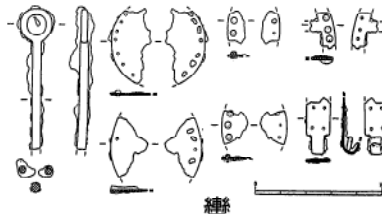
漁具



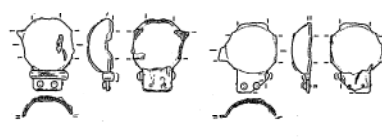
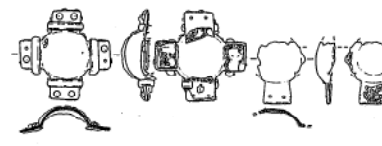
須恵器・ミニチュア炊飯具



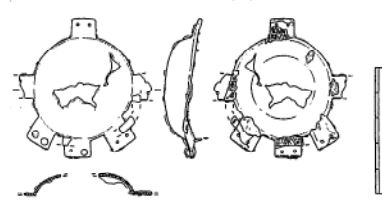
鏡



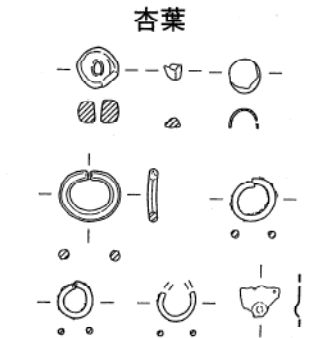
鏡



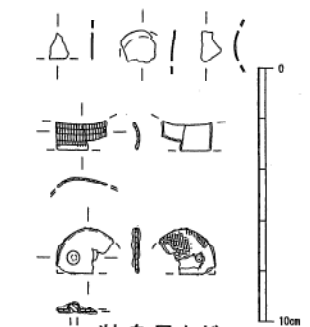
辻金具



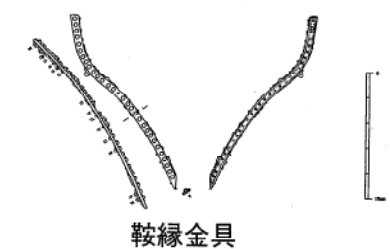
雲珠



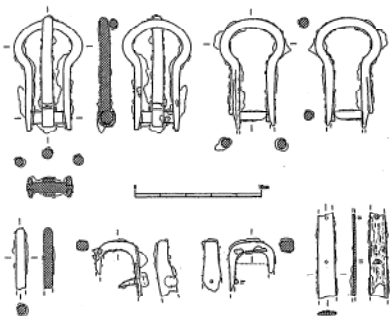
杏葉



装身具など

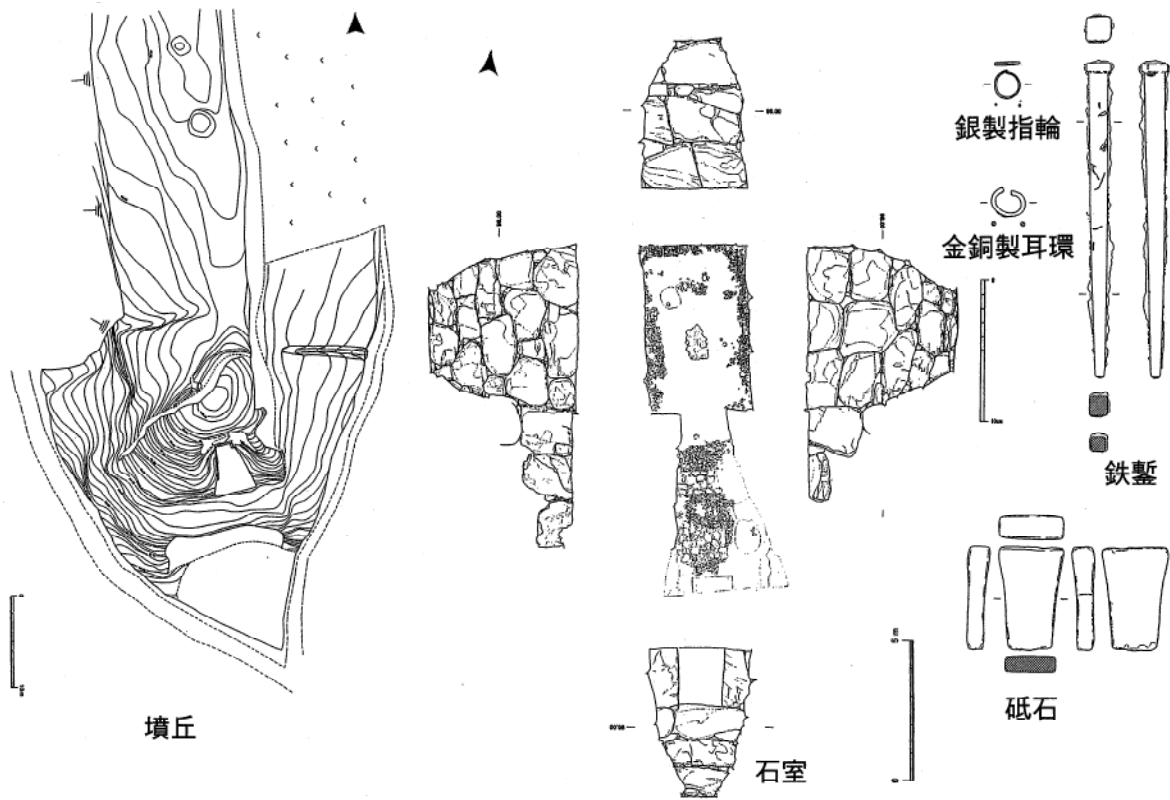


鞍縁金具

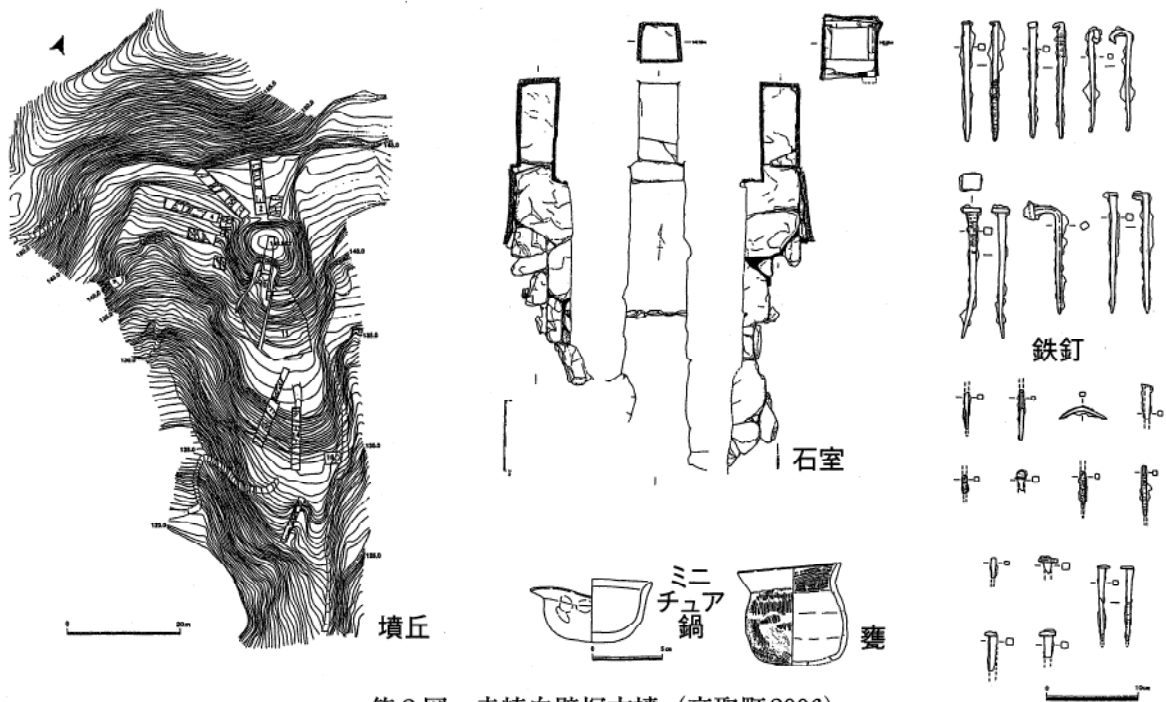


鏡

第6図 与楽罐子塚古墳 (高取町2012)



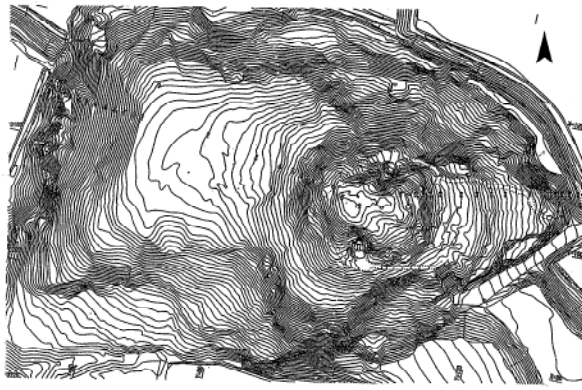
第7図 与楽カンジョ古墳（高取町2012）



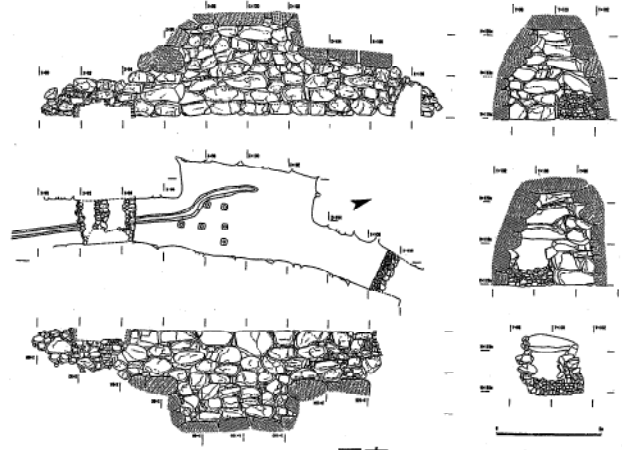
第8図 寺崎白壁塚古墳（高取町2006）

高さ11mを測る2段築成の方墳である。大型石材を積み上げた穹窿状石室で、現室中央には棺台が設置されている。金銅製耳環、銀製指輪、鉄鑿、砥石、ミニチュア土器の把手が出土した。古墳は6世紀末から7世紀前半に築造されたと考えられる（高取町2012）。

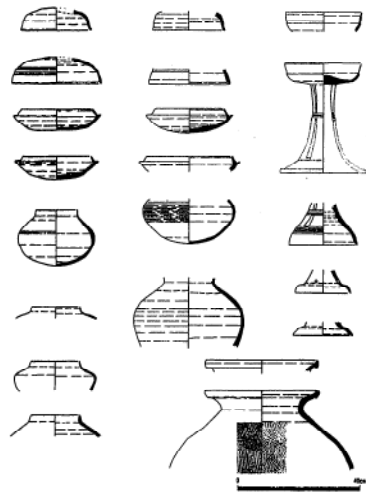
(v)寺崎白壁塚古墳



墳丘



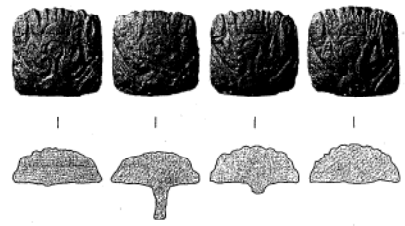
石室



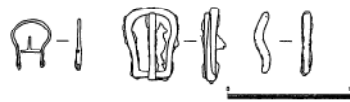
須恵器



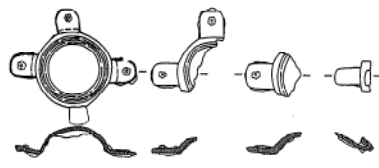
ミニチュア炊飯具



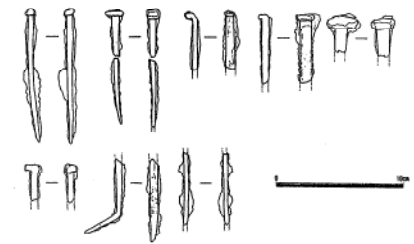
獣面飾金具



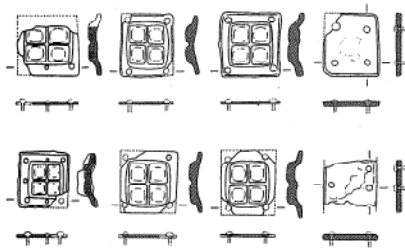
銀象嵌刀装具



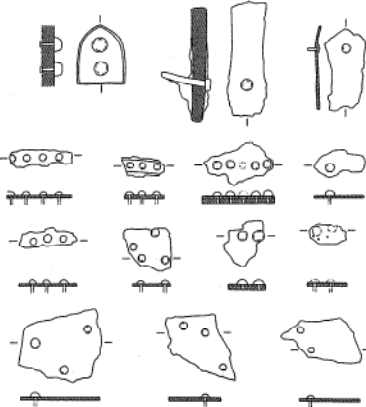
過金具



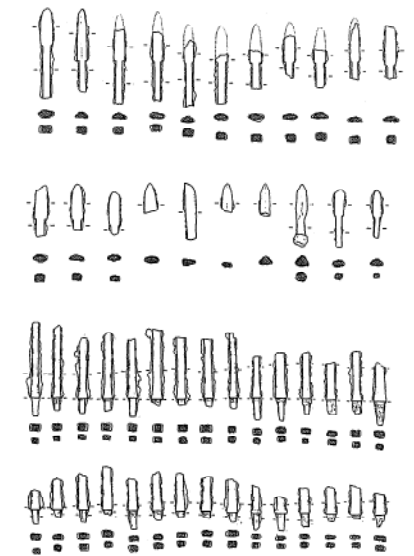
鉄釘



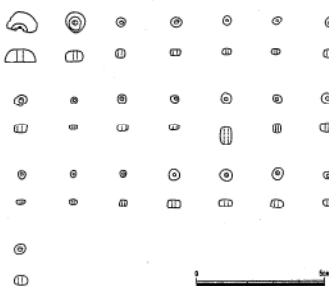
帯飾金具



不明鉄製品

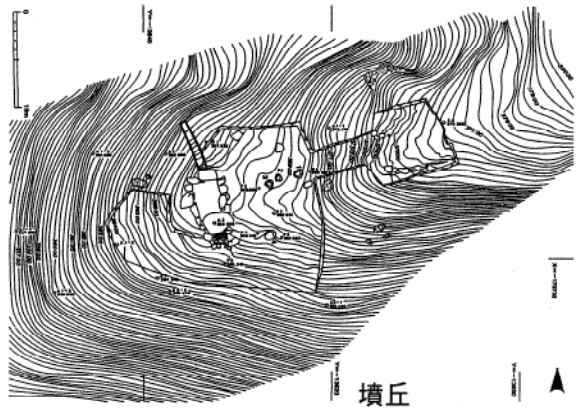


鉄鏃

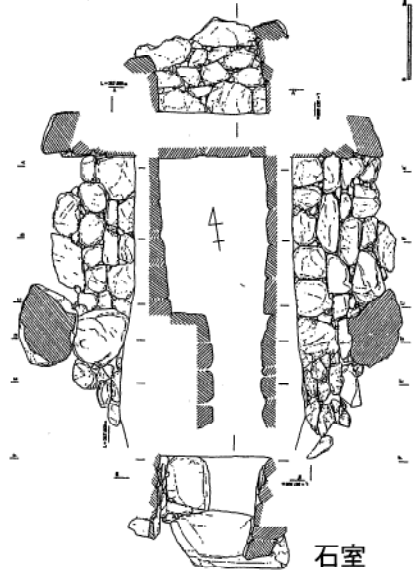


ガラス玉

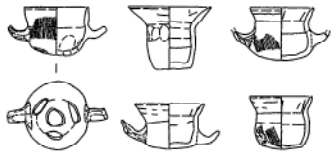
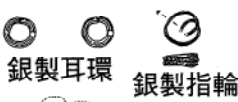
第9図 真弓鑑子塚古墳 (明日香村2010)



墳丘



石室



花形飾金具



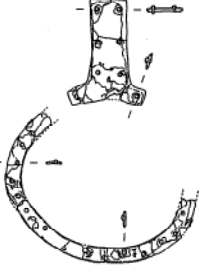
半球形飾金具



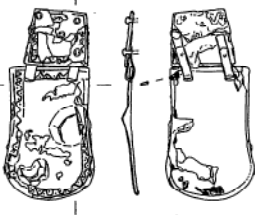
ミニチュア炊飯具



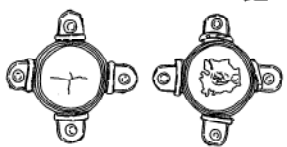
鍔金具



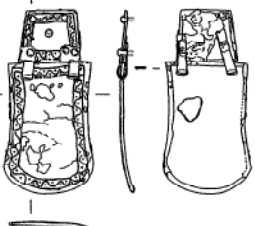
鍔



花卉形杏葉



辻金具



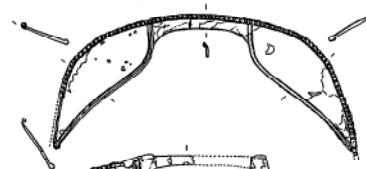
面繫金具



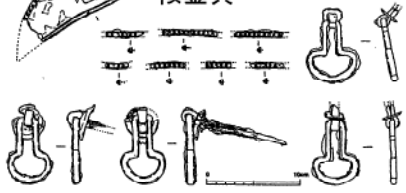
鉄釘



鞍金具



鞍金具



第10図 上5号墳 (樞考研2003)

橿原市の境界に近く、与楽鐘子塚古墳の北西に立地する。墳丘は方台形とも八角形ともいわれ、墳丘南面に壇状遺構があると考えられる。(高取町2006)。埋葬施設は横口式石槨で、石槨の前に前室と羨道が取り付く。全長11mを測り、内面を平滑にした巨石を組み合わせるが、石材と石材の間に漆喰を充填する。石槨内から遺物は皆無であるが、前室からミニチュア炊飯具の鍋、羨門付近から底部穿孔の土師器平底鍋や炊飯具の竈の破片が出土した。木槨に使用された鉄釘も出土した。墳丘や石槨、出土遺物から7世紀中頃に築造された。

(vi)真弓鐘子塚古墳

真弓鐘子塚古墳は与楽古墳群の東側にある単独墳である。古くから石室が開口していたため、羨道が南北両側に取りつき天井部が穹窿状を呈する古墳として早くから知られていた。従前から墳丘については前方後円墳である可能性が指摘されていたが、近年行われた明日香村教育委員会の調査によって、石室規模が石舞台古墳を凌ぐ最大級の横穴式石室であることが判明し、墳丘は径約40mの大型円墳であることがわかった(明日香村2010)。これまでの出土遺物に加え、馬具や獸面飾金具、ミニチュア炊飯具などの出土遺物も新たに確認された。時期は出土した須恵器から6世紀中頃から後半に位置づけられる(明日香村2010)。

(vii)上5号墳

明日香村東部、細川谷古墳群のうちの1つ。直径17m程度の円墳とみられ、大型の石材を利用した横穴式石室である。遺存する天井石から穹窿状天井を備えた穹窿状石室と考えられている。石室内には3つの木槨が埋葬されていた。石室内はかき乱され、石室も崩落していることから、副葬品は3棺のいずれに帰属するかは不明だが、須恵器、土師器、ミニチュア炊飯具、釵子、馬具(花卉形杏葉、辻金具、雲珠、鞍金具、鐙、半球形飾金具、面繫金具)、鉄釘、ガラス玉、銀製空玉が出土した。古墳の年代は6世紀後半から末に築造され、その後埋葬と追葬がおこなわれたが、須恵器では6世紀末、馬具は6世紀前半の様相をみせるなど年代差が認められている(奈良県2003)

(viii)終末期古墳

檜隈地域には7世紀代の終末期古墳が多く分布する。終末期古墳において渡来系要素のある古墳を見出すのは難しい。高松塚古墳とキトラ古墳、マルコ山古墳の石室形態は百濟王陵の陵山里古墳群の影響が指摘され(猪熊2012)、古墳壁画はまさに大陸からの渡来文化を如実に示している。また、マルコ山古墳の北側に7世紀前半から後半にかけて築造された真弓カツマヤマ古墳や真弓テラノマエ古墳は磚積石室を採用するなど、真弓・檜前周辺でみられる多様な石室形態は被葬者を考える上で重要である(西光2012・2014)。

小結

檜隈地域で確認された渡来系の新資料を概観した。渡来系の遺跡・寺院をみると、檜隈寺中心部、つまり檜隈寺周辺において7世紀代の遺構が顕著に認められる。近くに6世紀代に遡る渡来系遺跡がないことからみても突発的に渡来系遺構が形成されたことがわかる。こうした渡来系の遺構突如形成される背景には、7世紀代においても新来の渡来人たちが檜隈地域に押し寄せていたと考えられる。渡来系の古墳では、5世紀後半から6世紀前半に位置づけられる稲村山古墳や坂ノ山古墳、阿部山カイワラ古墳などが飛鳥西南部に多いが、6世紀中頃以降は真弓鐘子塚古墳を嚆矢として与楽古墳群が形成される。このように渡来系古墳の墓域は高取町を中心とした飛鳥西南部から貝吹山南麓の西飛鳥地域に移っていることがわかる。また、7世

紀前半には檜隈寺周辺、檜前大田遺跡、ホラント遺跡のある檜前・阿部山周辺に渡来系の遺構が顕著に認められる。7世紀末になると檜隈寺講堂の瓦積基壇、キトラ古墳や高松塚古墳壁画を最後に渡来系資料はみえなくなる。

檜隈地域の渡来文物を扱うと東漢氏に結び付けられることが多い。今回取り上げた遺跡がすべて東漢氏に結び付けることは難しいが、まったく無関係であるとはいえない。東漢氏は出自が異なる複数の渡来人枝氏がひとつにまとまり、系譜的同祖関係を擬制した氏族集団であり（加藤2006）、壬申の乱では両陣営に分かれて争った経緯があることから、同氏族は一枚岩ではないことは明らかである。東漢氏は集団同士で連帯意識がありながら多様な文化背景をもつため、彼らが残す物質文化も多様であったに違いない。今回の検討の結果、檜隈地域の渡来系遺跡にも画期を認めることができた。しかし、渡来系要素に認定される遺構と遺物を一概に同等な渡来文化の影響とみるべきではないだろう。渡来人が居住し定着していたのか、それとも文物がもたらされただけなのか、今後の検討課題である。飛鳥・檜隈地域における渡来系遺構と遺物の組成や共伴関係を検討することによって、古墳から飛鳥時代における大王と有力氏族、渡来系氏族の集団間関係について明らかにできると考える。

【参考・引用文献】

- 相原嘉之1998「飛鳥地域における古代道路体系の検討」『郵政考古紀要』34冊
飛鳥資料館1983『渡来人の寺－檜隈寺と坂田寺－』
飛鳥資料館2015『飛鳥の考古学2014 縄文・弥生・古墳から飛鳥へ』
明日香村教育委員会1991『村道平田阿部山線改良工事に先立つ発掘調査概要』
明日香村教育委員会1994『明日香村遺跡調査概報平成4年度』
明日香村教育委員会1997『明日香村遺跡調査概報平成7年度』
明日香村教育委員会2008『明日香村遺跡調査概報平成18年度』
明日香村教育委員会2011『明日香村遺跡調査概報平成21年度』
明日香村教育委員会2012『明日香村遺跡調査概報平成22年度』
明日香村教育委員会2014『明日香村遺跡調査概報平成24年度』
明日香村教育委員会2010『飛鳥前代～飛鳥の源流への旅路を往く～』飛鳥の考古学図録⑧
明日香村教育委員会2007『カヅマヤマ古墳発掘調査報告書－飛鳥の磚積石室墳の調査－』明日香村文化財調査報告書第5集
明日香村教育委員会2010『真弓鎌子塚古墳発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書第7集
明日香村教育委員会2013『キトラ公園内遺跡発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書第9集
青柳泰介2005「大和の渡来人」『ヤマト王権と渡来人 日本考古学協会2003年滋賀大会シンポジウム』
青柳泰介2009「橿原地域の「渡来人」と蘇我氏」『季刊明日香風』109 飛鳥保存財団
網干善教1977「呉原寺（竹林寺）とその遺跡・遺物」『仏教史学論集』二葉憲香博士還暦記念会
天沼俊一1916「廃檜隈寺址」『奈良縣史蹟勝地調査報告書』第三集 奈良縣
猪熊兼勝2012「百濟王陵の飛鳥への影響」『季刊明日香風』124 財団法人古都飛鳥保存財団
大脇 潔1994「飛鳥の渡来系氏族と古代寺院」『渡来系氏族と古代寺院』帝塚山考古学研究所
加藤謙吉2002a「東漢氏と檜前」『東アジアの古代文化』111
加藤謙吉2002b『大和の豪族と渡来人 葛城・蘇我氏と大伴・物部氏』吉川弘文館
加藤謙吉2006「飛鳥と渡来人」『続明日香村史』上巻 考古編
加藤謙吉2010「漢氏と秦氏」『日本の対外関係1 東アジア世界の成立』吉川弘文館
木場幸弘2002「清水谷遺跡ナルミ地区第3トレンチ」『大和を掘る』20 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
木場幸弘2008「高取町内紀路沿いの渡来系氏族の遺跡」『季刊明日香風』107 財団法人古都飛鳥保存財団

- 木場幸弘2009「高取町内渡来系氏族の古墳」『季刊明日香風』109財団法人古都飛鳥保存財団
- 西光慎治ほか2012「真弓テラノマエ古墳の研究」『明日香村文化財調査研究紀要』第11号 明日香村教育委員会
- 西光慎治2014「飛鳥の終末期古墳－飛鳥地域における葬地空間の形成過程－」『特別展キトラ古墳壁画』
文化庁ほか
- 西藤清秀1984「御園チシヤイ遺跡発掘調査概要」『季刊明日香風』12
- 関川尚功1988「古墳時代の渡来人－大和・河内地域を中心として－」『橿原考古学研究所論集』第九
奈良県立橿原考古学研究所
- 拙稿2012「阿部山遺跡群出土馬具の再検討」『明日香村文化財調査研究紀要』第11号 明日香村教育委員会
- 高橋幸治2013「檜前大田遺跡の渡来系土器」『明日香小路 飛鳥京』VOL. 38秋冬号 飛鳥京観光協会
- 高取町教育委員会1992「高取町藤井イノラク古墳群 第4次発掘調査報告」高取町文化財調査報告第12冊
- 高取町教育委員会2006「観覚寺遺跡発掘調査報告Ⅱ（第4次調査）」高取町文化財調査報告第31冊
- 高取町教育委員会2006「寺崎白壁塚古墳発掘調査報告書」高取町文化財調査報告第33冊
- 高取町教育委員会2008「観覚寺遺跡発掘調査報告書Ⅵ（第7・8次調査）」高取町文化財調査報告第37冊
- 高取町教育委員会2012「与楽カンジョ古墳・与楽鎌子塚古墳発掘調査報告書」高取町文化財調査報告第39冊
- 堀田啓一1993「渡来人－大和国を中心に－」『古墳時代の研究 第13巻 東アジアの中の古墳文化』雄山閣
- 奈良県教育委員会1970「重要文化財於美阿志神社石塔婆修理工事報告書」
- 奈良県立橿原考古学研究所1983「桧前・上山遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1982年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所1985「桧前・上山遺跡発掘調査概報Ⅱ」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1984年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所1987「高取町与楽古墳群」奈良県文化財調査報告書第56集
- 奈良県立橿原考古学研究所2003「上5号墳－細川谷古墳群－」奈良県文化財調査報告書第92集
- 奈良県立橿原考古学研究所2005「ホラント遺跡－ふるさと農道緊急整備事業高市地区に伴う発掘調査」
奈良県文化財調査報告書第112集
- 奈良県立橿原考古学研究所2009「国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区整備事業に伴う試掘調査」『奈良県遺跡
調査概報（第二分冊）2008年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所2010「檜隈寺隣接地」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）2009年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所2010「薩摩遺跡第8次・第10次」『奈良県遺跡調査概報（第三分冊）2009年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2006「海を越えたはるかな交流－橿原の古墳と渡来人」
- 奈良国立文化財研究所1980「桧隈寺第1次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報10』
- 奈良国立文化財研究所1981「桧隈寺第2次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報11』
- 奈良国立文化財研究所1982「桧隈寺第3次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報12』
- 奈良国立文化財研究所1983「桧隈寺第4次（門・東回廊）の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報13』
- 奈良国立文化財研究所1987「桧隈寺第5次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報17』
- 奈良文化財研究所2010「檜隈寺周辺の調査－第159次」『奈良文化財研究所紀要2010』
- 中野咲2013「＜事例報告＞大和地域」『古代学研究』199 古代学研究会
- 西口壽生2002「古墳時代の飛鳥・藤原京地域」『あすか－以前』飛鳥資料館図録第38冊
- 花田勝広2002「古代の鉄生産と渡来人－倭政権の形成と生産組織－」雄山閣
- 花田勝広2005「古墳時代の畿内渡来人」『ヤマト王権と渡来人 日本考古学協会2003年滋賀大会シンポジウム』
- 坂靖2010「大和の鍛冶集団と渡来人」『韓鍛冶と倭鍛冶－古墳時代における鍛冶工の系譜－』鍛冶研究会シンポ
ジウム2010
- 坂靖2010「葛城の渡来人－豪族の本拠を支えた人々－」『研究紀要』第15集（財）由良大和古代文化研究協会
- 坂靖2012「奈良盆地の支配拠点と渡来人」『日韓集落の研究－弥生・古墳時代および無文土器～三国時代－（最
終報告書）』日韓集落研究会
- 坂靖2012「日本畿内地域百済・馬韓系住居址の検討」『甕棺古墳社会住居址』国立羅州文化財研究所
- 福山敏男1948「奈良朝寺院の研究」
- 森先一貴2014「檜隈寺瓦窯の調査（飛鳥藤原第181－4次）」『奈文研ニュース』No.54 奈良文化財研究所

王陵の地域史研究

～飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅸ～

2015

例 言

- 1、この調査は「飛鳥地域の地域史研究」の一環として行った測量調査である。主な調査地は以下の通りである。
・塚本古墳 奈良県高市郡明日香村大字稲淵159他
- 2、測量調査に際しては、古墳の土地所有者の各位にご理解あるご協力をいただき、順調に進行、完了したことに深謝の意を表したい。また調査・資料収集等に際してご尽力を賜った関係各位に感謝の意を表します。(五十音順・敬称略)
相原嘉之、東 潮、猪熊兼勝、上田俊和、上田裕人、小倉長則、小倉幸夫、河上邦彦、辰巳月美、徳田誠志、寺西定則、長谷川透、宮本昌彦、米田文孝
- 3、遺跡分布図は、国土地理院発行の二万五千分の一「畝傍」と明日香村都市計画図(1:2500)を使用した。
- 4、本書の執筆は西光慎治、辰巳俊輔があたった。
- 5、墳丘測量図の製図は西光慎治、辰巳俊輔が行った。
- 6、関係書類・図面等は西光慎治が保管している。
- 7、本書の編集は西光慎治が担当した。

目 次

例言 目次	(38)
第1章 調査に至る経緯と目的	(39)
第2章 飛鳥地域の測量調査	(40)
第1節 地理的・歴史的環境	(40)
第2節 塚本古墳測量調査報告	(45)
1. はじめに	(45)
2. 測量調査報告	(45)
3. 表採遺物	(45)
第3節 檜隈坂合陵・檜隈墓「兆域」石標について	(50)
1. はじめに	(50)
2. 「兆域」石標について	(50)
3. まとめ	(50)
第4節 狐塚踏査報告	(53)
1. はじめに	(53)
2. 踏査報告	(53)
3. 表採遺物	(53)
第3章 総括	(55)

第1章 調査に至る経緯と目的

飛鳥地域には多くの後・終末期古墳が分布していることは周知のとおりである。しかし未だ資料化されていないものも少なくない。こういった中、1982（昭和57）年以降、奈良県橿原考古学研究所や関西大学文学部考古学研究室等によってキトラ古墳をはじめ牽牛子塚古墳や岩屋山古墳、塚本古墳などの測量調査が実施されている。こういった測量調査は基礎資料の資料化として地域史研究にとって重要な役割を担っていることはいうまでもない。

今回の調査は筆者が飛鳥と周辺地域の地域史像の解明に向けて取り組んでいる「飛鳥地域の地域史研究」の一環として企画し、土地所有者のご厚意・ご協力のもと測量調査・踏査を実施したものである。調査は通常勤務に支障のないことを期したため、休日や年末・年始を利用した断続的な調査となった。調査期間は平成26（2014）年12月～平成27（2015）年1月にかけてのべ6日間行った。

【調査体制】

調査体制は以下の通りである。

塚本古墳	
担当者	西光慎治・辰巳俊輔
調査員	上田裕人（関西大学文学部考古学研究室）

【見学会の開催】

参加者を中心に測量調査の深化と比較検討を行うため、見学会を実施した。見学した古墳は以下の通りである。

赤坂天王山古墳、岩屋山古墳、打上古墳、カヅマヤマ古墳、カンジョ古墳、艸墓古墳、権現堂古墳、小谷古墳、菖蒲池古墳、新宮山古墳、谷首古墳、谷脇古墳、東明神古墳、塚本古墳、花山西塚古墳、花山東塚古墳、真弓籬子塚古墳、マルコ山古墳、都塚古墳、文殊院西古墳、文殊院東古墳

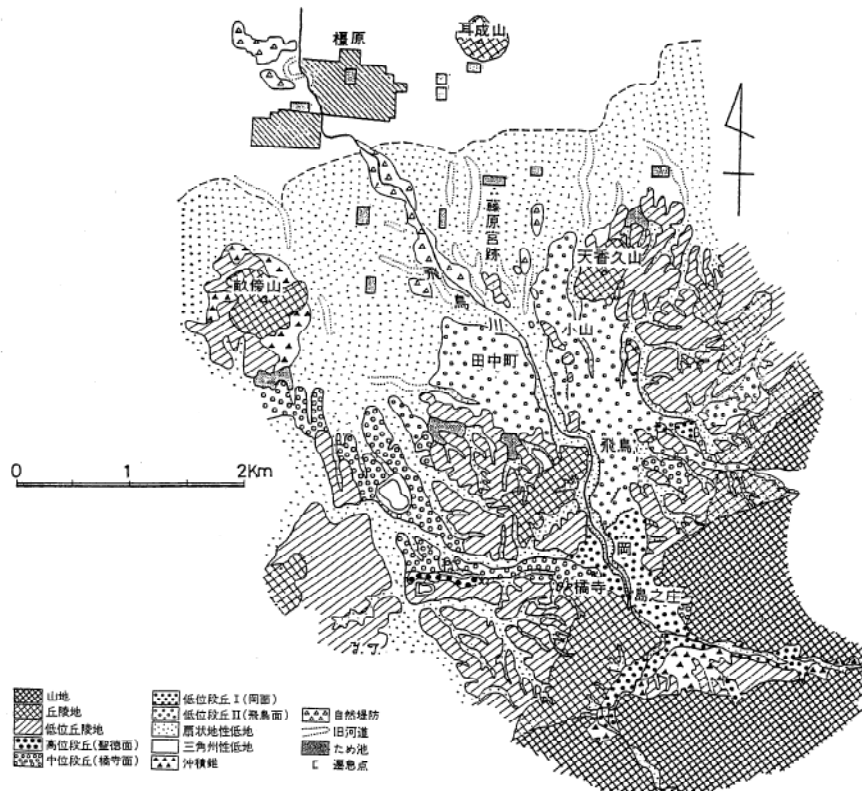
第2章 飛鳥地域の測量調査

第1節 地理的・歴史的環境

【地理的環境】

明日香村は奈良盆地の南端に位置しており、背後には龍門山地が連なっている。龍門山地は奈良盆地と吉野山地を二分する位置にあり、中央構造線にそって吉野川が西流している。吉野川は下流域の和歌山県に入ると紀ノ川と称されている。龍門山地は奈良県のほぼ中央を東西に伸びており、奈良盆地と吉野山地とを繋ぐ幹線道は現在では芦原峠（芦原トンネル）となっているが古代では下ツ道から続く、巨勢路（紀路）や宮滝へと続く芋ヶ峠がありこれらの幹線道は村内を貫いており交通の要衝であったことが窺える。龍門山地は龍門岳（904m）を主峰にして、北に熊ヶ岳（904m）、経ヶ塚山（889m）、音羽山（801m）が連なり、東には多武峰の御破裂山（619m）を、西に高取山（583m）を配している。明日香村は御破裂山、高取山から派生した樹枝状に伸びた低位丘陵に抱かれた地域に位置している。

明日香村内の主要河川は南東から村内を縦断するように一級河川の飛鳥川が、西には高取川があり、それぞれ北流している。飛鳥川は多武峰と高取山から連なる芋ヶ峠、竜在峠付近に源を発している。途中、冬野川や唯称寺川と合流し、甘樫丘の東方で流れを北西に屈曲させ北流を続けていく。一方、高取川には桧前盆地を流れる桧前川が注ぎ込んでいる。桧前盆地は標高100mの等高線に囲まれた1km四方の小氾濫原の支谷に形成されており、西側には幹線道の下ツ道が接している。高取川の西方にある貝吹山から伸びる尾根筋の裾部には高市郡と葛城郡との郡界となる曾我川が北流しており、大字寺崎付近で越峠付近から伸びる前川が曾我川に流れ込んでいる。



第1図 明日香村周辺地質図

【歴史的環境】

〈縄文時代〉

飛鳥地域は飛鳥川と高取川を中心に肥沃な段丘面が形成され、ここを基軸として縄文時代から人類の生活の営みを知ることができる。まず、高取川流域では縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土した松前脇田遺跡をはじめとして、飛鳥川流域では飛鳥池遺跡で草創期の有茎尖頭器と木の葉形尖頭器が出土している。中期～晩期にかけては稲淵ムガンダ遺跡・坂田寺下層遺跡・島庄遺跡・飛鳥京下層遺跡・大官大寺下層遺跡等が存在し、集石遺構や竪穴式住居、土器棺などが検出されている。

〈弥生時代〉

弥生時代になると飛鳥川流域では飛鳥京下層遺跡（岡遺跡）（前期～後期）・山田道遺跡（中期）があり、島庄遺跡では中期の多角形プランを有した竪穴住居が検出されている。冬野川の上流域でV様式系甕が出土したとされており、周辺に集落が存在していた可能性がある。高取川流域では御園アライ遺跡（中期）で土坑などが検出されている。そして、飛鳥時代前夜となる古墳時代がはじまる。

〈古墳時代〉

飛鳥地域の古墳時代については現段階ではまとまった遺跡は確認されていない。そういった中であって坂田寺下層遺跡や島庄遺跡、飛鳥京下層遺跡、水落遺跡、大官大寺下層遺跡等で6世紀前半～後半にかけての竪穴住居等が数棟検出されている。また東橘遺跡や島庄遺跡、川原寺下層遺跡、甘樫丘東麓遺跡、古宮遺跡、上ノ井手遺跡、山田道下層遺跡、阿部山遺跡群等でも竪穴住居や古式土師器、韓式系土器、滑石製玉類や土坑などが検出されている。高取川流域では御園アライ遺跡や松前タバタ遺跡で竪穴式住居や古式土師器が検出されている。飛鳥川流域では右岸の段丘上を中心に縄文時代から人々が生活を営んできたが、6世紀末に飛鳥真神原に飛鳥寺が建立されて以降、寺院や宮殿が立ち並ぶようになる。飛鳥京周辺でも酒船石遺跡や雷丘、甘樫丘等で形象埴輪や普通円筒が出土しており、宮殿造営に伴って削平、消滅した古墳が多く存在していたことがわかる。さらに飛鳥川の支流、冬野川流域には横穴式石室を主体とした約200基を超える細川谷古墳群が展開している。群内には緑泥石片岩の箱式石棺を内蔵した堂ノ前塚古墳や戒成組田古墳、穹窿状横穴式石室を有しミニチュア炊飯具等が出土した上5号墳、石材の一部に切石を用いた打上古墳など特徴のある古墳が多く分布している。また冬野川下流域には一辺約50mの方墳の石舞台古墳が存在し、対岸には都塚古墳や塚本古墳など家形石棺を有した6世紀後半から7世紀初頭にかけての古墳が築かれている。その他、寺川の支流、中の川の上流部には八釣・東山古墳群が展開しており、多くの馬具やガラス玉等が出土している。また曾我川の支流、前川の上流部では6世紀中頃に造営された真弓鐘子塚古墳がある。真弓鐘子塚古墳は玄室の北側に奥室を有し、玄室床面積は石舞台古墳をしのぶ規模であり、石室内からはミニチュア炊飯具をはじめ銀象嵌刀装具、玉類、金銅製馬具、そして獣面を模った獣面飾金具などが出土している。前川の右岸ではミニチュア炊飯具等が出土した与楽古墳群など貝吹山（標高210m）の南側斜面には数百基の古墳が展開し、左岸にあるスズミ1号墳からもミニチュア炊飯具が出土するなど、前川を中心とした周辺の古墳群は東漢氏の奥津城と考えられている。また高取川流域では方格規矩鏡や四獣形鏡等が出土した向山1号墳やミニチュア炊



1. 牽牛子塚古墳 2. 越塚御門古墳 3. 真弓鐘子塚古墳 4. 小谷古墳 5. 益田岩船 6. 沼山古墳 7. 与楽古墳群 8. 岩屋山古墳 9. スズミ1号墳
10. スズミ2号墳 11. カツマヤマ古墳 12. 真弓ミツツ古墳 13. 真弓テラノマエ古墳 14. マルコ山古墳 15. 佐田遺跡群 16. 東明神古墳 17. 佐田2号墳
18. 佐田1号墳 19. 出口山古墳 20. 森カシタニ遺跡 21. 森カシタニ塚古墳 22. 向山1号墳 23. 薩摩遺跡 24. 松山呑谷古墳 25. 清水谷古墳
26. ホラント遺跡 27. 阿部山遺跡群 28. 稲村山古墳 29. 観音寺遺跡 30. キトラ古墳 31. 阿部山廃寺 32. 吳原寺跡 33. 檜隈門田遺跡 34. 檜前大田遺跡
35. 檜隈寺跡 36. 坂ノ山古墳群 37. 桧前上山遺跡 38. 御園チシアイ遺跡・御園アライ遺跡 39. 塚穴古墳 40. 高松塚古墳 41. 火振山古墳 42. 中尾山古墳
43. 平田キタガワ古墳 44. 梅山古墳 45. カナツカ古墳 46. 鬼の組・雪隔古墳 47. 野口王墓古墳 48. 川原下ノ茶屋遺跡 49. 龜石 50. 西橋遺跡 51. 定林寺跡
52. 萬蒲池古墳 53. 五条野宮ヶ原1号墳・2号墳 54. 五条野向イ古墳 55. 五条野城脇古墳 56. 五条野内垣内古墳 57. 植山古墳 58. 五条野丸山古墳
59. 軽寺跡 60. 石川精舎 61. 榎原遺跡 62. 田中廃寺 63. 和田廃寺 64. 雷丘北方遺跡 65. 大官大寺跡 66. カセヤ塚古墳 67. 庚申塚古墳 68. 山田寺跡
69. 上の井手遺跡 70. 奥山久米寺跡 71. 奥山リウゲ遺跡 72. 雷丘東方遺跡 73. 雷丘 74. 豊浦寺跡 75. 石神遺跡 76. 飛鳥水落遺跡 77. 飛鳥寺西方遺跡
78. 飛鳥寺跡 79. 飛鳥東垣内遺跡 80. 竹田遺跡 81. 小原シウロ遺跡 82. 八釣・東山古墳群 83. 東山マキド遺跡 84. 金鳥塚古墳 85. 飛鳥池工房遺跡
86. 酒船石遺跡 87. 飛鳥京跡 88. 飛鳥京跡苑池 89. 甘樫丘東麓遺跡 90. 川原寺裏山遺跡 91. 川原寺跡 92. 橋寺跡 93. 東橋遺跡 94. 鳥庄遺跡
95. 石舞台1~4号墳 96. 石舞台古墳 97. 馬場頭古墳群 98. 打上古墳 99. 都塚古墳 100. 戒成組田古墳 101. 坂田寺跡 102. 飛鳥稻淵宮殿跡
103. 塚本古墳 104. 朝風廃寺 105. 稲淵ムカンダ遺跡 106. 狐塚

第2図 飛鳥地域周辺遺跡分布図

飯具や釵子が出土した坂ノ山古墳群や阿部山遺跡群、銀製釧などが出土した稲村山古墳などが点在している。隣接してある観覚寺遺跡や清水谷遺跡、薩摩遺跡からは大壁建物やオンドル遺構、方形池が検出されるなど檜隈地域周辺には多くの渡来系氏族が蕃居していたことが窺える。

〈飛鳥時代〉

飛鳥時代の7世紀に入ると高取川左岸（真弓丘陵）から右岸（桧前盆地）にかけて多くの終末期古墳が築かれるようになる。真弓から越智丘陵では精美な横穴式石室を有した岩屋山古墳や凝灰岩の巨石を刳り貫いた牽牛子塚古墳や石英閃緑岩の刳り貫き式横口式石槨を有した越塚御門古墳などが存在している。さらに南方には多角形を呈したマルコ山古墳や凝灰岩の切石を積み上げた束明神古墳、蔵骨器を内蔵したとされる出口山古墳などが点在している。また結晶片岩の磚積石室で棺台を有したカツマヤマ古墳や真弓テラノマエ古墳が点在している。真弓テラノマエ古墳では棺台と玄室床面に平瓦が使用されている。桧前盆地になると梅山古墳からカナヅカ古墳、鬼の俎・雪隠古墳、野口王墓古墳が東西に並んで築かれており、南方には八角墳で火葬墓の中尾山古墳や極彩色の壁画で有名な高松塚古墳が存在している。北方の甘樫丘南麓では榛原石を段状に積み上げた小山田遺跡が位置し、さらに高松塚古墳から1.5km南には四神図や天文図、十二支像が確認されたキトラ古墳がある。

飛鳥盆地では蘇我氏の氏寺の飛鳥寺をはじめ、豊浦寺や山田寺、奥山久米寺、坂田寺、定林寺などの多くの古代寺院が築かれる。国家寺院としては百濟大寺（吉備池廃寺）が造営され、その法灯は高市大寺、大官大寺、奈良大安寺へと繋がれていく。その他、斉明天皇の菩提を弔うために川原宮の跡地に川原寺が造営される。また宮殿も乙巳の変の舞台となった飛鳥板蓋宮や斉明天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮や苑池などが造営される。これらの宮殿に近接して酒船石遺跡や飛鳥池遺跡がある。酒船石遺跡では酒船石を中心に丘陵を藤原層群豊田累層の凝灰岩質細粒砂岩を使用した石垣が約700mにわたって巡っており、また丘陵の北側裾部からは亀形石造物を中心とした導水施設と石敷き広場が検出されるなど二槻宮との関連が目ざされている。また石上山石を運んだ狂心渠と考えられる幅約10mの運河跡が飛鳥東垣内遺跡で検出されている。この運河の上流に約1kmにわたって続いており、上流部には飛鳥池工房遺跡が存在する。飛鳥池工房遺跡は7～8世紀にかけての官営工房で炉跡や石組み溝、掘立柱建物の遺構の他、金属・ガラス玉・鋳型・大量の木簡、また鑄造貨幣では和同開珎より遡るとされる「富本銭」が出土している。この他、飛鳥東方の丘陵地には小原シウロ遺跡や東山マキド遺跡、竹田遺跡があり、7世紀代の掘立柱建物群が検出されている。また橋寺西方にある西橋遺跡では7世紀後半～末にかけての庇付掘立柱建物や大量の木簡が出土している。飛鳥寺西方遺跡では石敷をはじめ掘立柱建物が検出されている。宮殿域の中心部から離れた桧前盆地では東漢氏の氏寺とされる檜隈寺や呉原寺等の寺院が建立され、周辺の桧前大田遺跡では大壁状遺構や7世紀代の掘立柱建物群が検出されている。

〈奈良時代以降〉

奈良時代以降の飛鳥地域の様相については西暦694年、政治の舞台は飛鳥京から藤原京へ、更に藤原京から平城京に移るようになると飛鳥地域では顕著な遺構はあまり認められなくなる。一方、雷丘東方遺跡では井戸樺の年輪年代から淳仁朝の「小治田宮」が奈良から平安時代にかけて存続していたことも明らかとなっている。阿部山遺跡群では11～13世紀代にかけての白

磁碗を使用した火葬墓や一辺約4mの墳丘をもつ木棺墓が検出されており、棺内から龍泉窯系青磁碗等が出土している。中世以降になると橘寺や川原寺、飛鳥寺など飛鳥の景観を形成していた堂塔伽藍が落雷等により相次いで焼失し、飛鳥の風景が大きく変貌していく。南北朝期に越智氏が越智城を構え、飛鳥周辺にも貝吹山城や佐田城が築かれるようになる。また越智氏は高取山に逃げ城的な存在の高取城を築き、その後本多氏、植村氏によって改修を重ねながら高取藩の居城として幕末まで存続していく。高取城の石垣の一部には古墳の石材を転用しており、この時期飛鳥地域の後・終末期古墳が破壊されていたことが推測できる。飛鳥盆地には砦的性格をもつ奥山城や飛鳥城、雷城や岡城、そして野口城や貝吹城、観音寺城が築かれるようになる。近世になると伊勢や吉野などの寺社を往来する旅人の案内として分岐点に道標が設置される。西国七番札所である岡寺（龍蓋寺）の門前町が賑わいをみせ、本居宣長も岡の薬屋で一夜を過ごしており、今日もなお古い町並みは往時を偲ばせてくれる。

第2節 塚本古墳測量調査報告

1. はじめに

塚本古墳は奈良県高市郡明日香村大字稲淵に所在する終末期古墳である。1893（明治23）年に著された野淵龍潜の『大和國古墳墓取調書』には「玄室羨道ノ天井石ハ露出セリ内ニ入り之ヲ検スルニ其構造古制ニ可ヘリ然レドモ室内ノ大半ハ土砂ニ埋没シアルヲ以テ充分ノ調査ヲ為スヲ得ス大和志ニ當大字ニ荒墳アルコトハ明記シアレドモ何人ノ塚ナルカヲ詳ニセス且ツ他ニ口碑傳説等ノ考証ニ資スベキモノナシ」と記されている。1921（大正10）年に刊行された『奈良県史蹟勝地調査会報告書』第8輯には「ツカモト塚」「方形」「田」「東西参間南北二間」と記されている。1923（大正12）年に刊行された『高市郡古墳誌』には「大字祝戸から稲淵に至る途中右方二町許行くと、水田の畦畔の所にある。既に発掘された古墳であって、現在は玄室の東壁と思はれる一部と、天井の一部らしい石材だけ存在して居る。里人の話によると二三十年前には完全なる石槨をなして有ったが、何時の間にか破壊せられ、七八年前に里道改修の際石材を割って使用したとの事である。現状から推量すると、この古墳の羨道は南に開けてあって、羨道の入口から玄室の奥壁まで十九尺、幅約十尺くらいの円墳であつたらしい。」と記されている。

1982（昭和57）年に刊行された奈良県立橿原考古学研究所の『飛鳥・磐余地域の後・終末期古墳と寺院跡』では、関西大学文学部考古学研究室による測量調査の成果が報告された。その後、発掘調査が実施され、一辺39×40mの壇を有する方墳であることが明らかとなり、同時に石室や排水溝に関する新たな知見も報告されている。石室は全長約12.5mの横穴式石室で、石室内には凝灰岩の家形石棺が安置され、羨道の排水溝以前の遺構として根石を有する柱穴群が検出されている。羨道幅と合致する部位に一定の間隔で掘削されていることなどから石室の構築に伴う木組み用柱穴と指摘されている。

2. 測量調査報告

塚本古墳は竜門山系より北西方向に伸びる尾根から一部南東方向へ舌状に派生する尾根上に位置している。周辺には石舞台古墳や都塚古墳といった大型方墳や横穴式石室墳を主体とする細川谷古墳群が点在する。東方向の飛鳥川左岸には飛鳥時代の石敷がひろがっており、宮殿との関わりが指摘されている。

墳丘は発掘調査では掘切の一部や墳丘の裾部などが検出されているが現況では水田等に伴う開墾や削平等による改変により、地表面でその痕跡を確認することができない。

石室については切石の両袖式の横穴式石室で発掘調査後、床面より約1mまで埋め戻しが行われており、現在は奥壁及び左側壁の二段目まで確認することができる。石室北側の標高176.500mからは急激な立ち上がりが認められることから、終末期古墳特有の切断面の存在を考えることができる。現在、石室周辺は水田化により棚田状を呈しており、墳丘の形状を確認することは困難である。

3. 表採遺物

今回の測量調査では表採遺物等は確認できなかった。

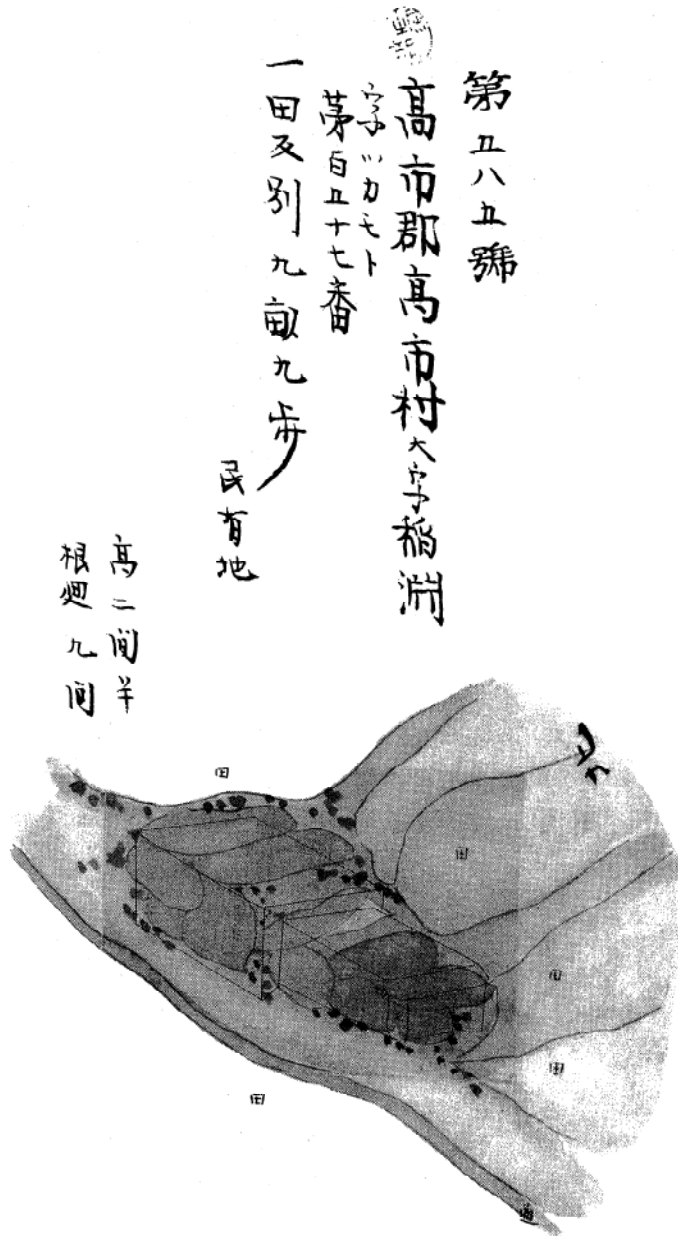
【引用・参考文献】

野淵龍潜 1893 『大和國古墳墓取調書』

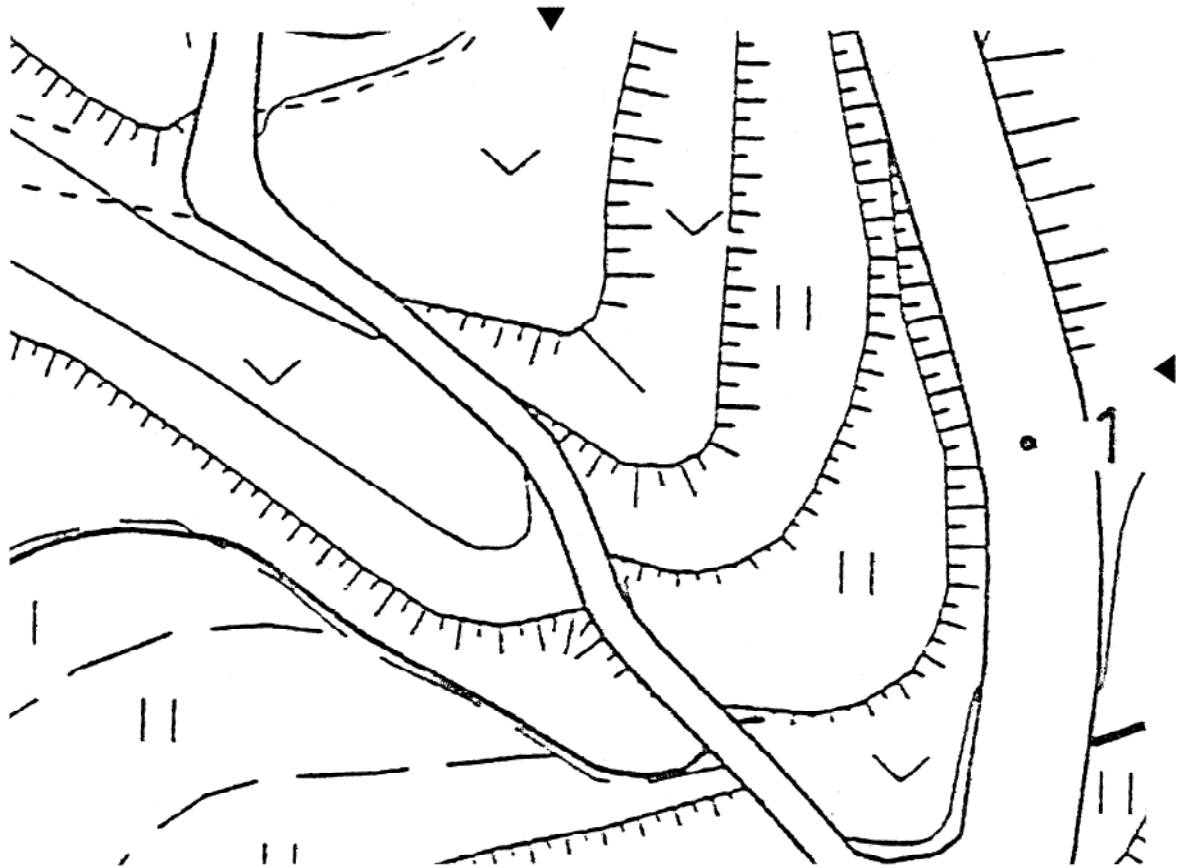
東 潮 1983 「明日香村 塚本古墳 発掘調査概報」 『奈良県遺跡調査概報1982年度（第二分冊）』

奈良県立橿原考古学研究所

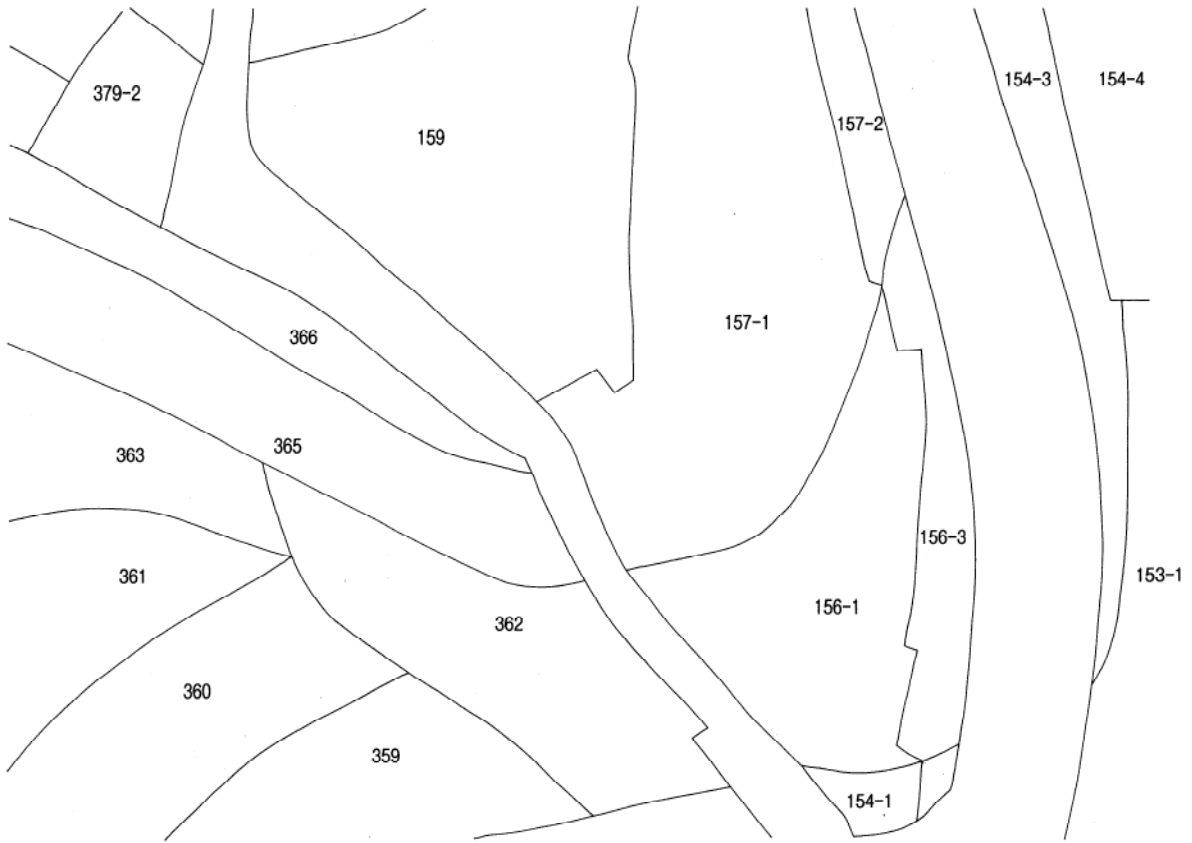
奈良県立橿原考古学研究所1982 『飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡』 奈良県文化財調査報告書 第39集



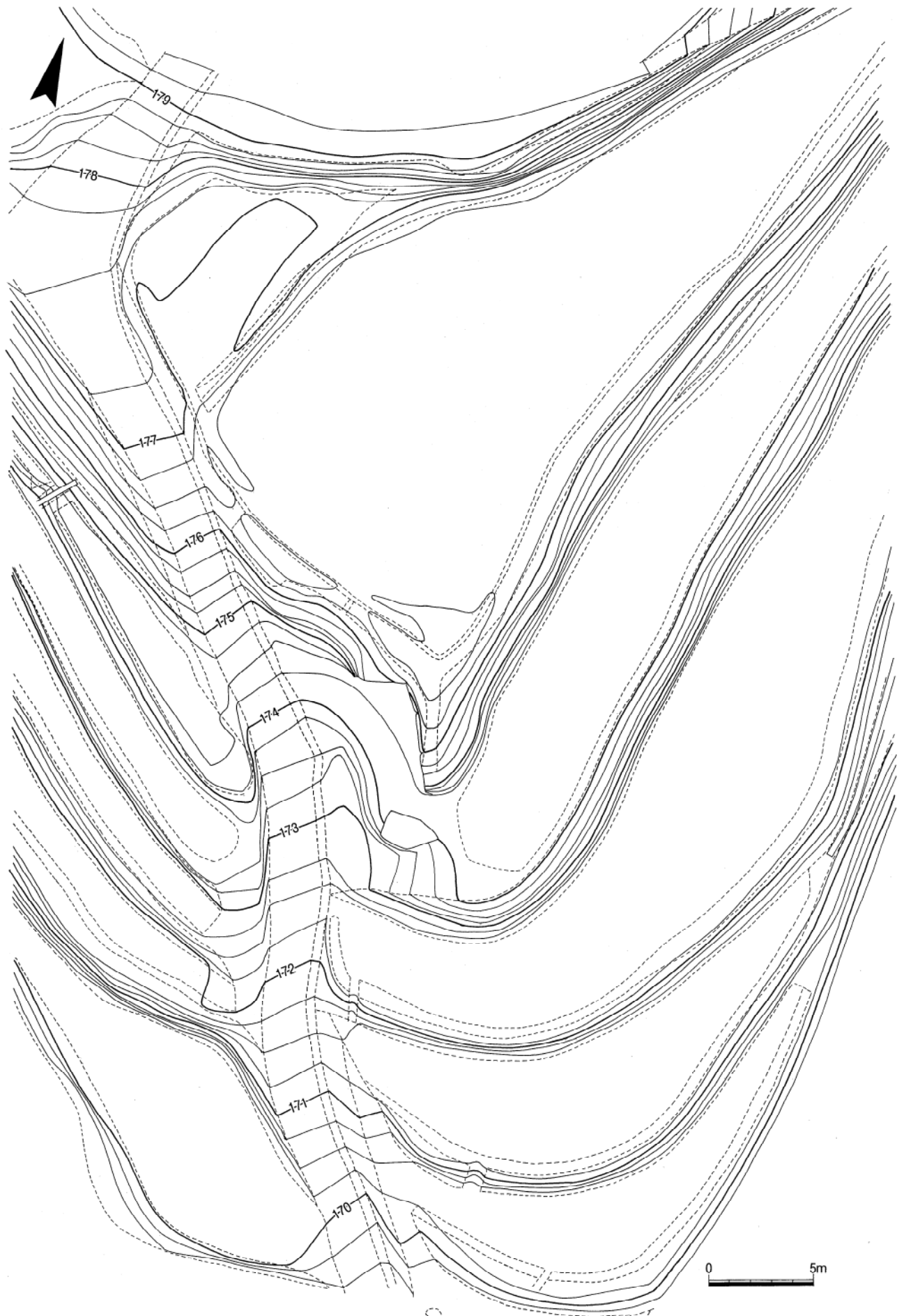
第3図 『大和国古墳墓取調書』（明治23年）



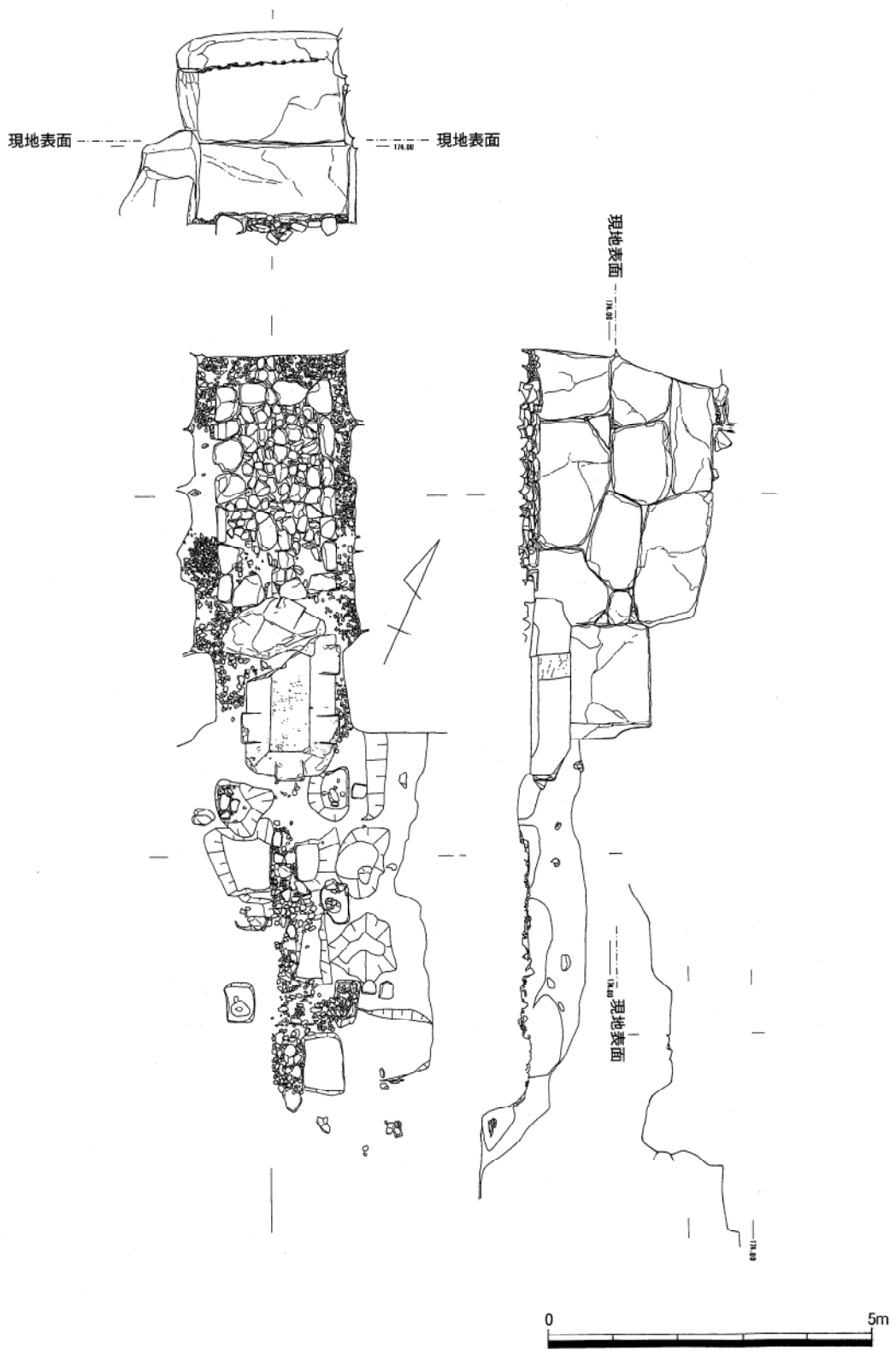
第4図 塚本古墳位置図



第5図 塚本古墳周辺地籍図



第6図 塚本古墳墳丘測量図 (1 : 250)



第7図 塚本古墳石室実測図 (1:100)

第3節 檜隈坂合陵・檜隈墓「兆域」石標について

1. はじめに

平成23年に村内全域の道標の調査のため踏査していた際、大字野口の集落内で道標とは異なる石標を発見した。その成果は昨年報告した通りである（西光ほか2014）。「兆域」と記された石標の存在が確認されたことにより、他の陵墓にも同様の石標が存在することが想定されたため、踏査を行った結果、檜隈坂合陵と檜隈墓において同様の石標を発見した。昨年報告した石標は陵墓より離れた場所で倒れた状態で発見したが、今回は陵墓に近接する箇所では埋め込まれて設置している状態で確認することができた。ここではこの石標について報告していく。

2. 「兆域」石標について

【檜隈坂合陵】

檜隈坂合陵の拝所西側の階段下に設置されている。¹⁾ 石標は花崗岩で作られた角柱型である。規模は現状で高さ27.5cm、幅12.5cm、厚さ12cmを測る。四面中一面のみ丁寧に磨かれており、そこには「御陵兆域」の四文字が刻まれている。設置年月日や設置者等の文字は確認できない。

【檜隈墓】

檜隈墓の拝所北西の通路脇に設置されている。石標は花崗岩で作られた角柱型である。規模は現状で高さ22.3cm、幅12.5cm、厚さ12cmを測る。四面中一面のみ丁寧に磨かれており、そこには「御墓兆域」の四文字が刻まれている。檜隈坂合陵の石標同様に設置年月日や設置者等の文字は確認できない。

3. まとめ

昨年報告した檜隈大内陵に引き続き、檜隈坂合陵と檜隈墓においても同様の石標の存在が明らかになった。檜隈大内陵の石標は陵墓から約200m離れた場所に位置しており、『延喜式』諸陵寮に記されている東西四町、南北四町の兆域にはほぼ一致する箇所であった。しかし今回報告した檜隈坂合陵と檜隈墓の石標については、陵墓に近接する場所に設置されており、『延喜式』諸陵寮の兆域とは若干異なり、再度その設置背景を検討しなければならない。今後、周辺の陵墓を含めた踏査を実施し、古代における飛鳥の様相だけでなく、陵墓としてこれらの古墳が認識されてきた経緯等についても明らかにしていきたい。

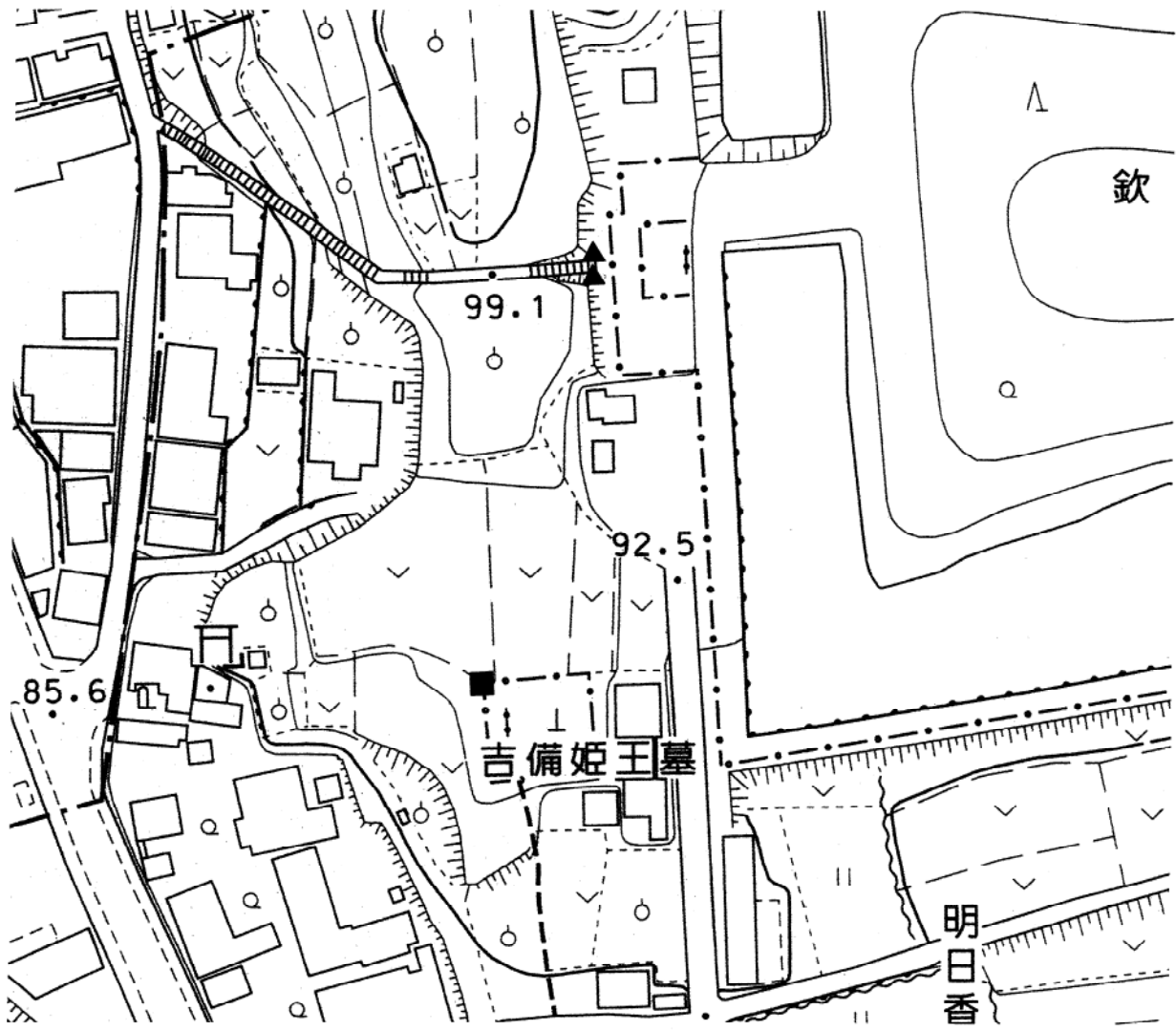
【註】

1) 檜隈坂合陵の参道に沿って同様の石標が埋没された状態で数基確認している。

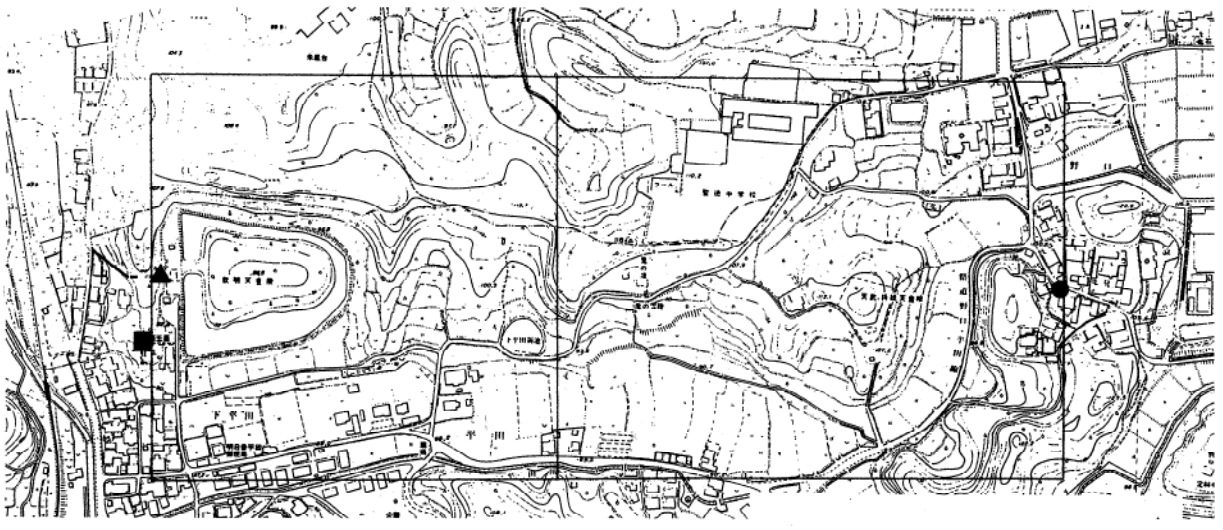
【引用・参考文献】

西光慎治・辰巳俊輔2014「王陵の地域史研究～飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅶ～」

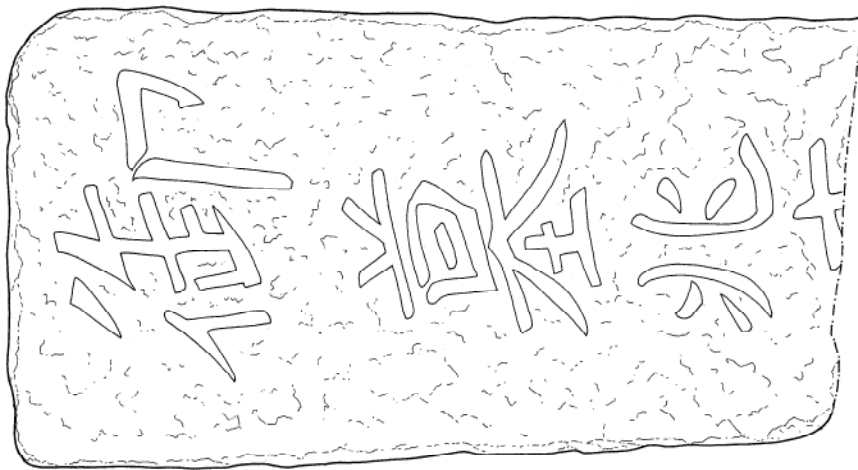
『明日香村文化財調査研究紀要』第13号 明日香村教育委員会



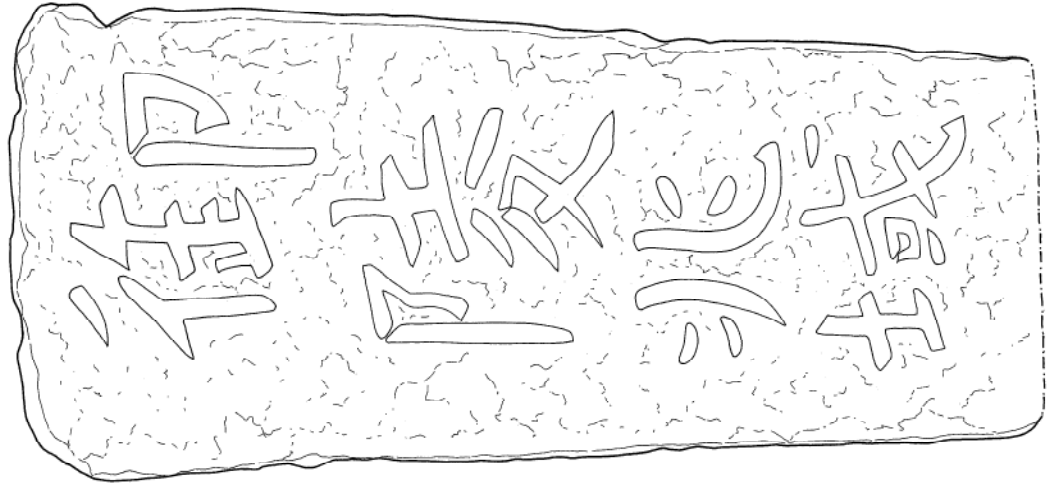
第8図 檜隈坂合陵兆域石標位置図
 (▲：檜隈坂合陵「兆域」石標 ■：檜隈墓「兆域」石標)



第9図 檜隈坂合陵・檜隈大内陵兆域推定図
 (▲：檜隈坂合陵「兆域」石標 ■：檜隈墓「兆域」石標 ●：檜隈大内陵「兆域」石標)



第10图 檜隈墓石標実測図



第11图 檜隈坂合陵石標実測図

第4節 狐塚踏査報告

1. はじめに

明日香村大字越小字狐塚は、牽牛子塚古墳の東方に位置している。『高市郡古墳誌』には「現在は既に開墾されて畑地となって居るがその面積は約三畝歩許である。」と記されている。この場所は戦後に蜜柑が植樹されていたが近年では荒廃した土地となっている。地元の伝承によるとかつてこの丘陵を開墾している最中に大きな石が露出したらしく地元の青年団で動かそうと試みたが石材が大きかったため動かず断念したという。その後この石材は埋め戻されたとされている。また露出していた石材は自然石ではなく加工されていたとも言われている。詳細については定かではないが地元では小字狐塚で石が出たとの話は何人もの方々から伺った経緯もあり、今回この丘陵について踏査を行った。

2. 踏査報告

小字狐塚は東西に伸びる低位丘陵から南東に舌状に張り出した丘陵上に位置している。丘陵では現在も畑地や蜜柑が植樹されており、棚田状を呈している。丘陵の頂部については草木が生い茂り荒れた状態で地表面を確認することができない状態となっている。小字の範囲は丘陵全体に及ぶため広範囲に踏査を実施したが石材が露出しているような場所や古墳状の隆起も現状では確認することができなかった。ただ西方に隣接する越塚御門古墳も地表面に古墳状隆起がないところでも終末期古墳が検出された経緯¹⁾もあり、小字狐塚についても今後さらに周辺部も含め踏査を行い、検証していきたい。

3. 表採遺物

今回の踏査では表採遺物等は確認できなかった。

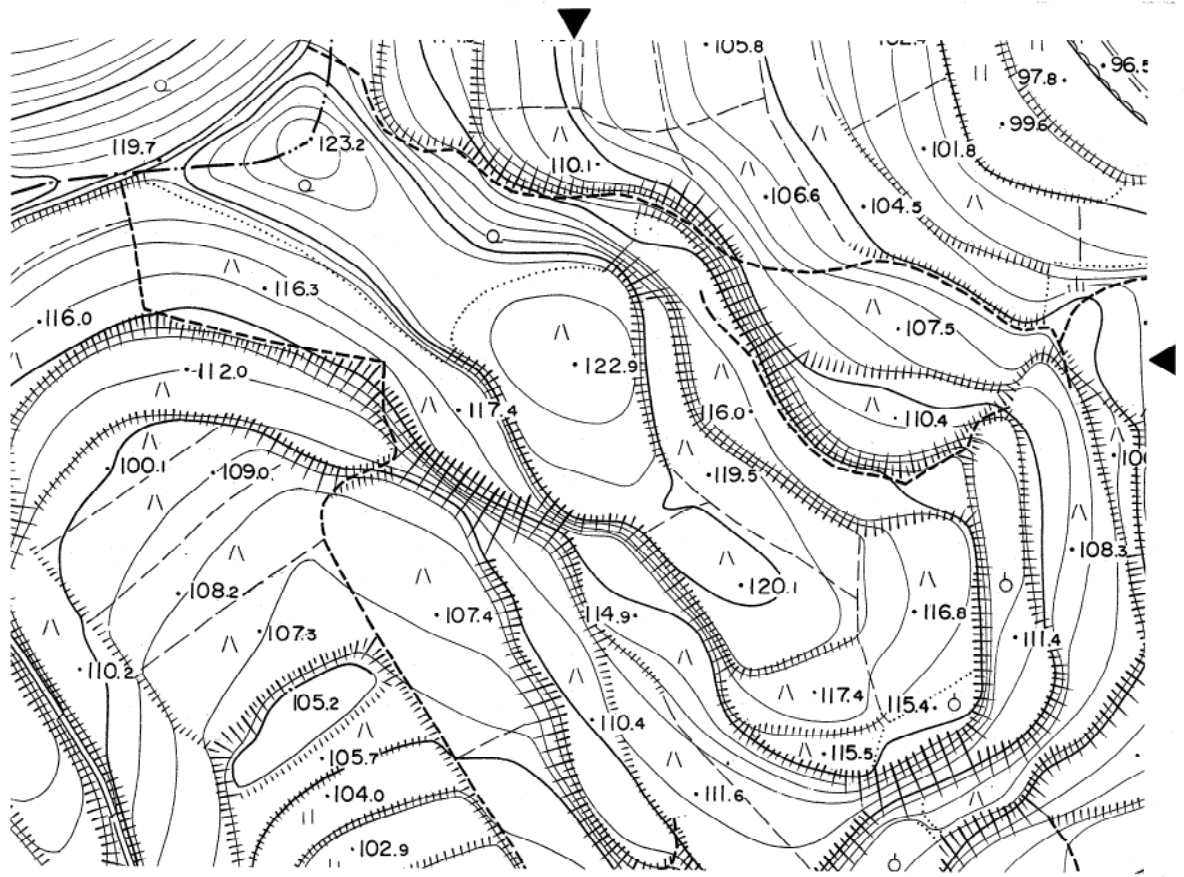
【註】

- 1) 真弓テラノマエ古墳も墳丘が開墾や削平により失われ現地表面には痕跡がなかったが、磚積式横穴式石室を検出している（西光ほか2012）。

【引用・参考文献】

高市郡役所編1925『高市郡古墳誌』

西光慎治ほか2012「真弓テラノマエ古墳の研究」『明日香村文化財調査研究紀要』第11号 明日香村教育委員会



第12图 狐塚位置图



第13图 狐塚周边地籍图

第3章 総括

王陵の地域史研究も今年で17年目を迎えた。これまで明日香村内をはじめ周辺地域の古墳の測量調査を通じて飛鳥地域の後・終末期古墳との比較研究を行ってきた。今回は昨年調査が実施された都塚古墳を考える上で重要な位置を占める塚本古墳について測量調査を実施した。石舞台古墳や都塚古墳、さらには細川谷古墳群と密接な関わりが想定され、現状を確認することにより、この地域の古墳について、再検証を行う有効な手法であると考えている。また、陵墓の石標の類例が増加し、近世における陵墓管理の実態が徐々に明らかになりつつある。測量調査以外でも村内をくまなく踏査することにより、これまで遺跡の希薄であった地域で新たに遺跡を確認することができた事例も少なくない。今後も継続して飛鳥地域の後・終末期古墳を中心に測量調査や踏査を行い、飛鳥地域の地域史像解明に向けた基礎資料の充実を図っていきたいと考えている。

報 告 書 抄 録

ふりがな	おうりょうのちいきしけんきゅう						
書名	王陵の地域史研究						
副書名	飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅸ						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編者名	西光慎治編						
著者名	西光慎治、辰巳俊輔						
編集機関	明日香村教育委員会事務局文化財課						
所在地	〒634-0141 奈良県高市郡明日香村大字川原91-3 TEL 0744-54-5600 FAX 0744-54-5602						
発行年月日	西暦2015（平成27）年3月27日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
塚本古墳	奈良県高市郡 明日香村大字稲 湖159他	29402	17-B-212	135° 49' 9"	34° 27' 40"	201412～201501	学術
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
塚本古墳	古墳	飛鳥時代	横穴式石室、家形石棺	土師器、須恵器		一辺39×40mの壇を有する方墳	

岩屋山古墳の三次元計測から

－作業の概要と課題－

金田 明大・高橋 幸治

I. はじめに

石舞台式石室とならび、横穴式石室による古墳時代社会構造の究明に資する石室として、あるいは「切石積み」石室の指標となる典型例として岩屋山式石室は取り扱われてきた。いずれの古墳も奈良県高市郡明日香村に所在する。そこは6世紀末から8世紀初頭に政治的中枢が宮都とした地に他ならない。多くの研究者が想定するように、両者とも当時の政治的中枢にあって活躍していた人物の墓であることは、ほぼ疑う余地がなく、したがって、これらの古墳を研究することは、当時の重層的な政治的社会的構造を究明することに繋がる。

ところで岩屋山式石室は、白石太一郎氏が型式設定を行い（白石1967）、この論考が長年にわたる研究の嚆矢となっている。しかしながら白石氏の岩屋山式石室に対する時期的な位置付けは、増田一裕氏が端的に指摘するように（増田1996）、研究の前半と後半では異なることから、この問題に関して、乗り越えなければならない、いくつかの課題が横たわっているように思える。

この問題は、岩屋山式石室が「切石積み」石室であると同時に、規格性の高い一群であることとも密接にかかわっており、さらにこの「切石積み」石室における構築技術論は、石材加工技術の問題を内包している。本稿では、岩屋山式石室を取り上げた近年の先行研究に導かれながら、岩屋山式石室がもつ問題点を再度整理しておきたい。

石室の基本構造は、玄室と羨道からなる。奥壁は上1石下1石による2段積み。玄室側壁は上2石、下3石からなる2段積みである。羨道側壁は玄門側が1石、羨門側が2石。羨道は玄門付近の幅が狭く、羨門付近が広い。このことによって、羨門付近からの視覚は、羨道をより長く見せるための視覚的効果を狙ったともいわれている。

構築技術に関しては、石材の加工技術にその特徴が最も端的にあらわれている。すなわち「切石積み」の技術である。その指標は、多くの研究者が「石材表面を平滑にする」こととされるが、太田宏明氏は、ここからさらに踏み込んで、「垂直もしくは水平な目地が隙間なく一直線に通るもののみを切石積みとして定義することによって、明確な指標を設定できる」とする（太田・森下・森本2007）。石材において多くの面を加工すれば、その分だけ加工の手間がかかり、多くの労力を要することになる。同時に、熟練した加工技術も必要とされることから、こういった点に加工技術論を展開させる可能性を見出せよう。ただし、石舞台式石室などにも、平滑にしている面が複数存在することは注意を要する。この点は岩屋山式石室の時期的位置をどこにおくのかといった問題に還ってくる。

石室の系統をどう捉えるのかの議論は、現在も繰り返されており、畿内型石室の中で変遷をたどりつつ、単系統の中で多様性を認める立場に立つのか、多系統が存在する中において共通性を認めていくというスタンスをとるのかによって意見が分かれることになる。太田氏が評価するように、二つの立場は、「共通性と多様性が共存する資料のなかからどの要素を捨象して、その要素から当時の社会のどのような社会的紐帯関係を導き出すのか」という研究視点の違いにより生じている」とされる（太田・森下・森本2007）。具体的には、石舞台式石室から岩屋山

式石室へ変遷すると捉えるのか、石舞台式石室と岩屋山式石室との少なからぬ時期的な並行関係を考え、系統の違いを主張するのかという立場の違いが考えられる。この点に関しては岩屋山式石室の類例として、近年新たな資料も提出されており（陵墓調査室2009a）、岩屋山式石室の時期的な問題を考える上で重要な材料となる（小栗2010）。しかし土器型式でいえば1型式分の差といった繊細な問題である。

同様に、岩屋山式から岩屋山亜式への変遷過程も、系統の違いからくる問題を内包する。岩屋山式石室の玄室にみられる奥壁、側壁における石材使用数の基本原則がくずれ、1石化の方向へ進む現象は、単系統における時期差か、多系統におけるバラエティーの1要素と捉えるかによって、その評価が分かれよう。

いずれにしても、石室の「切石積み」は、横口式石槨にみられる切石使用の影響を多少なりとも受けており、この系統の埋葬施設との関連性を抜きには語れない。例えば近年の調査を鑑みれば、横口式石槨の初現形態とされる大阪府南河内郡河南町シシヨツカ古墳の羨道部において6世紀末頃の年代観が与えられているTK209型式の須恵器が出土をみたことは、この問題に少なからぬ影響を及ぼしそうである（太田・森下・森本2007）。

横口式石槨との関連性でいま一つ考えられる問題は、尺度論への展開である。この問題も「切石積み」石室を取り扱ううえで欠かせない属性の一つであり、詳細な検討が行われている（和田1992）。和田氏が指摘するように、石室の設計に1尺単位での秩序が推測されるとするならば、計測値は重要な指標となり得るだろう。

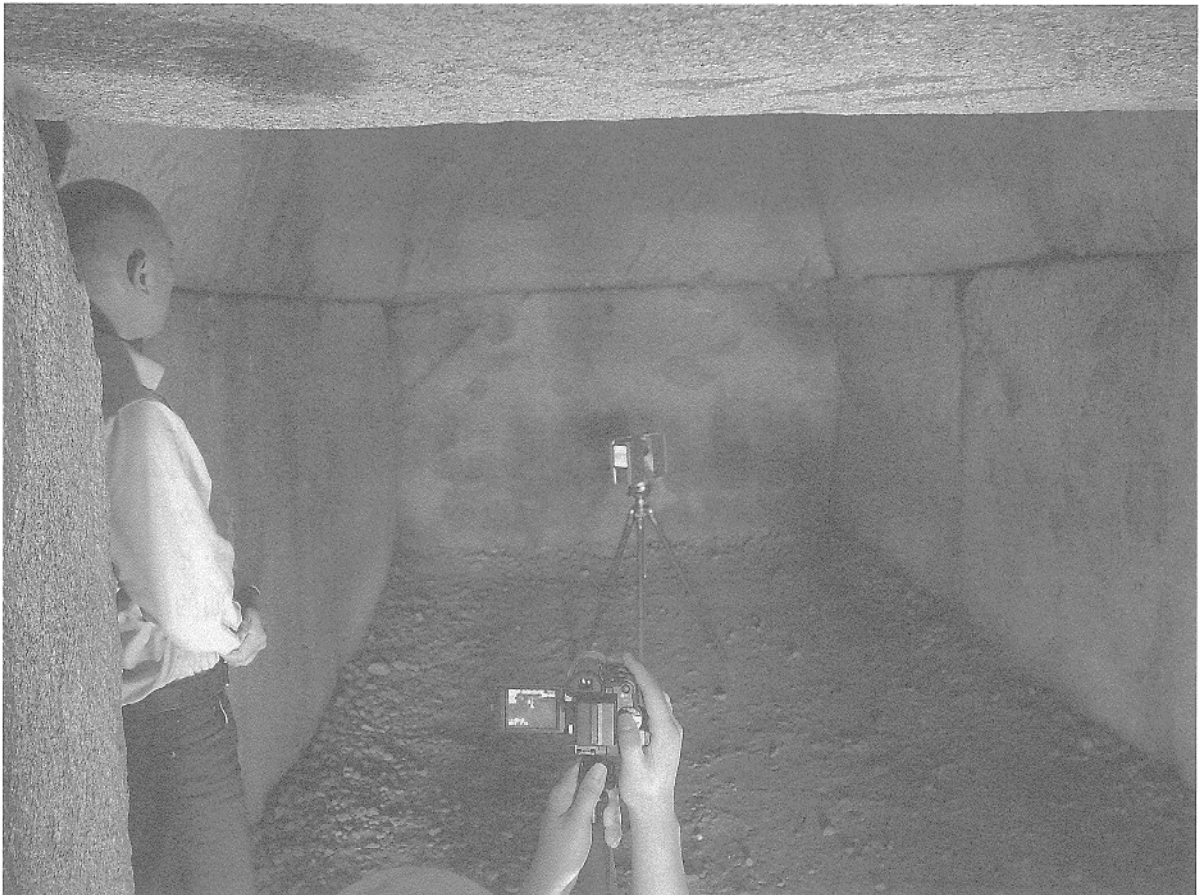


図1 レーザースキャナー計測風景

岩屋山式石室のもつ問題点を再度整理した。浮かび上がった課題のいくつかに貢献できる表現方法の模索や計測技術の可能性を探ることが、今回の三次元計測の目的のうちの一つでもある。このような問題意識のもと、計測に関する計画と現地での作業を進めた。

Ⅱ. 計測の経緯と経過

ほとんどが三次元の形状を有する文化財の形状情報を表現する上では、三次元データによる記録がのぞましいことはいうまでもない。

近年、三次元計測は多様な方法が開発、提案されており、文化財の記録を目的としたときに有効な手段も増加しつつある。

奈良文化財研究所（奈文研）では1954年より写真測量による文化財の三次元計測を研究・実践してきた（飛鳥資料館1997）。近年は三次元レーザースキャナーおよびデジタル写真計測による計測の研究を進めている。

この分野について連携して研究を実践しているNICT（情報通信機構）の門林理恵子氏から、ナレッジキャピタルトライアル2011において、考古資料の三次元データをコンテンツのひとつとして利用できないかとの提案を受け、そのひとつとして横穴式石室を魅力的な対象と考えた。横穴式石室は日本列島の広域に存在し、技術的な側面など多様な考古学的情報を有する対象であるが、比較的大型かつ複雑な遺構であり、記録には労力と時間が必要であった。三次元計測手法の活用はこの課題に適切に応えることを可能にすると考えている。このため、この機を利用して、これらの実践的な検討を実施することが今後の学術的な研究と、成果の社会還元



図2 SfM計測風景



図3 レーザースキャナーによる計測成果

すると考えた。このイベントはうめだ北ヤード跡地の再開発によって2013年に誕生したグランフロント大阪の一施設であるナレッジキャピタル設立の事前イベントであり、国内外における社会的な注目度が高いことから、関西地域の観光や文化財への関心の向上にも大きく寄与すると考え、計測対象として明日香村の古墳で計測を実施するのが効果的であると判断し、明日香村教育委員会に計測の許可を依頼した。この結果、村教委、NICT、奈文研の三者の共同研究として実施することとした。

複数の候補の中から、計測対象として岩屋山古墳を選定した。これは、当該期を代表する指標的な石室であること、切石積みの石室であり、限りある時間内での複数手法の試験をおこなう上で計測がしやすいと考えること、石室内部まで広く開口しており、機材などの特殊な工夫が不要なこと、成果に興味を得た人々の見学がしやすいことなどがある。

Ⅲ. 計測方法と作業の概要

1) レーザースキャナーによる計測

レーザースキャナーによる計測はレーザースキャナーによる計測の実用性と成果の検討を主な目的として実施した。使用した機材はScanstation2 (Leica Geosystems社) および FOCUS3D (FARO社) である。Scanstation2は奈文研が使用しているものと、日文研宇野隆夫教授(当時)・山口欧志氏の協力を得て2台体制で計測を実施した。FOCUS3Dは、機器評価用のデモを兼ねてFARO社の岸部慎太郎氏に計測をお願いした。

現地での計測は2011年7月14日に実施した(図1)。付加作業として、測量に利用されたと

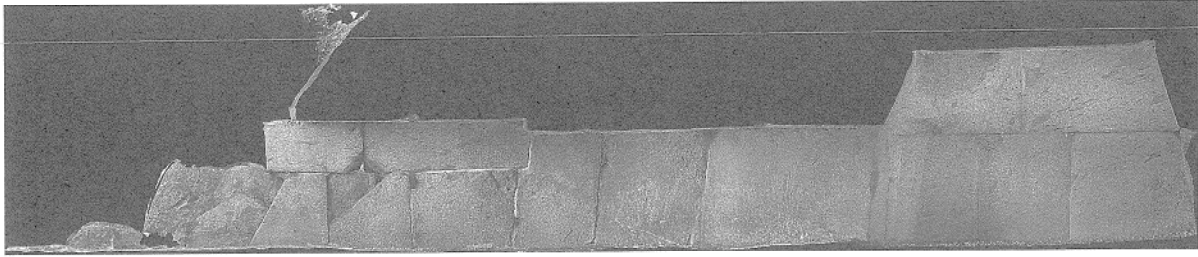


図4 SfMによる計測成果

考える既設の測量杭をRTK-GPSにより計測をおこなった。測定座標は測地成果2000に基づく平面直角座標（VI系）で記録している。

計測後の解析の結果、ほぼ欠損なく石室の図化が可能な三次元データを得ることができた。

2) SfMによる計測

Computer Vision (CV) 技術の進展により、Structure from Motion (SfM) 技術による三次元計測が注目されている。従来の方法に比べより簡便に低コストで利用ができることから横穴式石室の計測においても有効な手段である（金田2014a）。

この利用においては、特徴点間の直接計測による計測との比較をおこない、伝統的な手作業による計測に代わる手段としての有効性を示すことができている（金田2014b）。

これらのことから、幅広く共有が可能な新たな計測手法として、より精度の高いレーザースキャナーとの計測成果の差異の検討を主な目的とし、本報告に先立ち、岩屋山古墳においても計測をおこなった。

現地での計測は2014年2月12日に実施した（図2）。

IV. 成果と今後の展望

レーザースキャナーによる三次元モデルは、高速なFOCUS3Dでは、現地作業を30分程度で終了することができた。成果は、ナレッジキャピタルトライアル2011にてタイルドディスプレイによる三次元表示の基礎データとして使用された。

SfMについても、現地での作業時間は写真撮影が1時間以内、簡易なモデル形成によるデータのチェックを含めて2時間半程度であり、現地での作業時間を短縮できた。ここでは、それぞれの計測成果の三次元モデルを示す（図3・4）

今後、取得したデータの更なる活用と学術面での貢献を目的として、データの解析と公表を進めたいが、今回はなしえなかった。今回は速報的な報告にとどめ、詳細な計測データについては後日報告をおこないたい。

本稿はIを明日香村教育委員会文化財課主任技師 高橋幸治が、IIからIVを奈良文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究員 金田明大が執筆した。

引用・参考文献

飛鳥資料館1977『遺跡を測る 飛鳥資料館図録第30冊』

石井智大 2007「横穴式石室に関する用語 - 研究集会の開催にあたって近畿地方を中心に -」『研究集会 近畿

の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局

太田宏明 2007「横穴式石室における伝播論 ～横穴式石室伝播過程比較検討方法論の提唱～」

『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局

太田宏明・森下章司・森本徹 2007「近畿の横穴式石室をめぐる諸問題」『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局

小栗 梓 2010「<付論>岩屋山式石室をめぐる」『大阪府立近つ飛鳥博物館図録50 大阪府立近つ飛鳥博物館平成21年度冬季特別展 ふたつの飛鳥の終末期古墳 河内飛鳥と大和飛鳥』大阪府立近つ飛鳥博物館

金田明大 2014a「SfMによる近接写真計測の遺跡への応用」『日本文化財科学会第31回大会研究発表要旨集』pp.368-369.

金田明大 2014b「Structure from Motion による遺構計測の試行」

『奈良文化財研究所紀要 2014』独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 pp.44-45.

白石太一郎 1967「岩屋山式の横穴式石室について」『ヒストリア』第49号

白石太一郎 2005「1 前方後円墳の終焉」『古代を考える 終末期古墳』吉川弘文館

新納 泉 1995「巨石墳と終末型古墳の編年」『考古学研究会40周年記念論集 展望考古学』考古学研究会

土生田純之 2005「5 終末期の横穴式石室と横口式石槨」『古代を考える 終末期古墳』吉川弘文館

増田一裕 1996「畿内大型横穴式石室の技術的展開と歴史的動向」『日本考古学』第3号 日本考古学協会

宮本香織 2007「“畿内型”横穴式石室の諸問題 -西日本における“畿内系”石室の抽出をとおして-」

『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局

陵墓調査室 2009a「聖徳太子 磯長墓の墳丘・結界石および御霊屋内調査報告」『書陵部紀要』第60号

陵墓調査室 2009b「来米皇子 埴生岡上墓の墳丘外形調査報告」『書陵部紀要』第60号

和田晴吾 1992「14 群集墳と終末期古墳」『新版[古代の日本] 第5巻 近畿I』角川書店

明日香村文化財調査研究紀要

—第14号—

発行 明日香村教育委員会 文化財課
〒634-0141
奈良県高市郡明日香村大字川原91-3
TEL 0744-54-5600 FAX 0744-54-5602

発行日 平成27年 3月27日

印刷 橋本印刷株式会社

BULLETIN
OF
RESEARCH AND STUDY
FOR
CULTURAL HERITAGE
IN
THE ASUKA AREA
VOL. XIV

2015

PUBLISHED BY
ASUKA VILLAGE BOARD OF EDUCATION

ASUKA, NARA, JAPAN